アメリカGAP特集

UFO contactee

SINCE 1961
GAP-JAPAN NEWSLETTER

UFO/超能力/宇宙哲学

コンタクティー

豊かで素晴らしい他の惑星と生命の連続

UFO、朝霧高原に出現!

デザートセンター円盤着陸事件(2)

オーラ、宝石、超魔術、チャネラー

「アメリカGAP」発足!

UFO-宇宙からの完全な証拠

SUMMER
1990

109

UFO contactee No.109 *Hachiro Kubota, Editor/Publisher, GAP-Japan*

CONTENTS 〈Dedicated to Space Brothers and Cosmic Consciousness〉

〈巻頭言〉UFOとアカデミシズム ― 1
豊かで素晴らしい他の惑星と生命の連続 ― G.アダムスキー 2
UFO、朝霧高原に出現！ ― 8
〈予告〉UFO観測会を実施 ― 13
デザートセンター円盤着陸事件(2) ― 久保田八郎 14
強烈に輝くUFOを見た私たち ― 川野綾子 21
オーラ、宝石、超魔術、チャネラー ― 遠藤昭則／秋山眞人 22
科学-SCIENCE ― 28
GAP短信 ― 30
盛況！東京月例会 ― 31
「アメリカGAP」発足！ ― ダニエル・ロス 32
UFO-宇宙からの完全な証拠〈連載第11回〉 ― ダニエル・ロス 38
〈投稿欄〉ユーコン広場 ― 44
〈予告〉南九州支部大会／仙台・山形合同支部大会 ― 46
長野支部大会／英文版ユーコンNo.6／編集後記 ― 47
本誌バックナンバー掲載記事目録 ― 48
日本GAP全国月例研究会案内 ― 50
〈広告〉新アダムスキー全集 ― 51

◀金星人からジョージ・アダムスキーに伝えられた金星のシンボルマーク。2個の図形の内、左側は宇宙の父性原理(陽)、右側は母性原理(陰)を意味する。円は宇宙をあらわしている。

GAPについて

GAPは「知らせる運動」という意味の世界的なグループ活動で、世界中の人々がUFOの真相について“知る”機会を与えられるべきであるという見地に基づいて1959年にジョージ・アダムスキーによって創始されました。彼の願いは「最大多数の人が現代の真実を発見して、来たるべき時代に眼を転じること、人間はすべて“コズミック・パワー”の子であり、そのパワーの諸法則が宇宙に遍満している事実を確信をもって知ること」にありました。この諸法則は他の世界（惑星）から来る友好的な訪問者からもたらされた“生命の科学”の研究と理解を通じて体得できます。

日本GAPの目的はUFOとスペース・ブラザーズ問題を関心ある人々に伝えることにあり、奉仕活動を通じて真実の解明と宇宙の法則の実践を呼びかけることにあります。その中心思想は次のとおりです。

1. この太陽系の他の惑星群には偉大な発達をとげた人類が居住しているが、米ソ等の大国政府はこの真相を隠している。
2. 他の世界から来る人々はこの世界の政治家や科学者とひそかにコンタクト（接触）しており、危機にひんした地球に対して救援の手をさしのべている。官民を問わずスペース・ブラザーズとコンタクトしている人々が少数存在すると思われるが、通常その真相は洩らされていない。
3. ジョージ・アダムスキーがもたらした哲学は、人類の精神の向上と地球の輝かしい未来を築くために不可欠のものである。

本誌は他の団体・個人と対立するものではなく、政治・宗教と関係のない非営利刊行物です。本誌が読者に対して多少とも役立てば幸いです。

表紙写真

1989年12月23日夜、朝霧高原で行なわれたテレビ朝日の「素敵にドキュメント」に参加した日本GAP会員・堀江健一氏が、出現したUFOを8ミリビデオカメラで撮影した画面の一部分。ビデオ画面では光体が急速に移動する様子がキャッチされている。カメラは三脚に固定していた。

UFOs and Academicism

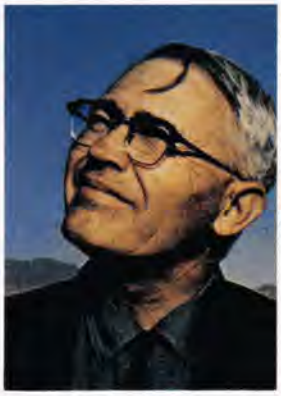
〈巻頭言〉

UFOとアカデミシズム

第二次UFOブームが到来した。昭和五〇年前後の爆発的なブームより静かな訪れであるけれども、それだけに大衆が慣れてきたのだろう。しかし諸外国では日本ほどのマスコミによる報道騒ぎがないところを見ると、日本人がよほど好奇心の強い民族なのか、それともカルミックなものがあるのか、いずれかであろう。アメリカでは知的好奇心が尊重され、UFOの存在を信ずる人は学歴の高い人に多いといわれていた。現在もそうらしい。

ところが日本はその逆で、学歴が高く、しかも有名大学を出た人ほどUFOなるものを信じない傾向がある。日本には学問の分野に入らぬ事象、特に科学的に証明不可能な物事を信じてはならぬという風潮があるようだ。それがインテリの資格になるのだろう。

また日本には宗教と哲学の区別のつかぬ人が多い。形而上的な対象を扱えば「宗教っぽい」と片付けてしまう。「宇宙の創造主」という表現をすれば「何宗か」とくる。物理的に確認出来ぬものなら一切思考の範囲外に除外してしまうのが「科学的」と決め込んでいる人が少なくない。だから光体を見ればすべて物理的な火の玉現象だと片付ける学者が多い。その方が発言としては安全なのだ。



◀クライド・トンボー博士

Dr. Clyde W. Tombaugh

天文学者でUFOを見た人はいないと言う人がある。そうだろう。大学に付属する白亜のドームにこもり、大望遠鏡を駆使して計算で明け暮れしている学者が「UFOを見た。別な惑星から来たらしい」などと公言しようものなら、文句なしに大学をクビになって路頭に迷うことになる。だから彼らは空中を飛ぶ如何なる不思議な物体を見ても、絶対に他言しない。

ところが世界的な大天文学者でUFOを見たと発表した人がいるのだ。一九三〇年一月にアメリカのローウェル天文台で冥王星を発見したクライド・トンボー博士である。一九四九年八月の夜、ニューメキシコ州ラスクルーセスで、博士は六個ないし八個の長方形の光る不思議な物体が電車の窓のように並んで飛ぶのを目撃したと言っている。日本人のM氏の質問に対する博士の英文の回答書簡を編者も見たから間違いない。それには図まで添えてあった。だいいち、見知らぬ日本の一青年に丁寧な返書を寄越す博士の親切な態度は常人のそれではない。

結局、伝統的な学界のアカデミシズムというのが一種の妖怪のごとくに思えるのだが、学者のすべてが否定派ではない。なかにはUFOの存在に知的好奇心を燃やしている学者先生方も少なからずいるにちがいない。だが妖怪の脅威で沈黙を保たざるを得ないのだろう。

しかしUFOやアダムスキーを熱狂的に支持するエキセントリックな常軌を逸した人よりも、全く信じなくても常識豊かな人格者の方がはるかに社会に貢献しているからには、信ずる信じないは二次的な事だ。問題は宇宙開発がもっと長足の進歩をとげて、人間が別な惑星を訪れるようになることが先決だ。しかし別な惑星の驚異的な文明を発見しても、当分は当局が黙秘するだろう。すでに米政府はそれを探知しているにもかかわらず、極秘にしているといわれている。世界の現状から見ればその方がよいかもしれない。

このたび中央アート出版社から「新アダムスキー全集」が出された。全面訳文を改訂の上、新装廉価版なので、入手しやすく、携帯にも便利になった。全八巻の大部分の書名を変えたので、新鮮な雰囲気を醸し出している。訳文を平易にして読みやすくしたので、中学生にも楽に読める。

いまだに幅広く関心が寄せられているアダムスキー問題は、UFOの真相を知るのに不可欠な古典であると言えよう。批判は自由だが、これほどに読者に「考えさせる」書物は無類だろう。しかも編者は数十年に及ぶアダムスキーを主体にするUFO問題を徹底的に研究調査した結果、彼の体験なるものは絶対的に真実であったと断言できるのである。

またアダムスキー撮影の円盤写真と同様の物体を撮影したり目撃したりした人は世界各地にいるし、米政府の調査機関はアダムスキーをひそかにマークしていたという事実もある。今後は次第にアダムスキー問題が浮上して重視される傾向にむかうだろう。「真実は必ず勝つ」という法則に従うのだ。

UFOを見ようと思えば自分で積極的な態度を示す必要がある。まず野外へ出かけて（なるべく夜間がよい）天空に向かってテレパシーで呼びかけるのだ。大声を出してもよいが、出さなくても心中で叫んでもよい。呼ぶときには横柄さを極力避けて丁寧な言葉を使用する。スペースピープルは地球人の想念波動をキャッチするし、絶対に公平であるから、条件さえ良ければ出現するだろう。編者は過去数十回、テレパシー観測を行ない、合計数百機のUFOを目撃しているし、物凄い光景を見たことも何度かある。こうした事を実行せずに書物だけの研究では現実感が起こらぬだろう。まず「見よう」という姿勢をもつことだ。

（久）

Planets as Wonderlands and the Continuation of Man's Life

by George Adamski／Translated by Hachiro Kubota

UFOの真相・連載第4回（完）

豊かで素晴らしい他の惑星と生命の連続

●ジョージ・アダムスキー／久保田八郎訳

一九六三年五月にアダムスキーがベルギーで語った深遠な生命の法則と人間の宇宙的な生き方、別な惑星群の超高度な発達状態に関する問答はついに完了。大先覚者の警鐘の余韻が残る――

過去世の記憶を保つこと

――人間は過去世の記憶を発達させることができるか。

「ああ、できるとも。優れた詩人を例にあげよう。この詩人は人々に読ませるための素晴らしい詩を書くかもしれない。だがこの場合、彼は記憶の中にその詩を非常にうまく保存していたので、それをくり返すことよって、その詩を書くことができるのだ。

（訳注＝その詩人は過去世において、すぐれた詩人であったことがあるので、その当時の作品の記憶を今世にまで持ち越してきているの意味）

だから、われわれが発達させねばならぬのは記憶力なのだ。発達した記憶力があれば、当然のことながら、われわれは過去世にさかのぼって、その頃の記憶をよみがえらせることができるのだ。なぜなら人間には過去世から現世に渡って連続したクサリがつながっているからで、しかもこのクサリは絶対に切れないのだ。

ある新聞記者が私にたずねたことがある。『ヒナとタマゴとは、どちらが先に出てきたのか』と。

私は言った。『もし二歳の子供が自分の考えを持っているとすれば、その子供が答えるだろう』

記者が言った。『いや、子供には答えられないことだ』

そこで私が言った。『ヒナとタマゴは同時に出てきたのだ』

記者は私の言葉に承服できなかった。こんなふうに、ときには愚かな新聞記者もいるのだ。

ヒナとタマゴは同時に出てきたのだ。というのは単細胞というものは、その両方を生み出す潜在能力を持っているからだ。さもなければ、そのどちらも出てくることはできないだろう。

だからこそ、あなたは少年か少女のどちらかの父親になれるのだ。優勢な方が先に出てくるし、またはときとして両方が出てくることもある」

一プラス一は三になる

――転生（生まれ変わり）の記憶は潜在意識が保っているのか、それとも顕在意識が保つのか。

「もう一度説明しよう。潜在意識は隠された記録、すなわち自我なのだ。前者は記録で後者はそれを知覚するのだ。心というものは自分が知らないものを恐怖する。しかも何かを学んでいるのは心だ。潜在意識の中には記録の家がある。それで潜在意識の心がそれを引き出すのだ。

数学を例にあげてみよう。われわれの数学では一プラス一は二となる。ところが別な惑星の数学では一プラス一は三となるのだ。学び方や教え方にいかに大きな相違があるかがわかるだろう。

一人の男と一人の女が結合すれば、二人は一人の子供を持つ。われわれは男を陽で女は陰であると言うのだが――。とにかくその結果、両親と子供で三人になる。だから一プラス一は三なのだ。植物やその他のあらゆる生物体も同じことだ。常に三となる。

それであなたの言う『三位一体』なるものが出てくる。今やあなたは潜在意識と顕在意識と心を持っている。これも三位一体だ。始めの二つによってあなたは心を持つようになったのだ。それで三つになる」

――転生が起こる原因は何か。

「それはあなたの発達の度合にもとづいている。学校へ行くのと同じだ。あなたがある学年であらゆる物事を学んだからといって、次の学年であらゆる質問に答えられるとは限らない。次の学年はもっと程度が高くなるからだ。こうしてあなたは永遠に進級をつづける。これがイエスの言う『父の仕事を

▶ジョージ・アダムスキー。右手に持つ35ミリカメラは現在、訳者が秘蔵している。

のがれられない償いの法則

――われわれのまわりの人たちは皆（生活や病気で）苦しんでいる。あなたもそう思うか。

「思う。私は『苦しまない人間』というものを知らない。というのは、あらゆる人間は故意にではなく、ときどき何らかの過失によって間違った事をやっているからだ。

われわれが知っているように、大自然は人間にかまってはくれない。もし火山が爆発して、われわれがその近くにいたとすれば焼かれてしまうだろう。もしわれわれが利口で、爆発する時期を事前に知っていれば、火山から離れるだろう。

火山活動は必要なのだ。地中の圧力が高まるからだ。火山は安全弁なのだが、もし圧力が火山を通じて出てこなければ、大地から噴き出して粉々にするだろう。その土地にいた人は皆死ぬだろう。しかしかりに三〇〇人が死んだとしても、まだ三〇億の人間が生きている。

おわかりかな。大自然はわれわれ人間に一つの事柄を教えようとしているのだ。しかし、われわれの心は大自然とは別な事柄をわれわれに語っている。つまり人間の心は、かつての間違った生き方をしていたあらゆる世代の人々にならって仕込まれているのだ。」

（訳注＝以上の部分は、大自然は人間にたいして『災難を事前に感知できるようなテレパシックな人間になれ』と教えているのだけれども、人間の心は浮かれ騒いでいるのでテレパシックになれない。これはかつて生きていたあらゆる人々の鈍感な生き方に染まってしまったからだという意味）

――それは不公平ではないか。

「不公平ではない。というのは誰しも償いをしなければならぬ事を、いずれは実行することになるからだ。

たとえば、かつて私の母が或る人にたいして、ひどく恨みを持ち、相手がひどい状態になればよいと思ったことがある。それから二〇年過ぎたが、すべては順調だった。

ところが母に悪い事が次々と起こってきたので、母は私たち子供に言った。『なんとまあ、神様がこんなふうにして私を罰しているのよ』

そこでわれわれは話し合って、私は言った。『お母さん、何をやったというの？　あなたは過去に誰かにたいして悪い考えを起こしたことを思い出せますか』

母はあれこれ考えて、ついに二〇年前に母が好まなかった人たちにたいして今母が受けている災難と同じ事が起こればよいと念じたことを思い出した。それが二〇年後になって返ってきたのだ。

そうだ、もし大自然が人間によってアンバランスな状態にされるとすれば、そのときこそ人間は大自然の主人になるだろう。そして人間はほとんど何でもやれるだろう。（訳注＝だが絶対にそうはならないという意味が含まれている）

たとえば人間が戦争に行くとする。彼は美しい樹木や棕櫚の木、その他あらゆる物を破壊する。大自然がそんなふうに影響を受けるということになると、自然界はその地域に二度と棕櫚の木を生やさないことになりそうなものだが、五年か一〇年後にはまたそこへ棕櫚の木が生えてくる。

大自然は人間が間違った事をやっても、そのあらゆる物事を修復してくれるのだ。しかもその破壊にたいして何らかのかたちで償いをするのは人間なのだ。

公平の法則は常に働いている。次のことを考えられたい。あなたがひどく怒って何かをメチャメチャにしたとする。そこで誰かが言う。『よし、みんな夕食にしよう』

そこで一同は食卓について座り、夕食をとる。みんなは食べて、すべては順調にゆく。

二〇分後にあなたの胃が痛み出す。胃がすっかり不調になったのだ。というのはあなたの心が狂って激怒したために、胃が食物を受け付けなくなったのだ。食物の消化を担当している胃の中の化学者たちが働こうとしない。彼らはストをやっているのだ。そこで不消化を起こした。こんなふうにしてあなたは償いをするわけだ。

い状態で食卓につくとする。するとあなたが食べる肉はよく消化されるだろう。胃の中で消化される状態をあなたは知りもしない。これでもって消化というものが、どんなふうに行なわれるかがわかるだろう。

人間はいろいろな物事と調和していなければ、本人は償いをすることになる。調和していれば何も起こらず、あらゆることが順調にゆく。

そうするために宗教は必要ない。化学の分野でそれを知ることができるのだ。化学の教授が互いに調和しない二つの元素を結合させたとすると、翌日の新聞に研究所が爆発したという記事が出たりする」

憎悪と恐怖に満ちて死んだ人の転生

――人間が殺された場合、来世はどうなるのか。

「もし事故か無知の行為のために死んだとすれば、ときとして本人は完了しなかった仕事をなしとげるために同じような環境に帰ってくる（生まれ変わってくる）。しかし人間が戦争で死ぬ場合は、しばしば憎悪と恐怖をもったまま死ぬ。あなたはそんな憎悪と恐怖に満ちた少年少女たちを知っているかもしれない。彼らは戦争で死んだのだ（そしてそのまま転生してきた）。だから彼らは他人を憎んだり殺したりすることを好むのだが、これは彼らがそんなふうにして死んだからだ。

彼らは老人たちの頭を殴ったりするが、ただ他人を苦しめたいために何かをやっているだけだ。そんなのはアメリカにもいるし、世界中にいる。彼らは前世でそんなふうにして死んだのだ。

このことをあなたが自分で確かめたければ、次のことを考えてみるとよい。

あなたは今夜腹を立てるとする。夜はよく眠れない。翌朝、目覚めてもまだ腹を立てている。戦争で他人を殺すときのように、憎悪心を持って死ぬ人は、最後の想念として憎悪心に満ちたまま死ぬのだ。そして生まれ変わるときには、最初からその想念を持ったままで生まれてくるのだ。われわれは第二次大戦からそのようなあらゆる種類の人々を見ている。

彼らは昼間でも街路へ出て行って誰かの頭を叩いたり殴ったり、ときには殺したりする。本人が捕まったときに「なぜそんなことをしたのか」と聞くと、「自分でもわからない。そうしたかったんだ」と答える。あるいは「おれは人間が憎いんだ」と言うのもいるかもしれない。そして彼らは戦争で起こるあらゆる物事を表現する。

ここにはすでに償いの法則がある。というのは、若い男女を戦争に駆り立てた老人たちは、次のように言いながら戦争に行かせたからだ。

『若者たちよ、戦争に行け、政府は君たちが必要なのだ。君たちは愛国者にならねばならぬ』

彼らは転生によっていま生まれてきている。そして兵隊がやったようなことをすべてやっているのだ。民衆はそれに耐えねばならぬ。耐えるために民衆は生まれてきたのだ。だから民衆にとって楽しい生活にはならない。

（訳注＝このアダムスキーの説明は、戦後六〇年代から世界的に吹き荒れた若者による暴動などを意味する。今の九〇年代のことではない）

こんな事はすべて今発生している。われわれはそのことで学ぶことができるのだ。第一次大戦よりも第二次大戦後の方がもっと多い。というのは第二次大戦がもっと残酷で、より以上に多くの人が死んでいるし、憎悪も強かったからだ。

私は非常に素敵な一人の男を知っている。彼は宇宙航空工学の科学者だった。家族を持ち、妻と子供たちがいた。彼の妻の父親は陸軍大佐だった。彼の両親も素敵な人だった。

ところが四年たって彼が戦争から帰ったとき、家族を殺そうとした。その考えが彼の心で起こったのだ。

ある夜、彼は眠れなかった。彼は私の所へ来て打ち明けた。このことでひどく苦しんだのだ。そしてついに彼はそれを克服した。だが、家族を殺そうという気持は起こったのだ。

この理由がおわかりかな。つまり軍隊で上官たちが彼に教えたのだ。『あらゆる生き物はただの物体だ。狙って撃て。なんでもありゃしない』。こんなふうにして彼を訓練したからだ。

ところで、戦争で死んで、憎悪の想念を持って転生してきた人々の件だが、たしかに彼らは何ものをも尊敬しない。老人の頭を叩いたり子供たちを殴ったりする。なかには虐待されて死ぬ子供もいるので、殺人を犯すことにもなる。そして警察に捕まる。だがまだ一〇代なので懲役二〇年ですむ。もし二一歳以上ならガス室か電気椅子に行かされるだろう」

――これはわれわれの社会の変化が早すぎるからだと思わないか。

「社会はたしかにそれに責任がある。だから社会はそれにたいして償っているのだ。一人の人間を逮捕して裁判にかけ、電気椅子かガスで刑を執行するには、政府は二五万ドルを支出しなければならない。これには大衆が税金でもって支払う必要があるのだ。こんな金があればもっと良い事がやれるだろうに。だが大衆は一人の犯罪人の男か女を排除するために金を出している。だから問題を起こしているのは社会なのだ」

――私は人間だけが物事を変革できると思うのだが。

「そのとおりだ。他のものでは変革できない。人間はもっと理想的な理念を持つ必要がある。そしてそれを生かすのだ。さもないと地球はいつも地獄にな

るだろう。バイブルで言っているのだが、ミカエル（天使長）が悪魔になったときに地へ落とされたというのは、きわめて面白いことだ。そこで思うのに、この世でわれわれは皆ミカエルの友達だ。小悪魔なのだ。人間は互いに苦しめ合い、自分をも苦しめているのだ。（訳注＝これは冗談）」

万人に等しい価値がある

――しかしスペースピープルは、われわれが持っているのと同じ難儀な状態を持たないというのを、どのようにして説明できるか。（訳注＝スペースピープルというのは太陽系の地球以外の偉大な進歩をとげた惑星群の人々）

「それはこうだ。彼らは互いに尊敬し合い、互いに兄弟姉妹とみなしている。だがこの地球ではそんなことはない。われわれ地球人は多くの金や地位などを追い求めている。次の一事を考えてみるとよい。溝を作るためにシャベルを持って泥土を掘っている人がいなかったら、建物が出来るだろうか。出来ない。まずその人が溝を掘る。次に煉瓦職人が来て基礎を作る。それから壁が出来上がってゆく。次に芸術家が来て、壁に美しい壁画を描く。こうして建物は完成する。

だが最初にシャベルで溝を掘る人がいなかったら、芸術家は壁に美しい壁画を描くことはできない。描こうにも壁がないからだ。だからあらゆる人が重要なのだ。人間の才能というものは互いに頼り合っているのだ。

こんなふうにして金星人は万人に価値があると考えているのだ。ところが地球では百万ドル持っていれば価値があるとされる。そこで婦人をレストランにつれて行って豪華な食事を食べさせて、相手の指にダイヤの指輪をはめさせることもできる。そうなると全く「たいした人物」ということになる！これが地球人の価値観なのだ。

だが金星に比べてあまりにも大きな差がある」

――それは価値の問題ではないか。

「そうだ。あらゆる価値は等しいのだ。というのは、リンゴの木が生える前にまず土地が存在しなければならぬ。それから人間がリンゴを取る前にそのリンゴが成長する必要がある。地球というのは素晴らしい世界だ。ただし人々が兄弟姉妹のように互いを理解し、そんなふうに生きるならばだ。多くの楽しい事があるだろう。

だが現在は各種の宗教や各国の政府によって、互いに見知らぬ人のように感じさせられている。私はアメリカ人だけれども、ポーランドで生まれた。それで私は二つの国を持つことになる。だが私はいずれ死ぬ。あなたもみんなも死ぬ。いわば人間はどこかからやってきて、そして死んでゆく。人間はみな同じようにやっているのだ。われわれが死ぬとき、誰にも相違はない。みんな同じなのだ。

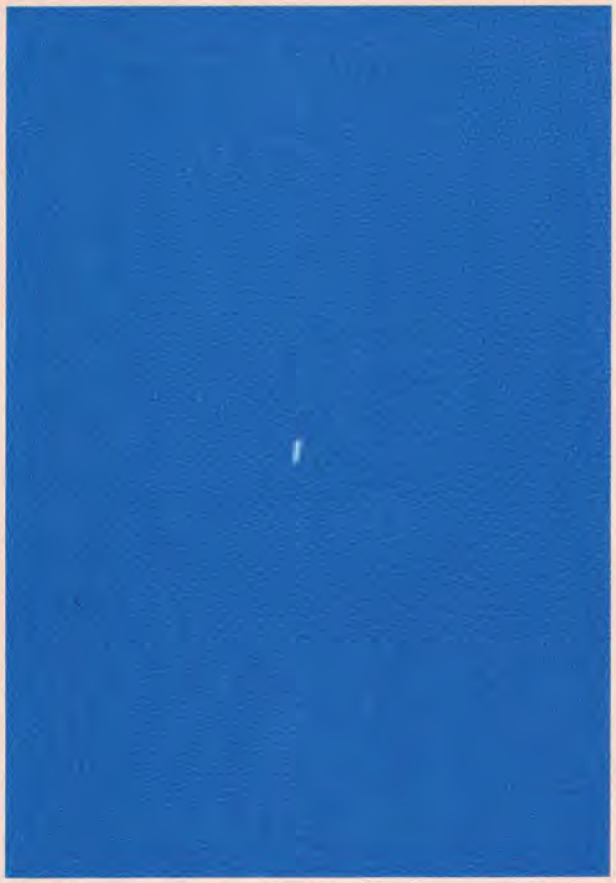
ここに一つお話ししたい面白い事がある。これは率直に言って本当の事なのだ。

何も生えていない、一枚の草の葉さえないようなハダカの土地があるとしよう。私は死ぬ。するとあなたはそのハダカの地面に六フィートの深さの穴を掘って、私の遺体をその中に入れる。盛大な葬式が行なわれ、聖水がかけられ、あなたは手に砂をのせて私の顔にかける。私は穴の中に横たわっている。私は土で覆われる。

六カ月後、私を埋葬した場所に草が生え始める。そうすると私の遺体は良い肥料になる。すると雌牛がやってきてその草を食べる。そこであなたはそ

●日野市上空を飛ぶUFO

一九八七年一二月三一日、午後二時から二時六分頃まで、東京都日野市のGAP会員・村田真人氏の自宅上空をフットボール大の物体が回転しながら飛ぶのを目撃。もっとよく見ようと思い、カメラを持って二階ベランダに上がって、それが西の空へ消えるまで見ていたところ、その物体の少し上空に物凄く奇麗に光る銀色の別な物体を発見。二枚撮影したうちの一枚を大きく伸ばした写真。



キャノンAL-1、キャノンズームレンズ100-300、f11、オート、フジカラースーパーHR400

の牛から乳をしぼり出して、それを飲む。その場合、あなたは私を飲んでいることになるのだ。

牛が肥えてくると、あなたはそれを屠殺し、ステーキにして食べる。その場合、あなたは私を食べていることになる。人間の肉体は土の中へ入って行き、良い肥料になるのだ。

だが人間はいかに自分を大きく見せようとしていることか。人間に差はないということを忘れてはならない。たとい一千万ドルを持とうが持つまいが、誰もみな土の中へ入ってしまうだけだ。しかもあなたは本当の私を土の中へ入れたのではなくて、私の肉体を入れたにすぎない。それだけのことだ。

あなたは自分の車で走りながらエンジンの中のガソリンを見ることはけっしてないし、スパークを見ることもない。ただ車を運転しているだけだ。それは燃焼によって前進している。自動車というものは、それ自体で走ることはできない。

われわれが呼吸している空気にしても同じだ。それはわれわれの肉体にたいして同じ事をやっているのだ。これは本当なのだ。遺体は草を生やさせる。

これは冗談なのだが、面白い話だ。人々が言う。『アダムスキーさん、あなたが死んだときには、どんなふうに埋葬されたいですか?』

私は答える。『そうだね、法律で許されるならば、ハゲタカが私の遺体を食べてくれるような場所に置いてもらいたいね。骨は野原に残される。

そのハゲタカが飛ぶときには私も一緒に飛ぶことになる。私はハゲタカになったのだ。そして私が飛ぶときには、かつて私を気違いと呼んで私に反対した人を見つけて、その頭に石を落としてやる(笑い)。

結局これは本当なのだ。あらゆる物事は輪のように回転しているからだ。一つの物が他の物を食べる。だがそうしなかったらわれわれは生きていられないだろう。リンゴの木はリンゴをならせる。人間がそのリンゴを食べるとリンゴは人間になる。われわれが食べる動物はわれわれになってしまうのだ」

豊かで平等な他の惑星群

――スペースピープルはタバコを吸うか。

「私は地球へ来ているスペースピープルで、タバコを吸う人を見たことがある。(訳注=『第二惑星からの地球訪問者』によれば、彼らはタバコを吸わないということだが、地球へ来ている人のなかには、カムフラージュするためにわざと吸うことがあるとアメリカで聞いたことがある。)

彼らは美容体操をやるし、楽しい物事をやり、スポーツその他、われわれがやるようなあらゆることを楽しんでいる。

ただ一つだけ彼らのやらないことがある。それはボクシングみたいに他人を傷つけることをやらないということだ。アメリカで過去六ヵ月間に二人の選手が死んだ。これは野蛮なことだ。スペースピープルはこんなことまではやらない。レスリングでは相手の脚を折ったりする。こんなこともやらない。彼らは肉体を発達させるためにスポーツをやるのであって、他人を傷つけるためにやるのではない。

――別な惑星の経済状態はどうか。

「あなたはアメリカに住んだことがないので、カリフォルニアはどんな所かなと思っているだろう。そうだね、カリフォルニアといってもあなたの国と大きな違いはない。

まず豊かな日光がある。次に、アメリカ全土でクレジット制が導入されたので、われわれはもう現金を持ち歩く必要はない。われわれはクレジットカードを持っており、世界のどこでも何でも買うことができる。それにたいしては、あとで支払う必要があるのだが、地球のクレジットカードと金星のクレジットカードの違いは、金星ではあとで支払う必要がないという点にある。万人が平等であらねばならぬという理由であなたも平等に扱われるのだ。

だからあなたは他人がもらうのと同じ量の生活必需品をもらうことができる。他人よりも多くもらったり他人よりも少なかったりすることはない。かりにあなたが四人の子供と奥さんを持つとすれば、二、三の寝室付きの家を必要とするだろう。それはもらえる。あなたが独身とすれば、寝室を三部屋も必要としない。一部屋で充分だ。それで一部屋が与えられる。誰しも一ドルでもよけいなお金を得ようとして他人の頭を殴ったりする必要はない。他人と同じ量の物が与えられるからだ。

――それは互いにたいする愛に満ちているからではないか。

「そうなのだ! だがこの愛という言葉は私には不快だ。われわれは愛について語っているけれども、地球人は愛とは何かがわかっていない。われわれが愛というものを分類しなくてはならないというのは大きなトラブルだ。今日地球で用いられている「愛」という言葉は大変謎めいているので、われわれの言う愛はあらゆる罪を覆い隠しているように見える。愛が覆い隠すときに、愛は人々を殺すのだ。

(訳注=地球で用いられる愛という言葉は各種のエゴの愛にすぎないという意味。つまり恋愛、夫婦愛、親子愛、その他の分類できる愛を意味する)

別な惑星の人々は地球人が知っているような愛を支持しない。彼らは真の慈悲を支持する。それは他人にたいして奉仕を行なった場合、報いとして何も求めない慈悲なのだ。私がこんなふうに言うと、「それは本当なのか? そ

んなことがあり得るのか?」と。

大自然を見て頂きたい。太陽は暑い。そこであなたは言う。「太陽から逃げ出したい。もう耐えられない」。あなたは木陰へ行く。しかし樹木は報酬を求めないし、「涼ませてやったのだからお礼を言え」とも言わない。樹木はただ奉仕をするだけなのだ。

空気にしてもそうだ。人間に呼吸させているけれどもお金を取らない。空気は人間にタダで与えられているのだ。大自然は無差別に奉仕をしている。人々のなかには、あなたを悪人と呼ぶのがいるかもしれないし、逆に聖者と呼ぶ人がいるかもしれない。しかし悪人も聖者も人間が分類しているだけなのだ。

太陽は万人に輝き、雨も万人に等しく降りそそぐ。樹木はだれにも平等に日陰を与えてくれる。差別というものはないのだ。したがって、われわれが自分たちの創造主を知るようになれば、一つの原理があるにすぎないことがわかる。それが人間の創造された理由なのだ。そして被創造物としての人間は本来差別を示さないので、人間は差別をあらわさずに存在する必要がある。

スペースピープルは自然の法則を生かしている。われわれは彼らを宇宙的と呼んでいるが、これは彼らがどこにいても誰もが同じ態度を示しているからだ。プログラム全体はきわめて簡単なのだ。

しかし地球にはそれが見えない。なぜか? それは彼らが異なる宗教でもってあれやこれやを考えるからで、そのため互いに見知らぬ者になり、死を恐れているからだ。

「人間は神(創造主)の意志なくして指一本も動かすことはできない」という言葉がある。あるとき一人の牧師が私の家に来て良い話をした。そこで一緒に来ていたその奥さんが牧師の頬にキスをした。それで私が言った。

『今、誰が誰にキスしたのか』『妻だ』『違う』と私。『あなたが背後に持っている唯一のパワーは創造主なのだ。だから創造主が創造主にキスしたのだ』」

夫婦生活は同じ

――スペースピープルもやはり配偶者を選ぶのか。

「もちろん別な惑星にも吸引の法則がある。私はある人に科学的な事を話すが、別な人にはそれを話さない。その人には農業について話すだろう。しかし両方の人を尊敬する」

――いや、尊敬の話ではない。私は配偶者の話をしているのだ。あなたはもちろん地球であらゆる人と友人ではないだろう。スペースピープルはあらゆる人と友人同士なのか。

「認めねばならない唯一の事は『生命』だ。だがわれわれが認めているような生命ではない。われわれは顔の表情や肉体などを認める。しかし重要なのは人間の内部にある生命と英知なのだ」

――しかしスペースピープルは誰もが同じ英知の段階にあるのではないだろう?

「いや、同じだ」

――彼らの知性はみな類似しているのか。

「そんなふうに言えばそうだ。地球人でもある人は紙シェーカーを作るアイデア、つまり精神的能力を持つ。他の人はタバコを作る。その他の人は他の何かを作る。みんな違うのだが、生命を認識するということになるとスペースピープルは等しく同じ生命を認めるのだ」

――別な惑星では社会的な闘争はないのだろう?

「ない。階級制度といったようなものは存在しない」

――しかし彼らも夫婦で或る種の行為を楽しむ人々なのだろう?(大笑い)

「それはそうだ。さもないと生殖作用はあり得ないだろう」

(完)

▶ベルギーの講演を終えたアダムスキーを空港に見送るベルギーGAPリーダー、メイ・モルレ夫人(現在はフリットクロフト夫人としてオーストラリアに在住)。

A UFO Appears over the Asagiri Heights

UFO、朝霧高原に出現！

昨年（一九八九年）一二月二三日から二四日にかけての夜、富士山麓の朝霧高原（静岡県と山梨県の県境）でテレビ朝日が実施した「UFO呼び出し作戦」に、日本GAP会員約二〇名が参加、秋山真人氏指導のもとにテレパシーで夜空に呼びかけた結果、オレンジ色のUFOが数度出現し、大母船を目撃した人もあり、大成功裡に終了して、今年一月五日夜八時より富士テレビの一時間番組『素敵にドキュメント』で全国に放映され、大反響を巻き起こした。

この番組には一二月八日に東京文化会館で開催された日本GAP東京月例研究会の模様も映し出された。以下は朝霧高原の観測会に参加した会員数氏による手記。掲載写真は放映されたテレビ番組の場面と参加者の一人、堀江健一氏撮影のビデオ画面からとった。

私は母船を見た！

●斉藤庄一

私が現場へ到着したのは一二月二三日の夜一一時過ぎだった。その前にGAPの会員の人たちがすでに現地に来ていて、UFOの観測を行なっていた。そして一〇時頃UFOが一機現れて騒ぎが起こったと聞いた。

そのあと秋山氏がUFOにたいして精力的にテレパシーで呼びかけを行なった。そしてテレビ局が準備したテントの中で暖をとりながら私たちは休憩した。そのときGAP会員で神奈川県平塚市にお住まいの小瀬村芙美子さんが、かつて母船を見たことがあるという話（本誌一〇八号に掲載）を秋山氏にしておられた。

そのあと一時頃私は秋山氏と二人でテントの後ろの方へ行き、なんとなく空を見上げていた。すでに翌日になった真夜中だ。すると秋山氏が「あれは何だろう？　何か見えるよ」と言う。見ると、一点から左右に拡大しながらUFOが出てきた。何という山か名前は知らないが、距離約七キロのその山の方向、仰角三〇度の高さの所に現れた。それは非常にきれいなオレンジ色のUFOで、母船の部類に入るのではないかと思う。久しぶりにみるUFOだった。

その母船を見ていたときに気づいたのは、物体の中に光の帯が動くことだった。それはチカチカするような非常に細かい光なのだが、それがフワーッと動くのだ。見た場所は朝霧高原である。

私は秋山氏よりも遅れて一一時半頃に着いたと思う。

すでにテレビ朝日の器材は設定されて万全の態勢がしかれており、天候は晴で、視界は非常に良好だった。

その母船らしき物は右横に動いたが、そのとき非常に強い光のビームをこちらに放射してきた。そのときの時刻は一時過ぎ頃で、目撃した時間は約一〇分ぐらいだった。

そのときは予期せぬ出来事だったために大いに驚いた。そして二人でその確認をしているときに、テントの中で暖をとれなかった人たちが近くにいたのだが、やはりその物体に気がついて、「何だ、何だ」と声をあげて騒いだものだから、それにつられてテレビ局の人たちも物体に注目し始めた。それでディレクターやカメラマンの方々も目撃して、ビデオカメラにも収められたと思う。

素晴らしいUFO

とにかくUFOというのは本当にもう素晴らしいというか、大袈裟な言い方ではないが、まさに芸術作品とも言えるようなものだ。芸術作品と言えば叱られるかもしれないが、心底から圧倒されてしまい、なおかつ凄い鮮烈な波動を感じてしまう。しかも歓喜の情が爆発的に内面からわき起こるのである。それは実際に見た者でなければ実感できないだろう。

そのときの撮影ビデオは全部テレビ朝日に保管してあると思う。今回の場所の設定はテレビ局側で決めたようで、私たちが見た母船状の物体が出てから非常に盛り上がって、そのあとも空中に呼びかけがずっと行なわれたけれども、カメラに収められたのはその母船状物体が最後だったと思う。

現地にいた皆さんは明け方まで観測をつづけていた。そのなかの何人かの人は他の小型のUFOを見たと聞いている。

立派だったGAP会員

当日は一〇時の段階でそれらしき物が現れた。そのあと一時頃にまた現れて、それもテレビカメラに捉えられた。私自身はそれらとは別に小型のUFOが何機か出たのを目撃している。それは瞬間的に出現したものだが、富士山から見てちょうど西の方向、仰角で四五度の所に、光体がストロボみたいにピカッと光るのを目撃した。

また明け方頃、上空の星々のあいだを縫うようにして一個の光体が飛ぶのを見た。しかしこれはUFOであったかどうか、確信は持てない。私たちは現地に二四日の朝、六時までいた。

テレビ局の機材は相当なもので、今まで類を見ないほどの設備だった。クレーンにテレビカメラを装備し、発電機を搭載した車、スポットライト専用

の車が数台、キャンピングカーみたいな車、調理器材などもあり、その中で豚汁やその他の飲食物を作っていた。また寒気がひどいので、暖をとるために大きなテントの中にストーブが入っていた。GAP会員その他の人たちを運ぶための大型バスも二台来ていた。

今まで私はテレビ局によるUFOの観測会に数多く立ち合ったが、これほどに充実した観測会は初めてで、万全の態勢のもとに実施された。

特にGAP会員の方々の観測態度は立派だった。皆さんは皆非常に熱心に上空を見つめて、テレパシーで呼びかけを行なっていた。GAP会員だけで二〇名はいたと思う。やはりGAPの方々は宇宙哲学で人格を陶冶し、UFOの実態を知り尽くしているから、一般人の興味本位な態度とは全然違うものがある。そのせいかUFOがたびたび出現したのだろうと思う。現地では会員の佐々木八郎氏（東京都葛飾区）や小瀬村芙美子さん（神奈川県）にもお会いした。小瀬村さんから平塚市で巨大な母船を目撃したという話を聞いた直後に私と秋山氏とが母船らしき物体を見たのである。このお二人はその物体に窓が並んでいたと言っておられるが、それは私の目に見えた細かい光が個々にチラチラしていたのが見えたのだろう。あるいは本当に窓の列だったのかもしれない。

ただ残念なことに、その母船らしき物が出現したときにテレビカメラが撮影に間に合わなかったのだ。その物体から光線がサッとこちらへ放射されたときだけはテレビカメラに収められたのではないかと思う。

出現は何かを示唆したものか

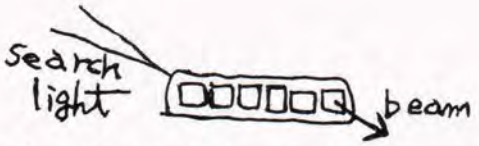
今回の出現はクリスマスということだけではなく、一九八〇年代の終わりということで、彼ら（スペースピープル）が現れたというのは、九〇年にたいする示唆というか、何か具体的な意味を示してくれたのではないかという感じがする。人間の内面的、精神的または外面的な部分にたいして九〇年に何かの大きな出来事があるのではないか、またはこれからに向けての彼ら（スペースピープル）のメッセージがそこに含まれていたのではないかと思う。

ただし彼らの「光の放射」というかたちでのメッセージが何を意味するのかは、残念ながら私には理解できない。しかし今年以降のいつか、その明確な答がくるのではないかと思う。

（編者注＝佐々木八郎氏からの報告によると、同氏は当日朝霧高原で午前三時七分に、強い白い光のビームを出す

◀一九八九年一二月二三日夜、朝霧高原に集結したテレビ朝日スタッフと機材。

母船を見たといい、窓が六つ見えて、黄色っぽいサーチライトも出していたという。左図は同氏が描いた母船。



私も母船を見た

●小瀬村芙美子

二三日の夜、朝霧高原のテレビ朝日UFO観測会に参加しました。とても実り多い時間が持てまして感謝しております。特に秋山様から近くでご指導頂きまして素晴らしい時を過ごしました。あまりにもいっぺんに沢山のお話を聞きましたので、今すべてが思い出せないほどです。

テレビカメラに捉えられたかどうかは判然としませんが、沢山のUFOが来てくれました。皆で輪になって想念を送ったとき、ヒョイと霧が晴れてから、秋山さんが指摘された方向にイルミネーションをした母船が見えましたが、すぐに消えました。

明け方の四時頃に大きな光体が現れましたが、これもすぐ消えてしまいました。バスの窓からも大きな光体と小さな可愛い光体が二つ、計三個見えましたが、これもUFOだと思います。

私が平塚で見た母船のことを秋山様にお話ししましたら、それは「バランスをとれ」という意味だとさかんに教えて下さいました。丹沢の谷あいに母船が着陸して、上方へ赤い光を出す光景を見た人があるので、秋山様もそれを見に丹沢へ行かれて実際にご覧になったとの由。地中のマグマが増えすぎると、それを吸い取りに来てくれるのだということです。

また氏は想念の大切さを教えて下さいましたし、私の横で紛失物を見事に透視して教えていらっしゃいました。私はもともと平衡感覚のない人間で、常にトラブルメーカーであったことをズバリ見抜かれて「バランスが大切だ」ということを何度も話されました。私が母船を見たのは「見せる必要があったから見せたのだ」とおっしゃいました。地球はどうやら平和が近くなってきたけれども「まだ天空が、宇宙がある」ということを知らせるために最近UFOの出現が増え、目撃者が増大しているとのことです。この青い惑星、地球を守るために、これからも私なりに頑張ってゆきたいと思っております。

不正確だったテレビ番組

●堀江健一

今年一月五日に放映されたテレビ朝日の「素敵にドキュメント　UFO呼び出し作戦」の内容は不正確で、テレビカメラでもUFOをうまく捉えていなかったようなので、当日現地で参加した私が8ミリビデオで撮影したUFO実写テープとレポートをここに提供したい。

当日、UFOの出現騒ぎは私の知る限り、以下の三回あった。

〈一回目〉二三日夜、一一時前後。頭上に出現したUFO。

テレビでは最も長く放映された部分であるが、これは星であると思う。当日はガスっていて、頭上の星が一つだけ見えていた。双眼鏡や直視では頭上なので揺れて見えるが、三脚に固定したカメラの映像からもわかるように、これは通常の星の動きである。ただし頭上付近にUFOがいるような感じはしていた。私のビデオテープの最初の二〇分間はこの星を狙った映像が入っている。

〈二回目〉二四日、午前〇時五分頃。東または北東の方角に出現した大きなUFO。

始めに細長くて大きなUFOが出現したようだが、私は後の強烈に光る点状の発光体のみを目撃した。テープでは午前一二時四九分からの映像である。

(編注＝これが母船状UFOと思われる)ビデオカメラは三脚に固定した。この後の映像を見てみると、UFOは一二時五二分に突然**1図**のように下方へ瞬間的に移動しているのがわかる。またよく見ると、水平移動も一定速ではなく、止まったり飛んだりしてきている。さらに私は肉眼では確認できなかったが、**2図**の位置ではUFOが二機出現していて、クロスするときに強く光っている。秋山氏は二機のUFOがクロスするときに強く光ると言っていた。

〈三回目〉二四日朝、五時近い頃。五～六人のみの目撃。

このとき私は南東の丘の上にいて、①の方角に水平に森のあたりに弱く光る光体を一瞬見た。この一～二秒後、今度は再度強く大きく発光した。発光の感じは〇時五〇分頃に出現したUFOに似ていた。

この後すぐにビデオをセットしたが、発光したのはこの二回だけだったので、映像は記録できなかった。このとき私と同じ光体を四～五名の人が下の広場で見て騒ぎが起こっていた。その人たちは②の方角に丘を見上げるようにして森の近くに発光体を見たそうである。

この場所へあとで歩いて行ったが、それらしき発光体はなく、人もいなかった。私の感じではたぶん小型の無人UFOが近くに接近して来たのだと思う。

このたびのテレビ局による準備態勢は見事なものであった。あらゆる面で至れり尽せりの設備をととのえて参加者を手厚くもてなした点は特筆にあたいする。これからみてもテレビ局側の真剣な態度がうかがわれて、私達も快適な観測ができた。感謝したい。

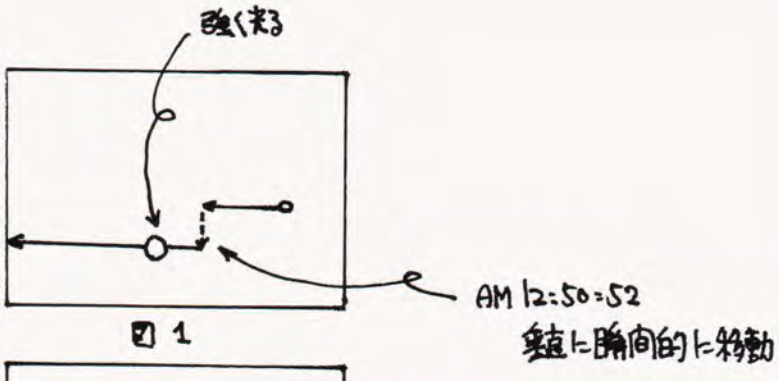

強く光る
AM 12:50:52
頻繁に瞬間的に移動

図 1

図 2

強く光る発光体
②
①
森
70~80m
70~80m
丘
バス
テント
2回目のUFOの現れた方向

図 3

▶写真右＝①②は昨年一二月の東京月例会におけるテレパシー開発練習。③④は一二月二三日、朝霧高原の観測会。（左①③④、右③④は堀江健一氏によるHiビデオの写真。他はテレビ朝日の放映画面）

◀写真左＝①はUFOではなく木星。②はテレパシーで呼びかける秋山真人氏。③は一二時五〇分頃出現したUFO。④で急に左へ移動している。

UFO観測会を実施

右の堀江健一氏の記事でわかるように、昨年一二月二三日夜のテレビ朝日観測会は、テレビカメラが充分に追跡をしなかったため、せっかくUFOが出現しながらも放映画面で見られないという不完全な結果に終わった。

今年二月二一日夜、再度テレビ朝日から一時間半にわたる「水曜スーパーテレビ」で「完全生中継・今夜富士山にUFO出現」と題する番組が放映された。今度は富士山二合目に巨大な電気仕掛けの上空向け標識を建造し、秋山氏が懸命にテレパシーで上空に呼びかけた。そして氏が予言した八時四〇分頃にUFOが出現したにもかかわらず、またもテレビ画面に出てこなかった。

加えて、現地にいた或る人が空中を飛ぶ光体はすべて物理的な火の玉現象であるかのごときコメントを出して視聴者にそのような観念を植えつけようとしていた。個人の解釈は自由だが、これでは四〇年前のUFO存在・非存在論争の段階を出ないことになる。日本のUFO研究は欧米に比較して四〇年遅れているという印象を与えかねない番組だった。

またテレビ局からの要請により日本GAPからも多数のUFO写真、ビデオテープその他の資料を事前に提供したが、これらは画面で一切使用されなかった。テレビ局側にも各種の制約があろうし、思わぬ障害もあるだろうから、集めた資料のすべてを使用するわけにもゆかぬだろう。

それはよいとしても「科学」の名のもとに一人の人間の解釈により、視聴者が文句なしにそれを信じ込んでしまい、倒錯した観念をいだくようになれば、これはマスメディアの大きな責任であるともいえよう。

科学とは既知の知識や法則によって未解決な現象を何でもかでも否定することではない。むしろ大衆の側に立って多数の目撃体験資料を収集分析した上で大衆を納得させるのが真の科学者の態度である。UFOは戦後世界的な問題となり、国連でも討議の対象となったし、米空軍も他年各種の調査機関を設けて研究を続けているのだ。到底、火の玉どころの騒ぎではない。むかしハーバード大学のメンゼル博士が「UFOは雲に反射する地上の光」説を自著でとなえて米空軍の物笑いのタネになったことを想起する必要がある。

以上の趣旨により、今回下記の予告のとおり、GAPより参加者を募集し、万端の準備のもとに結集して、大勢のテレパシーによる呼びかけ観測を実施することにした。これによりUFOの実在を一般に周知せしめることは啓蒙活動の最先端をゆくものであろう。単なる興味本位や猟奇趣味の人でなく、熱意ある人に参加を呼びかけたい。

日本GAP主催
第1回 テレパシーコールUFO観測会

日本GAPが第1回のUFO観測会を実施します。UFO観測のベテラン久保田会長と東京本部役員を中心に、会員のみの高次な想念波動の結集による空中へのテレパシーコール（テレパシーによる呼び出し）を行ない、スペースピープルの宇宙船（UFO）の出現を目撃しようというもので、精神の高揚化とUFO実在確認の最良の方法です。この模様は本誌その他の媒体を通じて全世界に報道されます。

当日は日本GAP特別会員で超能力者・UFOコンタクトマンとして名高い秋山眞人氏をゲストとして招待し、テレパシーコールの指導をして頂きます。多数ご参加下さい。

- ●日　時　1990年（平成2年）6月9日（土）の夜から10日の午前3時頃まで。雨天決行（下界は雨でも富士山2合目は晴れることが多い）。当日は東京月例会終了後6:30に上野を車で出発。月例会出席者は荷物を持参。
- ●交　通　各自で車を用意。車のない方は車を持っている人に事前に交渉しておくこと。
- ●観測場所　富士山2合目展望台。車は約100m手前の左側広場に駐車。現地集合後受付が配布する参加票に所要事項を記入して提出する。
- ●コース　6:30上野を出発（上野駅「公園口」の駅舎屋上に駐車場あり。公園口改札横の日本食堂の左側が駐車場入口）8:00海老名サービスエリア着、レストラン前に集合（月例会に参加できない方はここで合流も可）。8:30海老名サービスエリア出発、9:15足柄サービスエリアで10分間休憩後出発。御殿場インターを降りて富士山へ。現地で集合後、久保田会長の挨拶・注意事項と秋山氏の指導説明があるので、これに従って整然と行動する。司会（幹事）＝篠　芳史
- ●会　費　参加費は無料。車の燃料費、道路料金は同乗者で割勘負担（上野から往復1人約¥2,500程度）。食事は各自持参またはサービスエリアでとる。
- ●参加資格　GAP会員（性別・年令を問わず）。
- ●携行品　6月上旬でも標高1100mの富士山2合目はかなり冷えるので（5℃〜10℃程度）防寒服を必ず用意。その他、懐中電灯、メモ用手帳、筆記具は必携品。他に双眼鏡、カメラ、ビデオカメラ、三脚、座るためのシートまたは折りたたみ椅子、暖かい飲物等は各自任意持参。現地にトイレあり。

A Venusian Scout Ship Have Landed
by Hachiro Kubota

デザートセンター円盤着陸事件(2)

●第三次調査報告——久保田八郎〈日本GAP会長〉

一九五二年一一月二〇日、着陸した円盤から出てきた金星人とアダムスキーが劇的な会見をした歴史的な場所である米カリフォルニア州デザートセンター砂漠地帯のコンタクト地点を突きとめるべく、九名から成る日本GAP調査団が勇躍現地へ向かったのは実に三六年目の一九八八年（昭和六三年）一一月二〇日であった（アダムスキーのコンタクトの詳細については『新アダムスキー全集』第一巻『第二惑星からの地球訪問者』を参照）。

当日は手分けをして終日現場一帯を探索したけれども、正確な場所を特定できず、残念な結果に終わったが、そのかわり非常に不思議な物を発見した。

丘を登りつめた所に見事な長い曲線が残されていたのである。岩石につけられた白っぽい曲線は、どう見ても円盤が傾いてタッチダウンしながら回転してつけたものとしか思えない。たぶん私たちが探索に来ることを予知したスペースピープルが前夜頃ひそかにこの痕跡を残して祝福してくれたにちがいない。私たちはある程度報われた旅に驚喜して帰国した（この詳細な記事は本誌一〇四号に『デザートセンターで円盤着陸痕跡発見！』と題して掲載済）。

さて、第二次の調査は一九八九年一月二一日に実施された。日本からは筆者共四名、アメリカで現地在住のGAP会員一名、アメリカ人二名の計七名。この日は何かの力に導かれるようにして首尾よく正確なコンタクト地点を発見、大いなる成果をあげた（この詳細は本誌一〇五号に『デザートセンター円盤着陸事件』と題する記事が豊富なカラー写真入りで掲載されている）。

しかし、一箇所だけ見つからぬ場所があった。それは『第二惑星からの地球訪問者』に掲載されている写真で、アダムスキーが金星人とコンタクトをする直前に撮った、丘と丘との間の馬の鞍（くら）状のくぼみの所に黒い円盤が半分ほどのぞいている場面の位置である。

二日間に渡る調査で特定できず、日が暮れたので、再来を期して引き揚げたが、その『馬の鞍』がどうにも気になるため、ついに意を決して第三次調

●デザートセンターのコンタクト地点

1952年11月20日、ジョージ・アダムスキーが米カリフォルニア州デザートセンターの砂漠地帯で、着陸した円盤から出てきた金星人と会見した場所（白い矢印）。 撮影／筆者

▲矢印1は円盤が着陸した地点。ここから金星人が矢印2まで来てアダムスキーと会見した。矢印3は川の跡。　撮影／篠　芳史

査に踏み切ったのは今年一月二八日のことである。

雄大な米大陸を疾走

今回は日本より筆者、篠芳史氏（日本GAP東京本部役員総代）、田中正氏（同役員）の三名だけで出発。遠藤昭則君も同行の予定だったが、仕事の都合でナミダをのみ、そのかわり車で成田空港まで送ってくれた。

ロサンゼルスで現地在住のGAP会員・芦田さん夫妻と合流し、計五名で翌日デザートセンターへ向かって出発する。快晴下のサンベルナルディノフリーウェーを一〇〇キロ前後で飛ばすのは爽快この上ない。片側四車線のこの高速道路はフロリダ州まで延びている。何度走ったかしれない道だが、来るたびに欣喜雀躍、少年のように胸が高鳴ってくる。金星に向かって宇宙船で飛び立つような気分になるのだ。

遠い丘々に発電用風車の大群が見える砂漠地帯に入ると米大陸の雄大さを実感する。

一方、カリフォルニア州ほどの面積しかない日本はまさに箱庭そのもの。しかもその狭隘な国土に米人口の半分に近い人間が充満し、暴動も起こさずに平和共存して超人的な力を発揮する日本民族なるものの特異性――。

一体何が日本人をコントロールしているのか。その求心力の指向先は何なのか。天性ともいえる団結観念は何に起因するのか。

日本民族は土星人の子孫だというアダムスキーの説は、こうしたことを裏付けているのだろうか。

探索を続けたけれど

芦田さんのご主人たる甲斐氏の運転する車は午前一一時四四分、現地に着いた。ロサンゼルスを出発以来、途中の休憩時間を入れて約四時間。距離にして三三六キロ。

早速車を降りて身仕度をし、見慣れた砂漠地帯へ入って行く。

アダムスキーがコンタクトしたときの六人の目撃者の一人、ジョージ・H・ウィリアムソン博士の著書『宇宙語―宇宙人』に掲載されているコンタクト地点の写真により、すでにコンタクトの正確な場所はわかっているので、今回はアダムスキーの『第二惑星からの地球訪問者』（新アダムスキー全集第一巻）の口絵に載っている〝馬の鞍〟の写真を片手でかざしながら、全員散らばって探索に入る。出発前に「たぶんあの辺りだろう」と見当をつけておいた場所へまず行ってみたが、ここは違っていた。つづいてコンタクト地点から円盤が着陸した右手の丘を迂回して右奥の川沿いに谷間へ入って行く。

川といっても現在水はなく、干からびた跡があるだけだ。その縁に立ってずっと奥を見ると、馬の鞍状の部分はあるけれども、それは高い岩山の中腹になるので、アダムスキーの写真とは合致しない。写真では馬の鞍状の稜線の上は白い空が展開している。だから、この写真は背後に高い岩山のあるような場所ではない。

こんな奥地ではないのだ、と思った私はいったん手前の広い砂漠地帯へ引き返し、左手にある低い丘の周辺を回りながら散策してみるのに、こじつければそれらしい場所は見えるのだが、昨年一月にコンタクト地点を発見したときのような古い写真と寸分違わぬほどに正確なスカイラインを見つけることがどうしても出来ない。

他の人たちも首をひねりながら歩き

▶成田空港にて左より篠芳史、筆者、田中正。撮影／遠藤昭則

▶砂漠地帯を探索。撮影／篠

回っている。腰を下ろしてはしばし休憩し、また歩く。私がここへ来るのは四度目なので地形は我が家の庭のごとく頭に入っているのだが、写真とピタリの場所がどうしても出現しない。

ブライズの激安物価

四時四五分、ついに太陽が山脈に落ちて暗くなってきた。一同集合して協議し、翌日また探索しようということになり、車で引き揚げた。

ただしロサンゼルスまで引き返すと莫大な時間をくうので、この近辺に宿泊しようとかねてから申し合わせてあった。ところが、寒村のデザートセンター一帯にはホテルやモーテルらしきものが見当たらない。それではいっそのことブライズの町へ行こうと衆議一決し、ガソリンスタンド前から道を曲がって行った。

ブライズはアリゾナ州との境にある未知の土地だが、アダムスキーの記述によると、一九五二年、コンタクトの日にアリゾナ州から来たベーリー夫妻とウィリアムソン夫妻を迎えるため、このブライズまで来て、ここで合流したとあるので、どんな町なのかと興味がわいたのである。

一直線の道路を飛ばすこと約四〇分、ブライズへ入った。さほどの都会でもなさそうだ。多くの支店を持つモーテル6を見つけたので、ここへ投宿する。ツインの広い豪壮な部屋が一泊二五ドル（三五〇〇円）。ウソのように安い。

付近のタイ人のレストランで夕食をすませて隣の巨大なスーパーマーケットに入る。ここには何でもあり、驚くほど安い。ゾーリのような大きな肉が七枚で三ドル二八セント（四六〇円）、厚さ三センチの上肉三枚で一〇ドル二七（一四四〇円）。「ここはまるで夢の国だ。日本では信じられない！」と金髪の若い女店員に言ったら、「へえ、そうなの？　有難う」と言って笑っている。この町の人口は一八〇〇〇だという。アダムスキーが来た当時は未開発の土地だったのだろう。

◀ブライズの宿舎にて、左より田中、筆者、芦田、甲斐。撮影／篠

ちなみにアメリカでは商店、レストラン、その他の店で白人の店員さんがにこやかな微笑を浮かべて非常に愛想がよい。カリフォルニアは特にそうだ。笑顔をほとんど見せない日本の店にくらべてなんというオトナの国かと以前は感嘆これを久しうしたものだが、その後、何かで読んだ記事によると、米人、特に白人が見知らぬ人に笑顔を見せるのは、「あなたには害意を持ちません」という意志表示だという。危険な国なので、これが一種の自己防衛策になっているらしい。

アダムスキーは川床から撮った？

明くればまたも快晴。九時に出発。デニーズの店で朝食。ウェートレスたちは快活で常に微笑を絶やさない。一〇時半に出発。広大な緑の畑の中を突っ走り、一一時四〇分に現地着。道路から砂漠地帯へ約一〇〇メートル入った所に車を停めて歩きだす。気温は二三度、暑いのでやがてジャンパーを脱ぐ。

▶またも砂漠へ入る筆者。撮影／篠

道路側から見てコンタクト地点の左奥に低い丘があり、この正面にはジープの車輪がつけたらしい二本の轍（わだち）の跡が残っている。これが道路から見てコンタクト地点を見つけるためのランド

写真A 1952年11月20日、アダムスキーは金星人とコンタクトする直前、丘と丘の間の馬の鞍状のくぼみ位置に着陸して機体を半分見せている円盤をブローニーカメラで撮影した。この直後、空軍の飛行機が飛来したため円盤は急上昇して視界から消えた。

マーク（標識）になるのだが、この丘に接近すると右斜めに奥へ走っている川があり、その川の右手の岸辺が金星人の足跡の残ったコンタクト地点である。

今日はこの川の跡を主体に探索しようと思った私は、コンタクト地域がすぐ右に見える位置の川床の中に入り、奥の丘を見た。ここから見ると確かに写真の馬の鞍に似た稜線が眼前に展開する。しだいに胸が騒いできた。

そうだ、アダムスキーはあの写真を川床から撮ったのではないか！　写真中に見える左側の三角形の黒い影は川のバンクではないのか！

▲筆者が川床から撮った写真。写真Aと一見似ているが違うことがわかる。

だが、写真中の馬の鞍状をなす左の丘のさらに左手の黒い丘がここからは実景として見えない。しかも写真中の円盤を半分隠している丘は岩石のゴロゴロした粗い丘なのに、眼前の二本の轍のついた丘は比較的きれいなのだ。

ここも違うのか。コンタクト地点に近い川床の中に大きな石を積み重ねたケルンが作ってある。誰がやったのか。

私はバッグからアダムスキーの記述のコピーを取り出して、あらためて読んでみた。それには次のように述べてある。

馬の鞍状は二箇所あった

「（大母船が出現したあとアダムスキーはルーシー・マクギニスの運転する車で逆戻りし、道路から砂漠地帯へ入り込んで）われわれはさらに前進することにきめて（とがった石ころだらけの地面を）無事乗り切ることに成功し、私が選んだ地点から約六〇メートル以内に停車した。ここで大宇宙船は車の真上にいるように見えて、車がとまるにつれて宇宙船もとまったのである。

アルは私が装備品を取り出して三脚をすえつけ、できるだけしっかりと望遠鏡をそれに固定するのを手伝ってくれた。

（このあとアルとルーシーは他の連中

がいる元の場所へ車で引き返した。だから望遠鏡と共に砂漠地帯へ残ったのはアダムスキーだけで、それを他の連中は遠くから見ていた）

車が走り去ってわずか五分がすぎたとき、空中の一つの閃光に注意を引かれた。するとほとんど同時に一機の美しい小型飛行物体が、山の二つの峰のあいだのサドル（馬の鞍状の部分）の中で浮かんでいるように見えて、私から八〇〇メートル離れた谷間に、無音のまま落ち着こうとしているように思われた。山頂から下へは全然下降しないのだ」

この文章中の『馬の鞍状』というのは奥の方にそびえる高い岩山のどこかであって、写真Aのそれではない。

「（中略）すばやく私はそれを望遠鏡のファインダー内にとらえて、できるだけ早く七枚のフィルムに撮影した」

これは六インチ反射望遠鏡のアイピースの部分に（たぶん手札判の）古い一眼レフを取り付けて撮ったことを意味する。

「カメラ――古いハギー・ドレスデン・グラフレックス――から露出済のネガの入ったフィルムホルダーを一個ずつはずすにつれて、私はそれを着ていた上着のポケットに入れた」

このカメラはロールフィルムを使用するものではなく、一枚ずつシートになったフィルムをホルダーに入れて、撮影時にはホルダーを一個ずつ取り付けて写すようになっている。

さて、この次が問題なのだ。記述を見よう。

「私はカメラを取り外して携帯用のボックスに収めた。次にブローニー判カメラで何が撮れるかやってみようと思いたった。最初の写真（**写真A**）を写したとき、円盤が強くきらめくとともに動いて、最初に来たサドル部の上空に消えてゆくのを見た」

これを読むと、六インチ反射望遠鏡で撮影し終えてから、アダムスキーは全く動かずにその場でカメラを取り替えて撮影したということになる。ブローニー判カメラというのは、この後にパロマーガーデンズへ円盤が飛来して、アダムスキーが砂漠で貸したネガホルダーを落としたときに、当時アダムスキーの助手をやっていた空軍退役軍曹のジェロルド・ベーカーがコダックのブローニー判カメラで超低空を飛ぶ円盤を撮影したとなっているから、たぶん大正から昭和初期にかけて流行したベストコダックカメラであろう。私も子供の頃に親父の形見のこのカメラを使ったことがある。レンズは単玉と複玉があり、性能は悪く、当時はフィルムも感光度が低かった。したがって写真Aのようなボケた写真になることは首肯できる。しかし最初アダムスキーが反射望遠鏡で高い岩山の馬の鞍状の所にいた円盤を撮影し、次にいきなり焦点距離一〇五ミリのブローニー判カメラで馬の鞍状の所に黒い円盤が半分のぞいている光景を撮影したというのは、この両者の馬の鞍が全く別であることを意味する。ブローニー判カメラでは八〇〇メートルの位置の円盤を写真Aのように鮮明に撮ることは不可能であるからだ。だいいち写真Aが高い岩山でないことは写真中にブッシュ（薮）が存在することで分かる。このブッシュは平地にしか生えない。したがってブローニーカメラで撮った写真はアダムスキーが立っていた平地のすぐ前方の丘でなければならない。

彼が望遠鏡を残して、どこかへ歩いて行ったということもあり得ない。なぜなら、このあとの記述で次のように述べているからだ。

「ブローニー判で三枚の写真を撮ったあと（中略）突然私の夢想は破られた。約四〇〇メートル（原書では四分の一マイルとなっている）前方の、二つの低い丘のあいだにある谷の入口の所に立っている一人の人間に注意を引かれたからだ」

『二つの低い丘』というのは現地の状況と一致する。確かに道路側からコンタクト地点を望見すると、そのように見える。しかも私たちが目測した限りでは道路からコンタクト地点までの最短距離は約三五〇メートルである。アダムスキーは四〇〇メートルあると言っているが、何もないだだっぴろい砂漠地帯であってみれば多少の錯覚が起こるかもしれない。

写真B ▶大母船が出現中、ルーシー・マギニスがアダムスキーを車に乗せて砂漠地帯へ入り込んだ直後、アル・ベーリーが撮ったもの。右がアダムスキー、左はルーシー。背後に道路らしい水平の線が見える。

中断しているアダムスキーの記述

そこで、一つの推理が働いてきた。彼の馬の鞍状の写真は意外に道路から近い所で撮ったのではないか、ということだ。ウイリアムソンの書物の写真Bを見ても、望遠鏡のそばに座り込んでいるアダムスキーの背後には何やら道路の縁らしい水平な線が見える。左横には車があり、その前にルーシーが右手を上げて日光をよけている。この

位置は絶対に道路から遠く入りこんだ場所ではない。砂漠といってもアフリカのサハラ砂漠のごとき黄金色に輝く燦然たる微細な砂の海ではなく、石ころだらけの不毛地帯で、車は道路からせいぜい一〇〇メートルぐらいまでしか入れないからだ。

話をもとへ戻すと、結局はこうなるだろう。

『アダムスキーが最初反射望遠鏡で高い岩山のサドル部分にいた円盤を撮影した直後、円盤はもっと手前の低い丘と丘のあいだのサドル状の所へ降下した。そこはかなり近い場所なので六インチ反射望遠鏡では焦点距離が長すぎて役に立たない。そこでブローニーカメラに取り替えて撮影した』

どうも彼の書物の記述には右の部分の説明が中断されているとしか思えない。文脈が途中でポツンと切れているからだ。何かの理由で省略したのか、それとも出版社側で削除したのか、何かがあったという気がする。それは後年ウィリアムソン博士が私に寄越した書簡の中で、「あのコンタクトのときにはアダムスキーの書物で公開されていない重大な出来事がいろいろとあった」と述べているからだ。そして事件後ロサンゼルスに住んでいたウ博士を私が訪問すれば、彼は私にそれらを漏らすということになっていたのだが、実現しないうちに博士は他界してしまった。今でも地団駄を踏む思いをしている。

やはり川床なのか

それはともかくとして、いま私に明確なイメージが浮かんでくる。アダムスキーは道路に近い川床の中からあの写真を撮った！　しかも彼の望遠鏡一式も川床の近くに置かれていた！　だから彼は望遠鏡からほとんど離れずに二度目の馬の鞍を撮影できたのだ。

だいいち付近の道路にはときどき車が通るので、望遠鏡を放置したままで遠くへ行く訳にはゆかないだろう。また、六インチ反射望遠鏡ともなれば重量も相当なもので、これとケースなどを一人でかついで遠くまで歩いたとは考えられない。

私たちは今まであまりにも奥地の岩山一帯にこだわりすぎていたのだ。

重いカメラバッグと三脚をかついだ私は、道路からコンタクト地点の中間辺の川床に入り、写真Aを片手に持って、奥の方を見ながら少しずつあとずさりを始めた。もちろん他の人たちもあちこち散らばって探索をつづけている。

この川は道路近くまで延びており、しだいに浅くなっている。

かなり道路に近い位置まで来たとき、地形から見て大体に写真と一致するスカイラインが見えてきた。ハッとしてよく見ると似てはいるものの、写真Aの円盤を半分隠している丘に相当する実景の丘の稜線にゴツゴツした岩石の突起が目立ってピンとこない。

しかし写真の中の左辺につながる黒い稜線は非常によく似ている。だが実景ではかなり遠方なので、綾が薄れて、写真ほどには濃く見えない。写真で黒く写っているのは日光の陰であろうから、これはそんなに遠方ではないだろう。とすると、ここも違うのか。

太陽は落ちて、あたりは暗くなってきた。念のために写真を撮ろうと思ったが、すでにフィルムは切れている。私のカメラは六センチ幅のブローニーフィルムを使用する6×7判なので、フィルムの携行量に限度があるのだ。

成功は、いま一歩

やがて仲間がやって来た。私は川床説を披露し、詳細に説明した。芦田さんも大体にその説をとっていた。写真中の左のバンクに相当する場面に出くわさないが、これは芦田さんによると、ここもときには降雨があり、川に鉄砲水が氾濫することもあるので注意せよという掲示をどこかで見たという。そうすると四〇年近い年月の度重なる流水によってバンクの形が変わったとも考えられる。

いずれにしても三八年前にアダムスキーが馬の鞍状のくぼみの位置に円盤が半分ほど姿を見せている写真を撮った場所は、私たちが車を置いている場所から半径数百メートルの範囲内であることは間違いない。

暗闇のせまった砂漠から私たちは引き揚げた。不首尾ではあったが、これは決して失敗ではない。むしろ、あと一歩という所で時間切れになったのだ。成功は間近にせまっている。もう一日ここを探索すれば勝利の歓声を上げることになるだろう。だがそうもゆかぬ。再来を期してひとまずデザートセンターに別れを告げることにしよう。

ここで強調しておきたいことがある。数度に渡る現地調査に際して、私たちが使用した最重要な資料は、アダムスキーのコンタクト時に同行した六人の目撃者の一人、ジョージ・ウィリアムソン博士の著書『宇宙語―宇宙人』に掲載されている写真類である。

この書物は金星人が砂地に残した両足跡の奇妙な紋様の解読を試みたもので、筆者は昔からこの原書を所有していた。その後、博士の解読結果は間違っているという批判をアダムスキーのグループから受けたため、博士はしだいにこのグループから離れて行った。

しかし彼はこの書物に重要きわまりない証拠物件を残した。彼が金星人の足跡の紋様を石膏に取っている場面、その他の写真である。この写真類は同行者のアル・ベーリー夫妻が携行した。6×6判の二眼レフで撮ったものらし

い。ウイリアムソンの書物では製版が悪くて印刷は不鮮明だが、それにもかかわらず、この数点の写真は百万言に優る説得力を持つ。これらの写真を根拠にして私たちは正確なコンタクト地点を探し出すことが出来たのであるから、彼の著書はやはり不滅の価値を有するといえるだろう。

彼はその後、南米の古代遺跡の研究に没頭し、その関係の著書を数点出しているが、これらはスペースピープルと遺跡との関連を明確にした重要な書であるといわれている。

筆者との文通において、いつも非常に丁重な文体で述べられた彼の典雅な書簡類を今は懐かしく思い出す。

◀一九五二年一一月二〇日、デザートセンターで金星人の足跡を石膏にとるウィリアムソン博士（右端）。左からウィリアムソン夫人、アル・ベーリー、ルーシー・マクギニス、アリス・ウェルズ。撮影はベティー・ベーリー。アダムスキーはこの中にいない。

▼ウィリアムソンの著書「宇宙語―宇宙人」に掲載されている上の写真を手がかりに昨年1月突きとめたコンタクト地点。背景が完全に一致している。撮影／筆者

We Saw a Large Object Shining Brilliantly
強烈に輝くUFOを見た私たち姉弟

川野晶子（中一）・一生（小三）

今年一月二二日（月）夕方の五時四五分前後、私と弟の二人で庭にあるブランコであそんでいたら、山の上にものすごく光る物体をみつけました。それは太陽のように明るく、そしてレモンみたいな色でした。

一〇秒ぐらいたっただろうか、いきなりその物体の光が消えて、ものすごいスピードで移動したんです。

だんだんとその物体が見えなくなり、もう星くらい小さく遠ざかった物体に私と弟は、

「まだいかないで！　もっと私たちにみせてよ！」と心のなかでねがうと、まさかとは思ったが、その光る物体が再び姿を現し、私たちの頭の上をぐるり一しゅうまわって、そしてまた山の方へと消えてなくなりました。

しばらく二人で見ていたら、またあの物体がどこからともなく現れ、消えたり現れたりのくり返しをし、どこかに消えていった。まるでワープをしながらとんでいるみたいでした。（原文のまま）

編注＝筆者のお母さんである川野綾子さん（神奈川県津久井町）がGAP会員で、子供さん方が不思議な物体を見たと言っているという報告を電話で編者宛に寄せられた。それで晶子さんのリポートと見取図をご送付頂いた。文章がしっかりしており、図も見事に描いてある。

Aura, Jewelry, Supermagic & Channeling

● 2人の超能力者が答える

オーラ、宝石、超魔術、チャネラー

● 1989年度、日本GAP総会の「質疑応答」

遠藤講師

《遠藤昭則氏へ》

問 二年前からじっと気を落ち着けて目を凝らすと、自分の手やまた人間でなくても植物や生命のない物からも湯気や陽炎のようなものが立ちのぼるのが見えます。そして何か空気の流れというものを感じます。しかしこの二年間、訓練も何もしていないせいかも知れませんが、それ以上の進歩、たとえば色が見えることもなく、これが一体何なのか分かりません。オーラと関係があるのでしょうか。もしこれがオーラなら、より開発するのにはどのようにしたらよろしいでしょうか。

遠「湯気のようなものが見えるということですが、オーラというのはいろんな種類がございます。私が小さい頃から見ていたものは色だけのものでした。それから高校頃ですか、高校頃になりまして、その湯気のようなものや、体から一、二センチ位離れているところに霧状のものなど、そういうものがかなりはっきりと見えるようになってきました。そして高校を過ぎた頃には透明な色々な種類が見えるようになってきたんです。

ですからこの質問をされている方も、まず第一歩のオーラが見え始めたものだと思います。かなり力がある方ではないかと思います。二年間も何もしていないせいかも知れませんが、とございますが、やはりそのせいだと思います。練習をかなり積まれて、とにかくそれが合っているかどうかは、メモするなりノートするなりしてあとで確認すればいいことですから、まずいろいろとご覧になったほうがいいと思います。

そうしまして自分の見たものが後の記録で、確かにこれがそうがというもの、そういうものが段々分かってきますので、それで練習されればいいと思います。さらに力が出てくると思いますので、練習してみて下さい」

問 私は一年前から空中に無数の粒子が霧状になって漂っているのが見えるようになりました。特に私が注意を向けた物体の周辺からは、強く立ち昇っているように見えます。また暗い所で目を閉じてもそれを見ることが出来ますが、白い光をわずかに放っているようです。目を閉じたまましばらく観察していると、その微かな光のスクリーンの中で、薄い紫色の雲が湧き出るように様々なパターンに変化しながら、何度も何度も拡がっては消えていくのです。その雲のようなものはある時は様々な色に変化します。以上のように私が見ているものは何なのでしょうか。

遠「これもやはり一種の空中のエネルギーというのでしょうか、それがまず見えるときが、その無数の粒子が霧状になって見えているという時の一つだと思います。

もう一つは、目の視神経の影響によって空間にそれが見えている、空間にはないんですけれどもそれが見えているという状態だと思います。で、ご質問の方の場合はやはり一種の目を向けた物体からもそういうものが見えるということですので、一種のそのエネルギーを見ている状態ではないかと思います。

霧状のものは、目の錯覚のときはどういうことかといいますと、たとえばここにライトがございますけれども、そのライトを見ていてかなり明るいですけれども、その周りをこう見ていますと、あまり見られない方もおられるかも知れませんけれども、そのライトの周りにきれいな虹が見えるんです。その虹から霧が降っているように見えるんです。ただこの場合は頭を逆さまにして見てみますと、やはり同じように今度は上に霧が降り出すんです。ですからこれは目の神経の関係だと思います。ただご質問の方はやはり何かをそのエネルギー粒子を見ているというのですか、心の中で増幅しているんだと思います。

薄い紫色の雲が湧き出るように様々なパターンに変化しながら、目を閉じると見えるというのは、ご自身のなかに物凄い力があるせいで、それによってご自身の内部の—内部にもいろんな色があるんですけれども—その色が出てきている証拠だと思います。

要するに人間の身体というのは、かなり内臓も活動しておりますから、内臓自身としてもいろんな波動というのですか、そういう周波数を出しております。その周波数が一種のオーラとして見えてくるんですけれども、この方

の場合も一種のそういうエネルギーの流れとしてご覧になっているのではないかと思います。この質問用紙自体からもかなり強い感じを受けますので、やはりそうだと思います」

《秋山眞人氏へ》

問　七八歳の母にエメラルドを着けてもらったところ、耳が聞こえるようになったし、私も電気石を持って歩いたらあまり疲れなくなりました。なぜこのような事が起こるのですか。

秋「こういった石、特に我々が長い人類の歴史の中で、宝石や奇石として讃えてきたもの、または身に着ける習慣をもってきたもの、こういったものに関しては、そういった鉱物からも非常にいい波動が出ている場合があるんです。その波動はその鉱物にどのような鉱物がブレンドされているか、これによって微妙に変化があります。

　たとえば最近アメリカあたりでは水晶を身につけることによって自己の想念が良くなるというようなことが言われているんですけれども、確かに水晶を身に着けますと非常にその本人の想いといいますか、それを軽く増幅したような形にもっていく作用があるんです。

秋山講師

　たとえば水晶のなかでも透明な水晶とチタンが入っている一般にクサイリ水晶といわれているものとか、ピンク色がかったローズクォーツだとか、そういった石によって様々な影響が微妙に違うわけなんです。面白いのはここでお母様がエメラルドをお着けになったら耳の聞こえが良くなってきたそうですが、エメラルドは古くから癒しの力がある石だというふうにいわれているんです。ですからそれが半ば証明されたようなデータだと思います。

　電気石というのはやはり本人が本来持っている力を表面に引き出そうとする作用があります。ですからこういった石の波動というのは、それぞれ色々研究してみられると面白いんじゃないかと思います。

　ただし石と本人さんとの相性みたいなものがあります。たとえば水晶は一般的に想いを増幅するといわれてますけれども、人によっては、たとえば先程言った念力気質で外に出す能力の強い方は、逆に水晶を身に着けることによってエネルギー過多の状態になり過ぎる場合があるんです。ですからそれも注意しなければなりませんし、それぞれ自分の相性のいい宝石を身に着けたり、アクセサリーにして楽しまれるといいんじゃないかと思います。

　もともとたとえばアクセサリーといわれているような物も、実はそのルーツを辿ってゆくと、様々なそういった能力開発と非常にリンクする意味があるんです。たとえばイヤリングという物がありますが、このイヤリングの起源というのは、もともと人の悪口を聞かないように、という意味があったんだそうです。ですからやはり様々な宝石を着けることによって、人間の脳や肉体、個々の細胞の波動にたいして様々な影響を及ぼすのではないかと思います」

問　最近超魔術と称して超能力を実演していますが、これについて何か回答をお願い致します。

秋「この質問が実は質問用紙の中で一番多かったんですけれども、この問題はこの席で明確にしておかなければならないと思うんです。というのは、最近非常に超魔術ブームというのがあります。結局一般的にいきますと、先程スプーン曲げなんかをやりましたけれども、手品で帽子からウサギを取り出すのと、超能力で帽子からウサギを取り出すのと、一般の人は見分けがつかないわけです。それであるマジシャンに聞きましたら、スプーン曲げのトリックだけでも四〇種類以上あるということです。実際には曲がったスプーンを手の中に隠し持っていて、折れた片方の柄だけのスプーンだけをそこに重ね合わせて、一本のスプーンのように見せておいて、柄のスプーンを手の中に回収して曲がったスプーンを見せるとか、そういった我々がなかなか出来ないような複雑な作業をマジシャンは長いあいだ訓練して行なうわけです。

　この前テレビをちょっと見ていましたら、写真の中の時計を動かすなんていうマジックをやっていた人もいました。まあそれぞれ人を楽しませるという意味でマジックというのも芸術ですけれども、ただそれが超能力という問題と混同されてくると話は別です。

　実はこの超魔術論争というのは、もう数年前、一〇年近く前からアメリカでブームになっているんです。というのは、例のユリ・ゲラー氏はトリックであるということを主張したジェームズ・ランディーというマジシャンがいます。この人はそういったものを一切手品で出来るという主張を長いあいだ繰り返して来ていまして、最近アメリカの政治団体からその後援を受けてサイコップという組織を作りました。そこには何人かのタレント学者とそのランディーが会長でおりまして、そのサイコップが最近アメリカの、たとえば代表的な超能力研究所でいいますと、マクドナルド研究所ですとか、そういった所にわざとマジシャンを送り込むんです。

　そうするとそういう所の研究者や科学者というのは、超能力にたいして好

▼一九八九年九月一三日、東京千代田区公会堂で行なわれたユリ・ゲラー氏の超能力実演を撮影したら、左上方に奇妙な赤い光線状のものが写っていた。原画はカラー。撮影松村芳之

意的に見る目を持っていますから、騙されてしまうんです。ですからそれでその科学者達が、これは超能力ではないかと半ば認め始めると、翌日の新聞で彼等は私が送ったマジシャンですと発表する。それによって学者や研究所やそういった所の信用失墜を行なう、超能力者の撲滅を行なう、こういった運動が盛んにキャンペーンを展開しているんです。その一環として日本に入って来たのが超魔術ブームで、実はそういったどうも政治的な意図があるのが見えるんです。

これはどういったことかといいますと、当時アメリカ政府の中でもユリ・ゲラーのような超能力者を政治力にも利用出来るんではないか、または国土開発等にも利用出来るんではないか、といったような主張をする人がかなりおりました。

ところがそれに反対する陣営がおりまして、彼等はあくまでもそういった精神主義を政治の世界に持ち込むとファシズムにつながるという論理から、超能力的なものを政治家から遠ざけ、科学者から遠ざけ、社会的信用を失墜させる必要があったんです。そういった流れが日本に来ているのです。日本ではちょっとやり方が違うんです。

アメリカでは手品師が手品を見せて、明らかに同じ事が出来るからトリックなんだよという主張をするやり方だったんです。

ところが日本人の場合はもともと超能力を非常に信じやすい非常にいい性質が僕はあると思うんです。ですからある意味ではそれをひとつねじって、彼等は超能力と手品を混同させて、それでなーんだ、だれもみんな出来るじゃないかということにしてしまう。それによって我々が本当の超能力にトライしようとするビジョンを奪い取ってしまおう、そういったやり方を計画的にやっているんではないか、というニュアンスが感じとれるんです。

ですからマジックはマジックです。そしてマジックはいつでも再現性があります。そしてマジックはどこでも出来るでしょう。ですけれども、そういった意味では超能力は人を楽しませるという意味ではマジックより劣りますけれども、それを実証できるかどうかという問題については、やはり皆さん個々がトライして体験して頂きたいと思います。マジックに決して惑わされないようにして頂きたい。それが私の見解でございます」

問 ジェームズ・ランディー氏の反超能力キャンペーンの真の意図は。またチャネリング情報の信憑性についてはどうですか。

秋「最初の質問は今お答えした中に大分その答えが含まれていたと思うんですが、ジェームズ・ランディー氏はやはり手品師でございまして、そういった政治的な意図がバックに控えているわけなんです。これはUFO情報に関してもそうなんですが、混乱したウソの情報と本当の情報を非常に似通った形で流して、混ぜ合わせてしまうことによって、その本当の意味が隠蔽されていくというような工作が超能力においても仕掛けられつつあるんではないかと思います。そういった意味ではランディー氏もかなりそれに関しては動いておられるような気がします。

しかしその反面、ジェームズ・ランディー氏においてはたとえば心霊手術というのが一時期話題になりましたけれども、そういったもののトリックを暴いたりしています。事実一時期フィリピンの心霊手術というのは非常に話題になりまして、沢山本物もおられるんです。一種の超能力なんですけれども。

ところがインチキの方がはるかに多いのです。そういった所に大枚をはたいて治療に行って、治ったと思い込んで、実際医者にかからずに亡くなった方が沢山いるわけです。こういったものを粉砕するということには、ランディー氏も一つの効能を果たしていると言えるかも知れません。

ただそこに政治的な意図がありますと、見えない形でマスメディアの情報を操作するというような動きにつなが

っていくわけです。ですからここらへんの流れというのは、少し我々も注意して見る必要があると思います。

それともう一つチャネリング情報の信憑性についてというご質問があるんですけれども、最近やはりチャネリングというのは非常に流行しています。というのは、チャネリングといえば格好はいいんですけれども、一つひるがえってみますと、霊媒術なんです。恐れ山のイタコのような一つの霊媒術なんです。

こういうものが流行する社会的な背景というものがあるんです。というのは一六世紀頃でしたでしょうか、イギリスでこういったものが非常なブームになりました。スピリチュアリズム(心霊術)というのが非常なブームになりまして、当時イギリスではこのチャネリングをテーブルターニング、つまりコックリさんのような形で行なうわけなんです。テーブルの上に手を置いて質問に応えてください、とこうやるわけです。ですから当時朝の挨拶用語に、昨日お宅のテーブルはよく動きましたか?というのがあったくらいイギリスで流行した時期があります。

その時期というのはイギリスではやはり物質的には非常に豊かで、恵まれたイギリスの全盛期の頃にそういったものが流行しました。いま日本はその当時のイギリスと非常に似通った社会的状況があります。こういった状況に入ってきますと、人間というのは与えられた物、特に物質的なものですが、与えられた物や、簡単に手に入る物には興味を覚えられなくなって、むしろなかなか得られにくい物、または求めないと得られない物に興味の対象が移っていくという一つの社会現象があるわけなんです。その中の流れとしてこういったチャネリングとか何かこう霊的な世界を想定して、そういったものに関心を向けるというようなブームが始まっているわけなんです。

ただそういった世界があるかないかの論争は別と致しまして、チャネリング情報というのはあくまでも本人が一種のテレパシストで、色々な物質から出ている波動や時間や空間を越えて、過去に生存していた人達の波動的情報や、そういったものを感知出来る能力をお持ちだと思うんです。

ただ問題はそれが本人の口から出たとき、そういった情報を聞いた方の反応というのは、ああ、ああいう外国から来たチャネラーの方が言われたんだからきっと真実であろうと一〇〇パーセント信じ込んでしまう、というところに非常に問題があるんです。科学的検証をせずに信じてしまう。

ですからやはりそういった情報というのは、かなり幾人かの人間の方の情報を比較検討してみて頂いて、その正確さをより良く追求して頂く必要があると思います。ですからどうしてもその人の主観がその中に入り込みやすいんです。また本人も無意識になってそういった情報を、半分無意識の状態で察知していますから、そういったものに関しては非常に混乱した情報が入りやすい。そういう危険性が非常にあるんではないか、ですからそれは注意しなければならない部分ではないかと思います。

たとえば以前あるチャネリングをやられるチャネラー(霊媒)といわれる能力者の方が来られたときに、その方が『世界で最も霊的に進歩した優秀な国はどこですか?』とある人の質問に答えて、それはアメリカ合衆国でありますと言っているんです。ですからそういったところにはかなり本人の主観があるんです。たとえばこれはテレパシーの送信受信にしてもそうです。以前アメリカで行なわれた超能力実験で、ある方が金魚の絵を念じたら受け手の方が近くに美しい女性がおられて、その女性のイメージと金魚の絵が混同されてしまって、人魚の絵を受信したという話があるんです。

ですから人間の心というのは、あくまでもそういった情報の伝達とかまたはそういったものに関しては、かなり正確を期して、またどうしても個々の人間がしゃべることというのはそれぞれの主観が入りますので、その部分を考えて、そういった部分を感じ取れるやさしさをもって、また自分の中ではこれは正しい情報、これは少し主観が入ってるなあというようなものを、うまく分けて考えていく必要があるんではないかと思います」

問　『人生とは何か』という命題についてどのように考えておられますか。

秋「はい、そうですね。人生とは—かなり大きなイメージのご質問なんですけれども。私自身のこれは、それこそ先程の話じゃないんですが、主観で申し上げますと、私の場合は『人生は自己実現のための道程である』というふうに思います。なぜ人間が転生していくのかと言ったら、その生でまたはそれまでの生で、達成出来なかったことをやはり達成するためにまた生まれ変わっていく。そしてそこでいろんな障害とぶつかりながらも、その達成のために闘っていく。自己実現のために歩んで行く。人生とはそういったものの繰り返し、そういったものの道程ではないかと、私はそのように考えます」

問　遺伝子を構成する蛋白質を重い順に音符に置き換えるときれいな音楽になったり、惑星の配置が音階と同様の関係になる等、振動のパターンといったものが大きな意味を持つように思われます。そこに働く基本的な原理について教えて頂ければ幸いです。またこのことに関する書物で良いものはないでしょうか。

秋「はい、有難うございます。かなりご研究をされている方のご質問ではな

いかと思います。遺伝子を構成する蛋白質の重さの順に音符を置き換えるときれいな音楽になるというのは確か日本の学者の方が研究されていたと思います。また惑星の位置が音階と同様の関係にある等、振動のパターンといったものが大きな意味をもってくるということは確かにあります。

この宇宙というのは一つのうねり、振動、波動といったものの中にあります。われわれの心もそうです。一つ何かに取り組むと我々の心もそれを繰り返そうとする、そういった習慣を形成しようとする力の中にあるんです。これは宇宙全体の一つの法則かも知れません。物事は常に繰り返そうとする波動的な法則があります。波のように行っては返すという性質があります。確かにそれは非常に重要な宇宙的性質であると思います。

たとえば人間の心でいきますと、人間の心というのは三日と二分の一日―それが二回繰り返すと一週間ですけれども―また三カ月から四カ月ぐらい、または三年六、七カ月ぐらいで同じ感情になりやすいという一種の周期性をもっているんです。同じ感情になりやすい。ですから今日思ったいろんな想いや感情というのはまた繰り返そうとする。ハーモニーをもって繰り返そうとする。斉藤庄一君も言っておりましたけれども、そういったうねりがあるんです。これは非常に研究されるといろんな事が分かってくるんではないかと思います。人間の生命の神秘を解明する一つの何か糸口ではないかと、私はそのように考えます。

また音というのも非常に不思議な性質を持っています。たとえば我々が『ああ』という音を発した時と『いい』という音を発した時とは、それぞれ心の中でわき起こってくるイメージや雰囲気が微妙に違います。今日のお話の中で遠藤さんが、拒絶する時に手を前に出す話をしておりました。行け行けと言った時に手を前に出した場合と、手を出さないで行け行けと言った場合と全然感覚が違うのですが音を発する場合もそうです。また音を聞く場合もそうです。ドの音を聞いているときとソの音を聞いているときは全然違います。たとえば電話で人と話をする場合、非常に面白いものです。

西洋人特にアメリカ人は、ドの音を好みます。『ハロー・ハウ・アー・ユー』と低い音で話をするとすごくインパクトを感じるらしいんです。ところが日本人はソの音で電話で話をすると非常に心に響きます。『今日は。お元気ですか』とソの音で話をすると非常に響くんです。これはちょっとやってみると分かりますけれども、非常に面白い性質だと思います。やはり音も潜在意識といろいろな法則性を持ってつながっているんだと思いますけれども、これはこれからの研究課題だと思います。

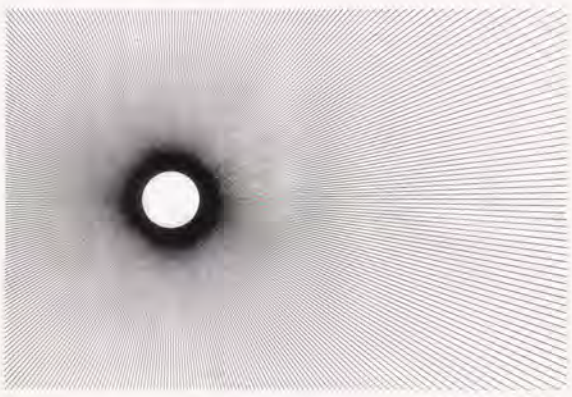
今私がこれこれこれだけの事はこういう法則だなんていう生意気な事は到底申し上げられません。そこには非常に複雑な法則性が存在しているんではないかと思います。またもしこういった面を研究されるんであれば、日本人はこういった音のイメージというのを昔は言霊という言葉で表現したり、いろんな言葉で表現しております。そういった古い文献を研究されると、結構面白いデータが出てくるんではないかなというふうに思います」

問　人間が転生を繰り返しながら進化していくそのはるか彼方にあるものは、または、待っているものは一体何なのでしょうか。

秋「これも非常に壮大な宇宙的なスケールのご質問でございます。転生を繰り返しながら進化していったそのはるか彼方にあるものは何か。何かどこかの映画のタイトルみたいな感じなんですけれども、だけど素晴らしい夢のあるご質問だと思います。

ただ夢があるのはいいんですけれども、我々が今考えなければならないのは今この瞬間この地球での出来事であって、ここから先どのように進化するか、それは私にも見えないところがあります。それはやはりいろんな複雑な要素がその進化の度合いを決めていきます。ですから地球上の進化を終えたら、また他の惑星へ生まれ変わって行くのかもしれません。またもしかしたら我々が感じている宇宙以外の違う法則に支配された別の宇宙がその外側にもっと存在しているのかもしれません。またそこへ移行していく瞬間があるのかもしれない。しかしそこは今のしがない我々ではまだまだ感じ取れない世界でございます。

ですから色々なロマンをそこに感じられる、またはイメージしてみる作用というのは非常に楽しくて、面白い作業だと思いますけれども、少し足元もよくご覧になられるようにして頂きたいと思います」



アメリカで
話題騒然のスピリ
チュアル音楽ライブラリー
ついに日本でも独占販売開始

潜在脳力を開発し、願望実現を早める奇跡の音楽

この音楽を聴きだしてから願望が次々と実現し始めた

アメリカで各界から熱狂的注目を欲びる常識を超えた奇跡の音楽

「スピリチュアル・ミュージック」、「ニューエイジ・ミュージック」と呼ばれる不思議な音楽が遂に日本へも上陸しました。このスピリチュアル音楽に関しては、日本でもニューサイエンス関係の書籍や一般の雑誌・新聞でしばしば紹介されているので既にご存知の方も多いことでしょう。今から十数年前にウエストコースト(米国西海岸)で湧き起こった、意識と物質を同一の次元でとらえようとするニューサイエンス運動、エコロジー思想等のニューエイジ革命の嵐の中から生まれ出たスピリチュアル音楽——。

この音楽の特徴をまとめると、

●作曲家・演奏者達が皆、30代前半から半ばと若く、瞑想愛好家の上、幽体離脱や超常現象を日常的に経験するなど、きわめて霊的意識が高い。

●今までの音楽のように単に曲を聴いて楽しめるという点だけではなく(もちろん音楽的に非常に魅力に富んだ曲が多く充分に楽しめるが)意識を高め、潜在意識を刺激するという、「意識・無意識への作用」という事に重点をおいて曲がつくられている。

●記憶力・集中力・創造力などの潜在能力が曲を聴くことにより自然に開発される。

●一～二年の長期にわたって、これらの曲を愛好していると、超能力者・ヒーラー(心霊治療家)の典型的脳波であるアルファー波とシーター波の同時高レベル波形とよく似た脳波があらわれるようになり、その結果、鋭い直観力——これがさらに高まると未知予知や読心力などの超能力——の持主になる。

●夜、寝る前に聴くと熟睡でき、疲れが翌日にあまり残らず、朝の目ざめがとてもさわやかになる。又、小さな事にクヨクヨしなくなる、包容力がつく、他人に寛容になり対人関係がスムーズにゆくようになる等々の人格向上効果が見られる。

●潜在意識が活性化されることにより、円滑現象(願望がスムーズに実現される、自分の思い通りの方向へ物事が進んでゆく等の現象)が起きるようになる。

これだけでは、まだとても説明しきれないくらいの驚くべき効能を持ったスピリチュアル音楽は、その多様な効能が、早くからアメリカの教育界・医学界・宗教界・実業界など各界から熱い注目を浴び、数々の実験、科学的基礎研究が今日まで行なわれています。

アメリカでは脳力開発に、願望実現にと幅広く活用されている。

アメリカでは、これらのスピリチュアル音楽の科学的研究、神秘主義的側面からの経験データに基づいて、応用面での研究・実験もさかんに行なわれています。現在のところ最も利用が進んでいるのは教育の分野で、サジェストペディア(超高速学習法)のバックミュージックとしてさかんにこのスピリチュアル音楽が利用されています。又、能力開発、霊性開発を目的とした瞑想教室では、スピリチュアル音楽はもう空気同然の必需品で、大脳の潜在脳力をめざめさせるのに著しい効果のあることが何千人の生徒達を使った実験でも実証されています。

又、成功を夢みるビジネス界のエリートの間でもスピリチュアル音楽はたいへんな人気で、脳力開発に、ストレスコントロールに、又、願望の早期実現のために、いろいろな使い方をされています。

◇「スピリチュアル・ヒットUSA」ライブラリーの中の1曲ご紹介◇
曲　　名：TEMPLE IN THE FOREST
作曲演奏：DAVID NAEGELE
曲の内容：アコースティックピアノ、シンセサイザー、エレクトリックピアノ、自然音で潜在意識の波動をあらわす森のリズムが形づくられる中を、"オーム"の神聖なマントラのバイブレーションが限りなく広がってゆく様をみごとに表現している。
瞑想用に、又直観力・創造力開発に最適の曲の1つ。

米国のスピリチュアル音楽ベストヒット48曲・24巻を一堂に集大成

アメリカンライブラリー社では今アメリカで最も人気の高いスピリチュアル音楽のヒット曲、48曲(テープ24巻)の独占販売権を獲得し、「スピリチュアル・ヒットUSA」として日本の皆様に頒布会方式で通信販売いたしております。

「スピリチュアル・ヒットUSA」の頒布システムを説明しますと、初回から12ヶ月にわたって、毎月カセットテープ2巻が届けられ、支払いは毎回五、六〇〇円の送料三〇〇円。初回、二回目以降を問わず、商品到着後5日間の無料試聴期間がありますから、万一、曲が気に入らなければ自由に返品できます。(二巻のうち一巻のみの購入の場合は代金は半額の二、八〇〇円プラス送料)又、途中で購入をストップしたい場合は、所定のハガキ又は電話で通知すれば、その時点で購入を止められます。

商品は、2週間前後で到着します。瞑想ガイダンス、願望実現マニュアル、脳力開発マニュアルがついていますので、それぞれの目的に応じてこれらのマニュアルをご利用下さい。

第一回目の試聴のお申込みは、〒107 東京都港区南青山1-26-4 アメリカンライブラリー社 UF④係 電話 東京03(479)5864までハガキか電話で、住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上、「スピリチュアル・ヒットUSA」試聴希望とお申込み下さい。

★想像以上の効果にびっくり!!★

はじめのころは「何かおもしろい音楽だナ」っていう感じで、でも聞いていると心が落ちついてくるし、まあ車の中で聞くとしちゃあ静かでいい曲—くらいの印象しかなかったのですが、しばらくして色んな異常に気づきはじめました。低血圧で朝はニガ手だったのが、すごく寝ざめがよくなって午前中の仕事のノリがよくなったとか、仕事上の判断が正確になり前みたくドジをやらなくなったとか。それにいちばんの異常は、女の子(特に美人)と話をするとどうも変なところで緊張してしまって話が上すべりしたりして、どうも恋下手だったんですが、それが最近じゃ前みたく変な気負いがなくなり、ほんとに気楽にストレートに話ができるようになったことです。おかげで、会社の女の子がみんなボクの恋人に見えちゃうほど。何か会社へ行くのが楽しくなりました。ほんと。もちろん例の音楽は毎日かかさず聞いてます。次のテープが楽しみです。埼玉県　山口浩和

最近、人とのつきあいが信じられないくらいうまくゆきます。

広島県　船越照政

こうなったらいいなあと思っていたことがもう立続けに三度も現実のものになってしまいました。

東京都　高見隆春

科学 SCIENCE

〈国内有力紙に掲載された科学記事を抜粋紹介。各記事末尾のカッコ数字は掲載年月日を示す。〉

地球から一四〇億光年の最も遠い天体

これまでの記録を塗りかえる最も遠くて最も古い天体が米科学者グループによって発見された。カリフォルニア工科大学のマーテン・シュミット博士ら。

同博士によると新天体はパロマー天文台にある二〇〇インチ望遠鏡で発見したもので、天体の位置は大熊座のひしゃくのすぐ下あたりという（元・11・20毎）。

トカマク型核融合実験装置、連続運転の世界記録

二一世紀のエネルギーとして期待される核融合開発の基礎実験を進めている九州大学応用力学研究所は九日、トカマク型核融合炉の連続運転の世界記録（四二分三六秒＝一一月二二日達成）をさらに更新、一時間一分一一秒を達成したと発表した。同研究所は「これでトカマクの連続運転が工学的に確立した」としており、核融合発電の実用化へさらに前進したものと期待される。

日本の半導体市場優位の最大理由に靴脱ぐ習慣と英科学誌が絶賛

日本が世界の半導体市場で圧倒的な優位を誇っている最大の理由の一つは家の中で靴を脱ぐ日本人の習慣にある――。

英国の科学専門誌「ニューサイエンティスト」一月号は、労働者の高い教育水準で、長期的な企業戦略などと並んで、非常な清潔さを要求される半導体生産では日本人の清潔観念が大きな役割を果たしている、と報じた。

同誌は、日本では外から家に入る際に靴を脱ぐのはもちろん、トイレに入る時もそれまで履いていた室内用スリッパを脱ぎトイレ用に履き替える、と〝驚異的〟な日本の習慣を紹介。子供の頃から清潔観念が組み込まれているため、企業は半導体生産に心要な生産工場の清浄化が容易に達成できると指摘している（2・1・9毎）

世界で初、人工網膜を開発

東芝は（元年）一二月二〇日、人間の網膜と同じく、光を電気信号に交換できて、しかも並列情報処理も同時にできる人工網膜を世界で初めて開発したと発表した。微小な膜が反応した情報を並列処理できることからバイオコンピューターや現在、ビデオカメラの目にあたるCCD（電荷結合素子）を大きく越える高情能撮像画素に応用できるほか、大脳への信号の送り方が解明できれば、人間の網膜にかわる人工網膜の道を開いた（元12・21毎）

脳内の電気信号をキャッチ―東工大開発に成功

人間の脳内の電気信号の流れを追跡するシステムを東京工大大学院総合理工学研究科の武者利光教授らのグループが開発した。人間の体の動きや知的活動はすべて電気信号で制御されており、このシステムを使うと、皮膚などにある感覚受容器からの信号がどのような経路で脳に伝達されるかが分かる。武者さんらはこれをまとめて脳内の「三次元感覚地図」を作成する方針だ。

脳内を電気信号が流れると、それに応じた電位分布が頭皮上に発生する。したがって、電気信号の流れを知ることができる。このシステムで測定した結果、手首に刺激を与えると、約一二マイクロ（一マイクロは百万分の一）秒で大脳皮質に達するといったことが分かるようになった。どこに刺激を与えるかで、脳内の電気信号の流れる場所が遠うことも分かった。（1・22毎）。

ニューヨーク上空にUFO?

一月二七日午後七時頃、米バージニア州からニューヨークにかけた地域で、正体不明の光る物体が上空を横切るのを多くの住民が目撃、地元のテレビ局などに問い合わせの電話が殺到した。コロラド州コロラドスプリングズの北米航空宇宙防衛司令部（NORAD）は巨大な流星の可能性が大きいとみている。

しかしワシントン郊外のダレス空港の管制官は、「物体はゆっくりと白色からオレンジ色に変わりながら二五秒―三〇秒間ぐらい上空を飛んでいた」と証言。流星ではなく人工衛星か未確認飛行物体（UFO）の可能性もあると指摘した。（1・29サンケイ）

野菜に音楽を聴かせると早く大きく育つ

山形県天童市の東北パイオニアでは野菜の栽培にベートーベンやモーツァルトの音楽を聴かせると早く大きく育つことを実験で確証している。屋上の一〇〇平方メートルの温室でサニーレタスやミニトマト、キュウリなどを水栽培し、長さ五メートルのスピーカーで有名なクラシック音楽を流すと、音による空気の振動が葉を刺激して炭酸同化作用を活発にし、生長を促すという。高音よりも低音が良く、特にレタスやトマト、キュウリなどは低音がよく響く名曲が好き。騒々しいロックはダメ。かえって生長が遅れた。

この実験でサニーレタスとキュウリは生長が早まり、二〇%も収穫が増えた。終日音楽を流すよりも朝、昼、夕方の三回、一五分ずつ聴かせるのが最良という（元・11・9読）。

二〇一一年に火星へ大遠征―NASA

米航空宇宙局（NASA）は（元年）一一月二〇日、紀元二〇一一年に四人の乗組員の宇宙船を火星に到達させ、六〇〇日の滞在の後に、一〇一八年に地球に帰還させるという火星探査計画をまとめ、国家宇宙評議会に提出した。

計画によると一九九九年完成予定の、日、欧、カナダでも参加する国際宇宙基地「フリーダム」号を月や火星に向かう探査機の組み立てや、試験、打ち上げの拠点として位置づけている。

巨大な銀河の〝壁〟―宇宙の新たなナゾ

少なくとも五億光年の長さに広がる巨大な銀河集団の〝壁〟を、米ハーバード大学天体物理学研究センターのマーガレット・ゲラー教授らが見つけ、米科学誌「サイエンス」に発表した。この銀河集団の壁は肉眼では見えないが、地球から二―三億光年離れており、幅が二億光年、厚さが一五〇〇万光年に及び湾曲している。宇宙でこれまで見つかった最大の構造だ。

これはアリゾナ州にあるホプキンズ天文台の大型望遠鏡で観測した約六〇〇〇個の銀河の位置を分析して確認された。今回の発見は、物質が宇宙に満遍なく散らばっているとする過去の宇宙観を根底から覆すものだ。その一方、こうした大構造がなぜ宇宙に形成されたかの新たな謎が生まれた。（元・11・18読夕）。

痴呆症老人に光照射の新治療

夜間の幻覚や徘回など、痴呆症老人に特有の異常行動は、強力な光を毎朝あてる「高照度光療法」で五分の一以上が解

消することが、秋田大医学部精神科学教室と協和病院（秋田県協和町）の共同研究で明らかになった。

この治療法を行なったのは同教室の菱川泰夫教授、大川匡子講師、同病院の穂積慧副医院長らで、五六歳から八九歳までの痴呆症の老人一六人に試みた。痴呆性老人には夜間の不眼症状を示す人が多いことから異常な生体リズムを正常に戻す目的で高照度光療法を行なった。この治療法では二―四週間にわたり、毎朝七時かは九時までの二時間、三〇〇〇ルクスの強い光の前に患者を座らせる。一六人を治療したところ、八人で睡眼・覚せいリズムが改善、うち六人は異常行動がほとんどみられなくなった。この六人のうち一人はアルツハイマー型痴呆、五人は脳血管性痴呆だった（1・7読）。

日本初「月衛星」打ち上げ

文部省宇宙科学研究所は一月二四日午後八時四六分、わが国の人工衛星「ひてん＝ミューゼス―A」を四段式固体ロケットM―3SII―5号機で鹿児島県内之浦町の鹿児島宇宙空間観測所から打ち上げ、軌道に乗せるのに成功した。

「ひてん」は将来の宇宙開発に不可決な軌道変更技術を習得するのが狙い。この技術は「スイングバイ」と呼ばれ、他の天体に接近、その重力を利用して軌道を変更する。燃料を使わずに軌道を変えるので、月や惑星などを探査する際に効果的。実験に成功すれば、この技術を持つのは世界で米ソに次いで三番目となる（1・25読）。

「ひてん」月の裏側をパチリ

宇宙航行技術の「スイングバイ」と、月の周回孫衛星の投入に成功した文部省宇宙科学研究所の工学実験衛星「ひてん」は三月一九日、国産衛星としては初めて月の裏側の写真を撮り、送信してきた。

写真は「ひてん」の光学航法装置（ONS）が一九日午前二時二一分、月から一九〇〇〇メートル離れた地点で撮影した。鮮明度はよくないが、「雨の海」や「嵐の大洋」と呼ばれる月の大きな平原や、クレーターの「コペルニクス」などが判別できる（3・20読）。

腹八分目が長生きの秘けつ!?

腹八分目が長生きの秘けつであることが、東海大医学部微生物教室（神奈川県伊勢原市）の田爪正気講師のマウスを使った研究で一月一二日までに確認された。食事量を八割に制限されたマウスは、満腹のマウスより平均一・六倍の長寿で、田爪講師は「昔からの言い伝えが動物実験で科学的に実証できた」としている。（1・13読）。

宇宙に銀河の垣根

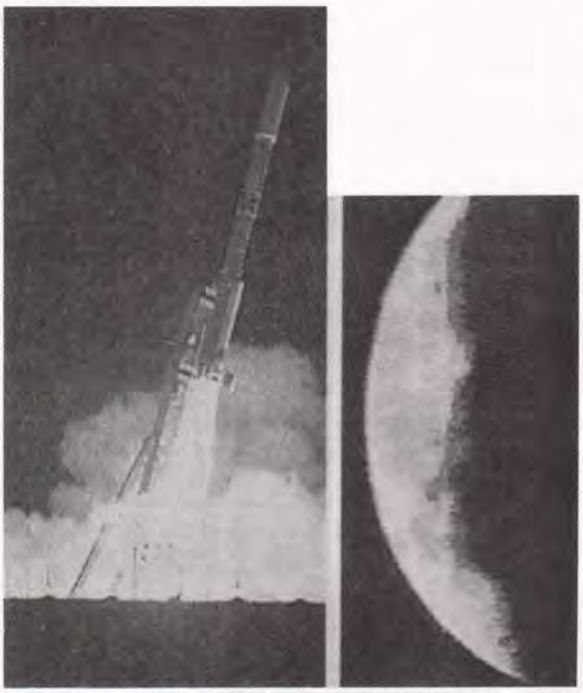
四億光年もの間隔を置いて「くい」が立っているように、宇宙に銀河集団の垣根が幾重にも広がっているとの観測結果を、米カリフォルニア大サンタクルーズ校のデービッド・クー博士ら米英の天文学者グループが二月二二日発行の英科学誌「ネーチャー」に発表した。現在の銀河形成理論はこれほど規則的な宇宙の大構造を全く予期していなかったので、定説を覆す驚くべき発見として注目されている（2・23読）。

アインシュタイン相対性理論は夫人の発想か?

相対性理論を提唱し、現代物理学の基礎を作ったアルバート・アインシュタイン博士の三つの初期論文は、実は博士の最初の夫人、ミレバ・マリスとの共作であり、相対性理論の転機となった大胆な発想の大部分は夫人のものではないか、とする新説が出され、米国で激しい論争を呼んでいる。

英科学誌「ニューサイエンティスト」最新号によると、夫人に対する評価がこれまで低すぎたと考える学者の間から、夫人は「アインシュタイン理論の数学的解明を実際にやった女性」との指摘が最近の学会で出され、ある物理学者は「相対性理論の数学的な基礎固めに助力したというだけでなく、この理論の転機となる発想は夫人が出し、これを基にアインシュタイン博士は理論の全体的枠組みの大部分をつくった」と主張している。

この説を裏付けるものとして、ソ連の物理学者アブラハム・ヨッフェ（一八八〇―一九六〇）のアインシュタイン博士に関する著作の中で、ヨッフェ自身が一九〇五年、エックス線を発見したレントゲン博士の助手をしていたとき、アインシュタイン博士の初期論文の原本を見る機会があり、それには「アインシュタイン＝マリス」と共同執筆であることを示す署名があったと明らかにしているとも指摘された。しかしチューリッヒの研究所に採用されるときの夫人の試験成績は博士に比べて相当に悪く、夫人が数学にとりわけ強かったことを示す証拠はないとして反論する学者もいる（3・20朝）。



▲写真左はわが国最初の月衛星を打ち上げたM-SIIロケット。右は「ひてん」が撮影した月の裏側。

GAP短信 GAP News

★「新アダムスキー全集」刊行開始！

従来文休書林から発行されていたアダムスキー全集を、このたび全面的に訳文改訂の上、中央アート出版社から四月より順次刊行されることになった。新全集は従来と同じ四六版なるも携帯に不便な箱入りをやめて、ペーパーバックで新鮮なデザインのカバー付き並装普及版となり、定価も安くなったので入手しやすくなった。

また全八巻の内、大部分は書名を変更、若い人にアピールするように配慮された。四月に第一回配本として従来の「宇宙からの訪問者」を第二惑星からの地球訪問者」と改題した第一巻が発売される。中央出版社では採算抜きで出版に踏み切ったけれども赤字になれば中止するとの由、本号五〇頁の広告を参照の上、多数購入されたい。図書館等への献本活動が望まれる。以上により二月末をもって文久書林と日本GAPとは一切無関係となった。

★「江戸川タイムス」またも報道

昨年都内の「江戸川タイムス」が日本GAPを取材報道して地元江戸川区で大反響を起こしたが、今年二月一日発行第三九号にまたも日本GAPを取材、一面トップ記事でUFO問題、特にアダムスキー問題を大きく報道した。記事内容はきわめて正確で、会長によればこのような誠意ある記事で紙面を飾った媒体は初めてだという。

★本年度地方支部大会

すでに本誌で予告したように本年度は左記支部が大会開催を予定している。

(1)第1回　南九州支部大会
四月二九日　鹿児島市民文化ホール

(2)第11回　仙台・山形合同支部大会
五月四日　仙台市片平市民センター

(3)第4回　長野支部大会
六月三日　松本市郊外浅間温泉

(4)第3回　秋田・青森合同支部大会
一一月三日　開催地未定（次号に詳細予告を掲載）

右の各大会の詳細については本号四六〜四七頁を参照されたい。なお旭川支部が札幌支部と合同の上、来年度に支部大会を開催の予定。

★テレパシーコールUFO観測会

本号一二頁の予告どおり、来たる六月九日夜、日本GAPはUFO観測のメッカ富士山二合目で会員のみによるUFO観測会を盛大に実施する。これはテレパシーによる呼びかけを全員が行なってUFOを呼び出そうというもので、成功すれば各種の媒体により世界のUFO研究界に報道される。本誌次号にも詳細な記事を写真入りで掲載の予定。参加希望者は本号一三頁の予告を参照されたい。

★各地UFO写真展

左記の各支部がUFO写真展を開催する。

(1)青森支部UFO写真展
四月一四日（土）より一五日（日）まで二日間。青森市浦野町字奥野三一七五―一「サンロード青森」2F大会議室にて開催。

(2)栃木支部UFO写真展
五月三日（木）より五日（土）まで三日間、宇都宮市栃木県庁前の栃木会館1Fと2Fのギャラリーで開催。

(3)新潟支部UFO写真展
八月一一日より一四日（火）まで四日間、新潟駅前のデパート「プラーカ新潟」3FゆーとぴあホールにてUFO開催。

以上の各写真展の主催者は地元会員の方々の応援を期待しているので、可能な限り援助の手を差し伸べられたい。

★東京本部及び地方支部月例会の変更事項

(1)東京本部
今年八月度月例会のみは東京文化会館側の都合により会場を皇居北の丸公園の「科学技術館」6F第一会議室に変更。日時も八月のみ第一土曜日の四日に変える。時間は午後一時半より六時まで。九月は従来どおり上野公園の東京文化会館で第二土曜日に開催。

(2)新潟支部
今年五月より月例会の日時と会場を大幅に変更。従来の第三日曜日から第四日曜日の午後一時からに変更。会場も長岡市の「けさじろ荘」から新潟市弁天三丁目「新潟市青年の家」に変える。

(3)沖縄支部
五月より沖縄市の会場から具志川市巣野比一二一二―一「具志川市野外レクセンター」会議室に変更。日時は毎月第四日曜日、午後一時より五時まで。連絡先は比嘉政広☎〇九八九三―三―二八八九。従来本誌で市内局番が「二」となっていたが、「三」が正しい。

(4)高松支部
第一日曜日から第三日曜日に変更。

★アメリカGAPが発足

本号掲載記事のごとく昨年一二月に米カリフォルニア州コンコードのダニエル・ロス氏が日本GAP、デンマークGAPと提携してアメリカGAPを創始した。氏は八七年九月に来日して日本GAP東京総会で講演を行なった人で、本誌連載記事「UFO――宇宙からの完全な証拠」の原著者。久保田会長とは親友で、秋田氏の会員、坂本貢一・茂子夫妻とも親交がある。これで世界GAPネットワークは主要三カ国が主体となってグローバルな活動を展開することになった。ロス氏は昨年六月にデンマークGAPの大会で講演を行なっている。

★英文版Uコン第6号を刊行

英文判第6号が久々に刊行される。これは世界の多数のUFO団体や大国政府要人に発送されており、注目の的となっている国際的文献。本来は年二回発行の建前なるも、久保田会長が単独で日本語版と英語版の両方を編集するため手が回らず、現在は暫定的に年一回の線。四七頁を参照の上、多数購読されたい。

大宇宙の恩寵を受けて——盛況！東京月例会

一九九〇年一月一三日(土)——穏やかな青空の下、篠芳史氏と斉藤竹子さんの司会によって今年最初の東京月例会の幕が開いた。

まず最初は山梨県の会員・清水南氏の体験講演である。氏は毎月山梨県から出席しておられるのだが、時間的余裕があって出席しているというのではない。会社でも宇宙哲学を実践し、職場の人たちと調和することによって、東京月例会の日には気持ち良く休ませてもらえるようにしておられるのだそうだ。そうして東京月例会で学んだ事をまた日常生活で生かしている、いわば本当の求道者なのである。

その宇宙哲学を私たちに伝えて下さるのが、次に登場された久保田会長である。会長は前日風邪で高熱を出されたにもかかわらず、テキスト『生命の科学』第六課「新鮮さは人間の若返り薬」を力強く解説された。その秘密は強烈なミラクルワード、ミラクルイメージだということだった。まさにこの日のテーマそのものである。

プログラムは全員記念撮影、近況報告と続き、GAPの超能力者・遠藤昭則氏によるテレパシー実践法、テレパシー練習に入る。氏のお話は、超能力ブームに便乗した情報が氾濫する中で、私たちは何を選択すべきかを示唆して下さる。すなわち自分の中にある宇宙の意識に従うということである。そしてその力を伸ばすために毎月練習法をご指導いただいているのである。

この日は特別練習でスペースピープルへの呼びかけを行なったが、数名の方が窓外に光体を目撃するという大成果を収めた。やはり私たちは宇宙の方々の祝福を受けていると言える。

最後の質疑応答では内容の濃い質問が多く、出席者の真摯な姿勢が伺えた。

今年に入ってから東京月例会は益々充実し、一月は七一名、二月は六四名、三月は八二名に及ぶ熱心な出席者で盛況を極めている。一人で行なう日常の学習も欠かせないが、私としては高い次元で宇宙哲学を実践されている久保田会長や遠藤氏をはじめとする素晴らしい方々の波動を直接感じるためにも、清水氏のように時間を作って直接東京月例会に足を運ばれることを心からお勧めしたい。

（東京本部役員・安藤澄雄）

▲上より東京月例会：篠芳史司会者、斉藤竹子司会者、1月月例会における会員講演担当の清水南氏。

◀今年一月の東京月例会。上から久保田会長講義、遠藤講師の講義とテレパシー開発練習。

▼今年1月13日の東京月例会出席者。

GAP-U.S.A. Launched!

ダニエル・ロス氏の快挙

アメリカGAP発足！

本誌に連載中の「UFO—宇宙からの完全な証拠」の原著者で、アメリカにおけるアダムスキー研究家として著名なダニエル・ロス氏は、かねてから日本GPAと密接に提携し、去る昭和六二年九月の日本GAP総会で講演を行なったが、ついに昨年一二月、カリフォルニア州ウォールナットクリークを本拠にして「アメリカGAP」を設立、「UFOと宇宙科学」と題する機関誌第一号を発行してノロシを打ち上げた。これで世界のGAPネットワークに強力な一環が加わることになった。

新機関誌第一号は菊判変形、二〇頁の優雅な作りで、内容は九本の有益な記事に満ちて、ロス氏の熱意と活動状況報告が圧縮されている。以下はその紹介。翻訳は坂本貢一氏。

アメリカGAP

この小冊子はジョージ・アダムスキーの宇宙的な知識と普遍的な心理を基盤に、今般アメリカにおいて初めて創設されたGAPプログラムの、記念すべき第一号のニューズレターである。

この新プログラムの創設者である私ダニエル・ロス（『UFO—宇宙からの完全な証拠』の著者）は、一九七〇年代から今日に到るまで、この分野の真の知識を大衆に伝えるべく、様々な活動を続けてきた。宇宙科学およびUFOの専門家としてこれまでにつちかってきた知識と豊富な証拠記録を、私はこのプログラムを通じて出来るだけ多くの人々に伝えたいと思う。

このプログラムの最大の狙いは、地球に飛来する友好的な惑星間宇宙船群に関する真実と、他の惑星群に知的生命が存在することを、明確な裏付けとともに、より多くの人々に伝えることにある。

我々は、故ジョージ・アダムスキー氏を、この分野の偉大なる先駆者であると認め、彼の体験・主張を強く支持するものである。彼は、著者、教師、講演者として、宇宙に関する豊富な知識、ならびに、太陽系の他の惑星に住む人々に関する真の情報を私達にもたらしてくれた。

このプログラムの遂行に欠くことのできない最も重要な原則の一つは、アダムスキー亡き後も活発に活動を続けている海外のGAP諸兄をはじめ、長年この分野で尊敬に値する研鑽を積んでこられた世界中の数多くの個人研究家達と、強い連帯を深めつつ、共に前進して行くことである。

我々のなすべきことは、果てしなく横たわっている。しかしながら、UFOと宇宙に関する真実がより多くの人々に理解されるにつれ、我々のゴールも確実に近づいてくると信じている。

今後のニューズレターで紹介されてゆく記事の殆どは、これまでアメリカ国内では全く紹介されたことのないものばかりである。アダムスキー氏の残した情報に、最新の宇宙発見事およびUFO情報を絡ませながら、真実の宇宙情報を余すことなく提供してゆくことになろう。

さらにこのニューズレターでは、国際的に活動する各国のGAPプログラムに関する情報も、随時伝えてゆくつもりである。

編集責任者　ダニエル・ロス

ダニエル・ロス夫妻

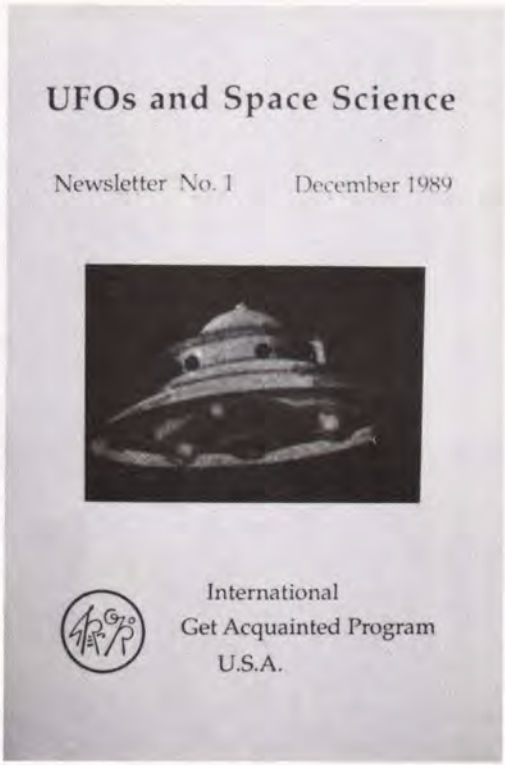
はじめに

今日の社会で〝宇宙〟という単語は、ただ意味もなく頻繁に文章の合間に登場する〝流行語〟にすぎない存在である。ラジオ、新聞、雑誌のどれをとっても、この単語の真の意味を伝えるものは何一つなく、ただやみくもに連呼しているだけである。

現在のアメリカ人のほとんどは、もはや宇宙という単語を聞くことに疲れ切っているとさえ言える。しかし、それをだれが責められようか？　地球以外の惑星に人類が住んでいることを知らされないかぎり、人々が宇宙という単語の持つ真の意味を理解することは不可能なのだ！

アメリカのノーベル賞作家ウィリアム・フォークナーは、かつて次のような鋭いコメントを発している。

「我々が興味のあるのは〝事実〟などではない。我々は〝真実〟が知りたいの



▲アメリカGAP機関誌第1号

だ！」

UFOという単語もまた、人々の間に流布する、ただの〝流行語〟である。この単語の真の意味を理解している人々もほとんどいないと言っていい。怪奇なアイディアや異次元の問題と結びつけられて、何の意味もない単語として流布するに至り、少なくとも、これが惑星間を飛行する宇宙船だという認識は、どの社会においても確立されていない。

真実を明らかにすることが、我々の役目である！

UFOは宇宙からの訪問者達の乗物であり、それらは金星をはじめ、この太陽系の惑星群からやって来る。それらUFOのホーム惑星群は、地球同様すべてが生命にあふれている。そして宇宙からの訪問者達は、皆我々と同じ人間である。

この真実を知らされて初めて、人々は、UFOを現実の物としてとらえることが出来るのだ。

このニューズレターの読者のほとんどは、ジョージ・アダムスキーの書いた三冊の本をすでに読まれたことと思うが、それらのなかでは、彼が他の惑星から来た宇宙船に乗り、宇宙人達と会見したときの様子が生々しく再現されている。中でも『宇宙船の内部』（中央アート出版社発行『第二惑星からの地球訪問者』久保田八郎訳の第二部に掲載）は、新しくUFOに興味をもち、それに関する正しい知識を得ようとする人にとっては、必読の書であると言えよう。

彼の別な著書『空飛ぶ円盤は着陸した』（『第二惑星からの地球訪問者』第一部）、『さらば空飛ぶ円盤』（中央アート出版社発行『UFOの謎』第一部）にもまた、貴重な情報が満載されている。

これら三冊の本の他にも、アダムスキーはさまざまな情報を我々に提供してくれた。そして、そのことを近年出版した私の本の中で示唆したところ、読者からの多くの問い合わせが殺到した。「情報源は？」「どんな内容なんですか？」という問い合わせだった。

そこでこのニューズレターでは、それらの情報を、順次読者に提供してゆこうと思う。中でも一番多いのが、彼が創設した国際GAPプログラムを通じての情報である。その他にも、幾つかの出版物類、協力者達が録音していた講演の記録、報道機関によるインタビュー、非公式な討論会等の記録などからの情報も提供してゆくことになる。それらの情報を一つ一つ説明していたのでは、ページがいくらあっても足りなくなってしまうため、ここでは、それらを一二に分類して、簡単に触れておくことにする。

・質疑応答
・科学と宇宙に関する特別報告
・一九六〇年代初期のニューズレター
・一九六三～一九六五年にかけて出版された『宇宙広報』
・惑星群に関する特別報告
・宇宙哲学に関する記述
・国際コーワーカー（協力者）への手紙
・その他の記述や記事
・世界中での講演記録
・その他の原稿と非公式討論
・宇宙船の写真と映画フィルム
・初期の活動と出版物

これらアダムスキーの莫大な遺産の中から、今回はとりあえず、三つの記事（非公式討論、手紙を含む）を紹介するつもりである。

アダムスキーの議論は、常に〝深遠なる哲学〟と〝生命に関する真実〟とに満ちている。今後順次紹介してゆく彼の遺産の一つ一つを何度も読み返すならば、宇宙と生命に関するより大きな理解が得られることは間違いない。

以上紹介した他にも、彼は、『超能力開発法』『宇宙哲学』『生命の科学』（三冊とも中央アート出版社より同題で発刊の予定）を著している。これらは、生命の真実を極めようとする人々にとっての、いわば〝テキスト〟ともいえるものである。

先程も触れたが、UFOの問題に興味を持ち正しい知識を得たいという人々にとって、『宇宙船の内部』は必読の書である。しかしながら、この書物（英文版）は現在絶版となっており、特に昨年からは入手が極めて難しい。

そこで私が思いついたのが、貸出のシステムである。以前クラスを持っていたとき、生徒たちに私の蔵書を貸し出していたのだが、当時このシステムが極めて効果的に機能した。これを今

後は郵送で行ない、この貴重な本を出来るだけ多くの人々に読んでいただきたいと考えている。

もとより我々は、アダムスキー氏個人のいかなる出版物をも販売する意志は毛頭ない。それゆえ、彼の著書が絶版となっている今、人々にそれを提供する手段としては、この〝図書館システム〟が最善かと考えた次第である。これに関しては、さらに考慮すべきことも多々あるため、次のニューズレターまで、最終結論は持ち越すことにする。

ジョージ・アダムスキー

大きな勇気と強い意志を持ち、常に真実も求めてやまない人物―それがジョージ・アダムスキーである。彼は貧しい家庭に生まれ育ち、〝世界〟という名の大学で学ぶことを選んだ。

全てを受け入れる柔軟な心と探究心の重要性に気付いていた彼は、クラスを持ち、講演活動も行ない、人生の教師としての地位を早いうちから確立していた。

その彼に、ある日、一人の生徒から六インチ反射望遠鏡が贈られた。それ以後彼は毎日空を見るようになり、望遠鏡にカメラを取りつけては、生徒たちとともに数え切れないほどの望遠鏡写真を撮り続けた。

やがて一九四〇年代の中頃から、彼は数多くの地球外宇宙船を目撃するようになった。それらを目撃した一般の人々は、奇妙な未知の物体に対してただ心を閉ざすのみだったが、彼は違った。忍耐強く観測を続け、極めて化学的な見地から、その実体を見極めようとしたのである。

そして一九五二年一一月二〇日、彼は、ついに、金星からやって来た男との劇的な対面を果たした。さらにその年の一二月一三日には、その金星人が乗ってきた宇宙船の鮮明な写真撮影にも成功している。

▲ジョージ・アダムスキー

これらを含む彼の様々な宇宙的体験は、彼の最初の著書『空飛ぶ円盤は着陸した』と、次の『宇宙船の内部』の中で詳述されている。

彼の著書が世に出るや、講演や、テレビ、ラジオへの度重なる出演とも相まって、アダムスキー氏の名はアメリカ全土に知れ渡るようになった。

そして、一九五九年には世界講演旅行を断行し、増え続ける海外の協力者達との情報交換はもとより、各国の政府高官達や科学者達とも面会して、多くの情報を交換するに至っている。

その後彼は、宇宙の友人達から得た知識を整理し、宇宙の広大さと可能性に気付き始めた新時代の人々に、科学的で哲学的な宇宙の真理を、より分かりやすい形で伝えるべく努力を始めた。(以上は、彼の三冊目の著書『さらば空飛ぶ円盤』の表紙からの転載である。この本は、友好的な惑星間旅行者達に関する情報の〝資料館〟ともいうべきものである)

私―ダニエル・ロス

海軍での体験

私が初めて原子力潜水艦に乗務することになったのは、今から、二〇年前、一九六九年の秋のことだった。原子物理学、電子工学、原子炉オペレーション技術に関する二年半の教育と、一年間の巡洋艦勤務を経た後のことである。

私が最初に乗務した潜水艦は『USSスキャンプ(SSN588)』であった。

一度乗務を命ぜられると、同じ潜水艦に三年間ほど乗務するのが通例なのだが、驚いたことに、スキャンプに乗ってまもないうちに、他の建造中の潜水艦への転属命令が下された。

しかしそれは私にとって極めて幸運な出来事だった。なぜならば、その先二年間の建造期間中、我々乗組員は、建造にも立ち会いつつ、その最新式原子力潜水艦の作動に必要な最先端の科学的知識及び技術を、しっかりと学ぶことが出来たためである。

しかも、海軍の原子炉オペレーターには、一般の原子炉オペレーターよりもはるかに多くのものが要求される。

そして、その厳しい原子炉安全運転試験を乗組員全員が完璧にパスして、最新式潜水艦USSピンタド(SSN672)が初めてその活動を開始したのである。我々はその建造過程からすでに二年間もその潜水艦にかかわっており、その機能を完璧に掌握していた。

「水中で垂直にしようと思えば、出来ないことはない」くらいに考えていたものだ。

もっともそれは、いかにピンタドとはいえ不可能なことであった。八千トンもの巨体が垂直になろうものなら、あっというまに海底に激突してしまう。それを建て直すだけの浮力はとても付け得ない。しかしながら、エンジンの

フル回転時には、普通の潜水艦では考えられないような急降下・急浮上が可能だったのは確かである。

さらに除隊間際には、別の潜水艦ではあるが、北極圏内から白海に向かいホーム・ポートに戻るまでの間、六十八日間も潜り続けたことがある。この驚くべき航海機能を備えた潜水艦の作動法は、惑星間を渡航する宇宙船のそれと、かなりの点で一致しているという。

一九七四年、私は除隊したが、それまでの海軍での八年間は、私に素晴らしい経験と知識を与えてくれた。さらに除隊後もしばらくの間、復員米兵保護法の適用を受けて、大学でじっくりと学ぶ機会を与えられた。この間に身につけた知識が、後の私の活動の大きな基盤となったのである。

アダムスキーの主張を確信

私の本にも書いたように、一九七四年、故郷の町の上空でUFOの一団を目撃したことがきっかけで、私はUFOと宇宙科学の研究に没頭し始めたが、当時は、その研究が先々どんな展開を見せるかは、かいもく見当もつかなかった。まして、後で本を書くようになることなど全く考える由もなかった。

やがて三年も過ぎると、私の書斎はUFOと宇宙関係の様々な本や資料、関連分野の文献などであふれんばかりとなっていた。

そこで私は、人々に正しい宇宙の情報を伝えるためには、それらを吟味して整理する必要があると考えた。

しかしその整理作業に手間はかからなかった。宇宙の真実が、ジョージ・アダムスキーを通じて、この太陽系の他の惑星の人々によって直接もたらされていたのである。

アダムスキーはUFOと我々の太陽系の生命に関する真実を的確に説明していた。私はそれが正しいものであることを確信し、以後の私の研究は、彼の主張を立証するものへと変わっていったのである。

活動を開始

アダムスキーの主張が正しいことへの確信が深まって、私は彼の情報を出来るだけ多くの人々に伝えようと決心した。

そこでまず私は、アダムスキーの撮影したものを中心に、全部で一〇〇枚を超す重要な写真をスライドにしたいと考えた。オランダのAVメディアセンターが、格安の値段でそれを引き受けてくれた。

同時に私は、NASAの写真担当部門に手紙を書き、最新の宇宙写真を数多く入手したが、それらは後になって、当初の期待以上の役割を果たしてくれた（ただし、この時点ではまだ、それらの写真からは何も発見出来なかった）。

さて、スライドを手にした私は、自分を呼んでくれるところがあれば、手当たり次第に出掛けていっては講演を続けた。昼食会から大学のクラス、小さな集まりから大きな団体の集会、ボーイスカウトの父母の会から科学者達の会合まで、とにかくあらゆるところで講演を行なった。

やがて、知らない人々からちょくちょく電話がかかってくるようになってきた。

「Bさんから聞いたんですけど、彼のクラブで講演をなすったそうですね。大変素晴らしかったということなんで、ぜひうちのクラブでもお願いしたいと思うんですが、いかがなものでしょうか？」といったものである。

まさに〝案ずるより産むがやすし〟である。どんな小さな一歩にも必ず結果が現れ、一歩一歩が貴重な経験となった。

やがて活動の範囲は広がり、成人学級や大学で講座を持つことになった。さらに、ラジオのトークショーにゲスト出演したり、新聞のインタビューなども受けるようになった。

そして、クラスの生徒や講演の聴衆に資料のプリントを配るようになるにつれ、私の活動にも名前を付ける必要が生じてきた。

公益宇宙科学センター

考えた末、私は自分の活動に、『パブリック・インタレスト・スペース・サイエンス・センター（公益宇宙科学センター）』という名を付けることにした。この名前は、現在アメリカで大衆保護、消費者擁護の立場で意欲的な執筆活動を続けるラルフ・ネイダー氏の記事にヒントを得たものである。

彼はその記事の中で、大衆の立場に立って研究活動を行なう科学者、すなわち〝公益科学者〟の必要性を説いている。

現在この種の科学者は極めて少ないのだが、それはつまり、政府や企業からの豊富な資金を基に活動を続ける一般の科学者達と違い、公益科学者達には常に資金難が付きまとうためである。

しかし彼らには、大衆が最も必要とする情報を最も必要なときに提供出来るという特典がある。その情報に大衆が大きな興味を示せば、報道機関もそれを無視することは出来ない。結局、一般の科学者達よりも、社会的にはるかに大きな役割をはたし得るのである。

以上が彼の論旨であった。これを読んだ私は、これこそまさに私の進むべき道であると考え、先のような名前を付けるに至ったのである。

本を書こうと決心する

クラスで生徒たちに教え、講演活動も精力的にこなしてゆくうちに、生徒達や聴衆からの手紙に混じって、宇宙科学者達からの手紙も数多く届くよう

になってきた。

ただ彼らは、私の収集していた宇宙発見事等の様々な資料には大きな興味を示したものの、UFOこそがメイン・テーマであり、残念ながら彼らと行動を共にすることは不可能だった。

活動を続けているうちに、私の『パブリック・インタレスト・スペース・サイエンス・センター』に興味を示し、強い支持と激励を寄せてくれる人々はかなりの数にのぼってきていたが、彼らもやはり、この活動に積極的に参加することは不可能だった。

いかなる分野においても同じであるが、この分野においては特に、ある事実を多くの人々の前で話し、それを人々に理解してもらうためには、表面的な事実だけでなく、その背景となる様々な知識を充分に蓄えておかなければならない。もちろん常にその全てを語るわけではないのだが、その背景となる知識を充分に持っているかどうかで、たとえ同じ事実を話すにしても、説得力が全く違うのである。

ただ、人前で、話すほどの知識を蓄えるには、大変な時間と労力を要する。それを一般の生活を営む他の人々に強いることはとても出来ない相談であり、結局私は、一人で黙々と活動を続けてゆくことを余儀なくされていた。

一人で活動を重ねつつ、人々に真実を伝えるためのより効果的な方法はないものかと、常に思案を重ねていた私に、ある日、一つの考えが浮かんだ。

この太陽系の他の惑星群からやって来る宇宙船に関する完璧な本を書いてみよう！　そう思い立った私は、すぐにその準備にとりかかった。

久保田八郎氏との出会い

一九八四年三月、一通の手紙が舞い込んで来た。差出人は久保田八郎、日本GAP会長であった。

私の活動をアメリカ人の文通相手から知らされたということだったが、その手紙をもらったときの私の感想は〝驚き〟以外のなにものでもなかった。

まず第一に、当時私は海外との接触は全くなく、機能を果たしているGAPプログラムがまだこの世に存在することすら知らなかったのである。

私は急ぎ返事を書いて、感謝と賞賛の意を示すとともに、今後の協力を丁重に依頼した。

少しして、久保田氏から二通目の手紙が届いたが、これがまた信じられないような内容だった。

まず、同封されていた日本GAPの機関誌『UFOコンタクティー』が、雑誌スタイルの素晴らしい出来栄えのものであることに驚いた。それが年四回発行され、日本の主要都市の書店に並んでいるという。さらに、当時全国二一の支部が活発な活動を続け、全国の会員が集まる総会が、毎年東京で開催されている。その年次総会の写真も同封されていた。

ジョージ・アダムスキーの宇宙哲学と科学的情報を広めようと、久保田氏のもとに何千人もの人々が集まり、素晴らしいプログラムが進行していたのである。

これが久保田八郎氏と私の、実りある文通の始まりだった。

日本GAPツアーに合流

準備を進めていた私の本が間もなく出版されようとしていた一九八七年の初夏、久保田八郎氏から、その年の日本GAP年次総会の席で、私に講演をお願いしたいという旨の手紙が届いた。私はもちろん、よろこんで引き受けることにした。

その手紙の中で、彼はさらに、八月に日本GAPメンバーを引き連れてアメリカ・メキシコの旅を計画しており、その旅の途中、ロサンゼルスで私達と合流出来ないだろうかとも打診して来た。

八月五日、私は妻のパムとともにロサンゼルスに出向き、久保田氏と、彼の率いる三五人からなるGAP旅行団の面々と感激の面会を果たした。そしてその夜ホテルでは、なごやかな雰囲気のもとに素晴らしい晩餐会が催された。

八月一四日、私の本がようやく出版の運びとなり、以後二週間は、個人の予約分を郵送したり、書店に配送したりと、連日超多忙の日々が続いたものである。それと平行して、私達夫婦はあわただしく日本行きの準備を進めていた。

日本GAP総会

一九八七年九月二〇日、日曜日、日本GAP総会が、東京銀座の朝日ホールにおいて開催された。そのホールのあった阪急ビルは、まばゆいばかりの超近代建造物であった。

会場には、日本全国から四〇〇人を越える人々がそのイベントのために集まって来ていた。また、前もって新聞でも紹介されていたことから、GAPメンバー以外の聴衆も何人かはいたようである。

当日のメインプログラムは日本GAP会長久保田八郎氏と私の講演だった。我々二人のテーマはもちろん、アダムスキーとUFO問題、そして宇宙科学に関するものである。

二人の講演に引き続いて、UFO写真や宇宙写真のスライド撮影、さらには質疑応答が行なわれ、最後に聴衆も含めた全員の記念写真が撮影されて、エキサイティングな総会は成功裏にその幕を閉じた。

総会終了後、近くの有名なレストランに参加者のうちの一〇〇人以上の人々が集い、盛大な大晩餐会が催された。

人々は総会の大成功を祝い、乾杯を

交わしながら豪華な料理の数々を賞味しつつ、打ち解けた雰囲気で歓談を続けていた。さらに、伝統的な日本舞踊、日本音楽、モダンなバンドによる西洋音楽と、様々な余興が次々と繰り広げられて行く。

まさに夢のような光景であった。

日本での素晴らしい体験

八日間に渡る日本滞在は、久保田八郎氏の心温まる配慮により、我々の当初の予想をはるかに越えた、それは素晴らしい体験であった。

東京都内の名所旧跡はもとより、滞在中我々は日光にも案内されている。

途中我々は秋田市に飛び、そこに住む新しい友人である坂本貢一・茂子夫妻のお宅を訪ね、そこでも素晴らしいひとときを過ごさせていただいた。

そしてアメリカに戻る日の前夜には、久保田氏をはじめ数人のGAPメンバーが我々のためにパーティーを開いてくれた。

アメリカに戻ってもしばらくは夢見心地で、別世界のような日本での経験から現実に立ち返るまでには、かなりの日数を要したものである。

正確なコンタクト地点に立つ

今年(一九八九年)の一月、久保田八郎氏と三人の親しい協力者達がカリフォルニアを訪れた。それはデザートセンターのコンタクト地点を正確に特定するための五日間のツアーだった。

久保田氏は過去数年の間にその地を何度も訪れてはいたが、ある人々に間違った場所に案内されたことなどもあり、一〇〇パーセント正確なコンタクト地点にはまだ到達していなかったのである。パム(パメラ夫人)と私は彼らから連絡を受けるやいなや喜び勇んで彼らのもとに向かった。

(以下次号)

◀写真上は一九八七年夏、米カリフォルニア州にてロス氏と編者(久保田)。中は同年九月、東京の日本GAP総会で講演中のロス氏。下は夕食会で歌うロス夫妻。

日本GAP企画第12回海外研修旅行

ローマ・エルサレム・ガリラヤ聖域の旅

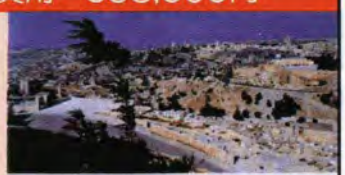
★期間＝1990年8月10日より19日まで10日間／費用＝598,000円

日本GAPは毎年海外研修旅行を実施して多大の成果をあげていますが、1990年夏には2カ国の聖域や遺跡視察の旅を行ないます（前号の広告では3カ国と発表しましたが事情によりトルコのイスタンブールを除外して2カ国とし、期間も12日間を10日間に短縮しました）。感動のエルサレムのイエス関係の遺跡、特にゴルゴタの丘の十字架跡に建てられた聖墳墓教会、イエスが逮捕される前夜に歩いた石段、ゲッセマネの庭園、ベツレヘムの生誕地跡、美しいガリラヤ湖、その他の至宝の遺跡を巡り、ローマでは古代の大ローマ帝国時代の名高い遺跡と世界最大のサンピエトロ大寺院を見学します。日本GAPは宗教とは無関係ですが、別な惑星と関連の深いイエス関係の必見の遺跡や名所旧跡を選びました。ベテランの田中正と久保田八郎が秘策を練った手作りの最高に楽しい日本GAP海外研修旅行にご参加の上、生涯の思い出を残して下さい。

日程

8月10日(金)夜、成田空港を出発、モスクワ経由ローマへ。11日朝ローマで飛行機を乗り換えてイスラエルのテルアビブへ夕方着。エルサレム泊。12日～13日はエルサレム市内外を見学。オリーブ山よりエルサレム旧市街を展望、イエスが刑場へ引かれたビア・ドロローサ(歎きの道)、聖墳墓教会、シオン山、イスラエル博物館、ゲッセマネ庭園、ベツレヘムの生誕洞窟、その他を視察。14日エルサレムからバスで死海海岸のマッツァダの遺跡へ登り、死海で海水浴に打ち興じ、クムラン洞窟、エッセネ派住居跡、エリコの古代都市遺跡を観光後、ティベリア泊。15日はガリラヤ湖畔の美しい土地を終日自由行動。16日、船でガリラヤ湖上を周遊、山上の垂訓教会、ナザレの町などを見学。夜ローマへ飛び、17日、バチカン市国のサンピエトロ大寺院、コロセウム、フォロロマーノ、トレビの泉、その他を観光。18日ローマ発、19日(日)午後成田着。

(以上大要のみ)●詳細については下記へハガキで案内書をお申込み下さい(非会員でも参加できます)。



▲写真上はオリーブ山から見たエルサレム市街展望。中は風光明媚なガリラヤ湖。下はローマ・バチカン市国のサンピエトロ大寺院。
(1986年度GAP旅行団。撮影＝久保田八郎)

ワールドセブントラベル株式会社 〒150 東京都渋谷区東3-24-9 サンイーストビル2F ☎03-499-2461 担当＝田中 正

※夜間は田中自宅の☎0474-77-4728へ22:00以後にお問い合わせ下さい。

UFO——宇宙からの完全な証拠

UFOs and the Complete Evidence from Space by Daniel Ross

Translated by Hachiro kubota

金星、火星、月に関する真相

●ダニエル・ロス／久保田八郎訳

連載第11回

第9章　金星の真相

（前回からの続き）金星に関する興味が再燃してからもなお、問題のマリナー2号報告は、金星の環境を論ずる上での基本原則として扱われていた。

そうした風潮の中であのカール・セーガンは、金星は地獄のように暑いとする見解を学位論文に示し、博士号を獲得している。

その理論の中で彼は、金星表面の大気圧は地球の数十倍だと仮定した。その後彼はハーバード大学において、火星に関する正統派理論にもいっそう磨きをかけ、科学雑誌上で多くの研究論文を発表している。一九七〇年代に入ってさらに野心的なプロジェクトを進めていたNASAが、そのセーガンをジェット推進研究所の指導者として迎え入れたことは驚くに当たらない。

ここで、UFO問題を充分に知り尽くしていた検閲者達の当時の動きを追ってみよう。

前にも述べたように、彼らは正統派理論に反した月と火星に関する発見事をそれまでどうにか封じ込めてきていた。それら二つの天体を取り巻く大気は無きに等しいものだということに関しては、一応、〝公式〟な証明が出来ていたと言える。

それに反して金星は、彼らにとって悩みの種であり、耐えがたいほどに濃密な大気の存在を一貫して主張することにまだ専念していた。一貫してその主張を続けることで、いずれ誰もがそれを信じるようになると考えていたのである。

共謀する米ソ両大国

ただ最初の段階では、米ソ両国がそれぞれの宇宙探査を基に独自の隠蔽工作を進めていたため、その内容にはやや一貫性に欠けた一面も見受けられた。

一九六七年一〇月一八日、ソ連は彼らの探査機ヴェネラ4号が金星表面に達し、大気圧は地球の一八倍3気温は摂氏二八二度を示すデータを送ってきたと発表している。一方でNASAは、その結果がまだ米国には知られていなかった一日遅れの一〇月一九日、金星付近を通過したマリナー5号による測定で、大気圧は地球の一〇〇倍、表面気温は摂氏四二七度であることが判明したと発表しているのだ。この時点における両国の協力体制は、まだまだ完璧とは言えなかった。

惑星探査に必要な宇宙技術を有するのは米国とソ連だけである。この超大国同士が金星や火星探査に関する一貫した公式発表のために協力し合うことなど、あり得ないと考える人があるかもしれない。だが実際、科学的分野およびその他の微妙な分野においては、高度な判断にもとづいて様々な合意と協調が成されているのだ。

この二国が共通の利益のからむ特定の分野において共謀関係にあるのは明白なことである。その共通利益の根幹を成すものが、現在の世界経済機構を維持することなのである。太陽系の他の惑星群に存在する生命、あるいは生命に適した環境などの発見は、この世界の組織権力構造を崩壊に導くことになる。

資本主義・共産主義を問わず、現在の社会体制を維持するためにどうしても必要なことは、軍事的緊張を持続させることにほかならないのだ。そしてその裏には、それに付随する軍備・兵器産業ならびにエネルギー支配者達の存在がある。自由電磁エネルギーを駆使して宇宙空間を旅する進歩した平和な文明の存在が明らかになれば、地球

の権力者達が拠所としている誤った経済システムは、壊滅的な打撃をこうむることになるのだ。

この二大国はどちらも秘密情報局を持ち、それら情報局はこの経済システムが疑われたり崩壊したりすることのないよう暗躍しているのである。

ここで、この超大国同士が微妙な分野においては、大衆の目を盗んで極めて密接な共謀関係にあることを示す良い例を紹介しよう。

潜水艦の衝突事件

サンディエゴ・イーヴニング・トリビューン紙は、二隻の潜水艦による水中衝突の事実を掲載して、一九七五年の新聞ジャーナリズム大賞を獲得している。この事故の一方の当事者は米国海軍所属のU・S・Sピンタドで、偶然なことに、一九七二年一〇月までの三年間、私自身が乗務していた潜水艦だった。

その事故は、一九七四年五月、ピンタドがソ連領域海内で活動中に発生している。潜水艦同士が正面から衝突し、双方とも船首に大きなダメージを受けたものの、ともに海面上に浮上後、大掛かりな修理を受けるためにホーム基地へ帰還することは可能だったようだ。

この事故の責任は明らかに米国側にあった。この米国潜水艦は、国際的に承認されている相手国の領海内で、ひそかに偵察活動を行なっていたのである。にもかかわらず、ソ連側がこの事実を公表した形跡はない。もちろん米国側からの発表もない。この件は、政府および国防省の高官達にのみ報告されただけだった。

この事故が最高機密として処理されたにもかかわらず、イーヴニング・トリビューン紙はその一年後に情報を入手し、二〜三の信頼出来る情報筋から話をまとめた記事と、グァム島の乾ドックに痛々しい姿を横たえたピンタドの秘密写真とを紙上に掲載したのである。国防省はその記事の内容を否定し、ピンタドの破損原因についても一切のコメントを拒否している。

この件に関してソ連は抗議声明を発することもなく、もちろん外交問題として取り上げることもなかった。

この事件は、超大国同士がお互いにとって利益となる問題に関しては、常に協調して動くことを示すほんの一例にすぎない。

私自身、一九七四年五月時点でピンタドに乗務していたかつての仲間を探し出し、この事故に関する確証を得ている。私の持参した新聞記事と写真を見た後で彼は、それが正真正銘の事実であることを私に語ったのである。

この潜水艦事故ではまた、〝隠された宇宙発見事〟に関する私の主張とも密接なかかわりを持つ、もう一つの重要な事実が判明している。

それは、同じ新聞に掲載されたこの事件に関する追跡記事の中で明らかにされたものだが、「軍事偵察任務には二種類の航海日誌が存在する」というものであった。

一つはいわゆる〝公式記録〟として記載されるもので、一般公開の必要が生じたときにはいつでも開示できるようになっている。そしてもう一つが正真正銘の航海日誌で、実際の出来事や偵察内容が記載されており、特定の情報機関と国防省のみが閲覧可能なのだという。

複数の〝航海日誌〟が、宇宙探査においても存在することはいうまでもない。情報を求める大衆には、偽りの、操作された、あるいは全く意味を成さないデータのみが与えられるのだ。この世界で広く用いられている大衆教育の常套手段である。

一九六七年のマリナー5号以降、サイレンスグループはNASAの提供する〝公式データ〟を武器に、国家安全保障局を通じ、惑星に関する宇宙情報を完全にコントロールするに至った。

金星は居住可能で、それは地球を訪れるUFO群のホーム惑星だという考えが当時はまだ根強かったのだが、そういった考え方を一掃すべく、政府とNASA報道官達は、この年以降一貫して、「米ソ双方のすべての金星探査機が、摂氏四二七度以上の表面温度と地球の約九〇倍の大気圧を確認している」ことを強く主張するようになった。ソ連政府および宇宙局もまた同一の歩調を取り、それらの数値は現在に至るまで一貫して発表されてきたのである。

二重データのカラクリ

ここで私たちは、金星探査機の探知能力の問題はさておいたとしても、その生のデータに触れることを許されているのは、ほんの一部のNASA高官達だけであることを見逃してならない。一般のNASA職員やその計画に参加している他の科学者達に届く情報は、実をいうと途中で一度中断されたものなのである。

探査機が集めた情報はコード信号の形で地球に送られ、政府の巨大な電波望遠鏡にキャッチされる。そしてその信号は、正しくプログラミングされたコンピューターによる解読を経て初めて理解される。正しい結果を得るためには正しい解読器が必要なのである。探査機から送られてきた電子信号と、正しくプログラミングされたコンピューター回路がマッチして初めて、真の情報を得ることができるのだ。

例を上げて説明してみよう。もっともこれは、思い切って簡略化して分かりやすくしたものである。

ある探査機が金星に着陸し、そこの気温を測定したとしよう。その値は二進法のコード信号の形で、遙かかなた

の地球に送られる。最高機密管制室内の装置は、極秘に用意された正しい解読機を通して摂氏二一二度という値を導き出す。この値を知り得るのは一般の高官達だけである。

一般に知られる宇宙センター内の制御盤にこの信号が到達するのは、その後のことだ。歪められた計画どおりの情報をそこにもたらすのは、それほどむつかしいことではない。あらかじめ歪められてインプットされているそこのコンピューター装置は、届いた信号を四二七度と翻訳する。

そしてその値を、一般のNASA職員や報道機関などが正しい値だとして受け入れ、ひいては、一般大衆もまたそれを信じることになる。

また、決められた数値をもたらすようにインプットされた解読器が必ずしも必要なわけではない。送られてくる曖昧な測定値群に偽りのデータを混入するだけでも充分なのである。正統派理論と一致すると思われる大気の構成成分などに関する測定値群は、何の制限も受けずに解読器を通過しても問題はないだろう。

それともう一つ、我々の探査機の持つ能力が、実は極めて限られたものだということも認識していただきたい。正確な探知能力を持つなどとはとても言えないのである。事実、探査機が送ってくる情報は全く曖昧なものばかりで、その解釈はよく議論の種になる。

ある信号の解釈に賛成した科学者が、その他の信号の解釈には異議を唱えるといったことがよくあるのだ。

宇宙科学の分野において、神聖にして犯すべからざるものが何か存在するとすれば、それは、金星表面に関する〝高温高気圧〟の理論であろう。

この理論に関してはこれまで様々な理由付けがなされてきた。しかし、いまだに誰一人として、それを明確に証明したり科学的に説明することのできた人はいない。

結局この問題に関する唯一の権威として認められているのが、NASA高官達なのである。惑星の表面の様子を知る唯一の方法は、そこに着陸探査機を送ること以外にはない。そして、そこから送られて来る信号に直接触れることのできるのは、彼ら高官達だけなのである。その意味において彼らは、この分野における絶対的な権威を誇示しているといえよう。

その他の人々は単に彼らから説明を受けただけなのである。つまり、その他の人々がいくらしたり顔で理論を述べたてても、それは単に聞かされたことをそのまま述べているに過ぎない。他の人々にとって、NASAの発表が正しいものか、あるいは間違ったものかを証明出来る唯一の方法は、自分でそこに探査機を送ること意外にないのだ。

金星が超高温・超高気圧を持つ惑星だということを躊躇なく教え、書き、論じている科学者達は、当然のことながら、NASAを絶対的な権威だと承認していることになる。そうでなければ、彼等の理論はただの空論だということになってしまう。なぜならば、いかなる科学的な手段を用いたとしても、地球からの観測ではその理論を証明することが出来ないからだ。

どの惑星であろうと表面の真の状況を知る方法は、その惑星を取り巻く電離層の下へ探査機を送ること以外にない。電離層とはイオン化された粒子群により構成されている大気の層で、惑星の上空約八〇キロないし六〇〇キロに渡って存在している。

NASAを盲信する科学界

ここで特に認識していただきたいことは、これまでの間UFOに関する真実を隠しその情報を歪めてきた政府機関と、現在科学界や大衆に惑星情報を与えている政府機関は全く同一の機関であるということだ。UFOと惑星情報に関する検閲体制は、極めて密接にからみ合ったものなのである。

さて、これまでの金星に関するNASAの発表が表立って疑問視されなかったのには、二つの理由がある。

まず一つが、UFOに関する明確で真実味に溢れた証拠に対する科学的な理解が示されなかったこと、つまり、この問題が正しく認識されていなかったことである。

そしてもう一つが、政府の宇宙探査報告を確証、あるいは反証することは誰にも出来ないという現実の中で、人々はどちらかというと、公式な発表は全て正しいものだとして受け入れる傾向にあったことである。

NASAが一貫してとなえ続けてきた金星の気温と気圧の値を、科学者達は無条件で受け入れてきた。それを真実として受け入れてきたのである。そしてそれは宗教界における教義のごとく犯すべからざる基本原則として定着してしまった。科学者達はその証拠を求めることもせず、発表されたことをただ鵜呑みにしてきたにすぎない。

金星の大気に関するその他の観測値群も発表されているが、それらの数値がいかに信憑性の高いものであったとしても、金星環境全体を論ずる上で、超高温・超高気圧の絶対的な〝信仰〟が常に基本原則として存在してきたのである。

私は、金星研究にたずさわった科学者達に対して、ある種の同情すら感じてしまう。なぜならば、彼らは決して解くことのできないパズルを与えられていたようなものだからである。

事実、金星の環境に関してはまだ大きな謎が存在するという見解が、科学雑誌上で何度も示されてきた。「多くの点でこんなにも地球に似ている惑星が

▲ジョージ・アダムスキーが1950年代に一族と共にすごしたパロマー山腹のパロマーガーデンズの建物跡。敷地はコンクリートで固めて記念に残されている。右奥の小屋はアダムスキーが建てたもの。上半分は改装されている。撮影／久保田八郎

えられ事実を隠されたために、一層複雑化した研究を強いられたという意味では、確かに同情を禁じ得ない。それは、理不尽な仮説のもとでの決して解くことのできないパズルだったであろう。

しかしながらそこで、彼らはなぜ、発表された測定値群そのものの信憑性に疑問を抱かなかったのだろうか。

金星大気圧の矛盾

私の仲間の一人が、ある簡単な分析により、金星の環境に関する公式見解の大きな矛盾点を指摘している。

まず初めに、金星と地球の引力はほぼ同じであることから、それぞれの天体はほぼ同じ体積の大気を保持しているということ、さらに大気の圧力、体積、質量、温度の相互関係は、物理の基本法則の一つである〝理想気体の法則〟に従ってほぼ推移するはずだということを認識していただきたい。

さて、金星が常に一定した体積の大気を持ち、その体積が地球と同等であることが理解できれば、金星の大気圧と気温との相互関係を、地球の場合と比較しながら簡単な数式から導き出すことができよう（この種の科学計算には絶対温度が用いられるが、それは摂氏温度に二七三度を加えたものに等しい）。

気体の法則によれば、体積が一定に保たれている気体の圧力は絶対温度に比例して推移するという。つまり、温度が二倍になれば圧力も二倍になるということである。ここでは、地球の平均気温をとりあえず摂氏二〇度ということで考えてみよう。絶対温度に換算すると二九三度である。そこで、この気温が、金星の気温だといわれている四五五度、絶対温度で七二八度まで上昇したとすると、そのときの地球の気圧は約二倍半まで上昇することになる。

$$P_2=\frac{T_2}{T_1}(P_1)=\frac{728^\circ K}{293^\circ K}(P_1)\fallingdotseq 2.5気圧$$

（P_1＝1気圧，T＝温度）

次に、地球大気の主要成分である酸素と窒素を、金星大気の主要成分だといわれる二酸化炭素におきかえてみたらどうなるだろう。二酸化炭素の分子量は、酸素・窒素の混合気体である地球大気の分子量の一・五倍であるにもかかわらず、そのおきかえによって大気圧は何ら影響を受けない。これは、「与えられた体積と温度のもとに発生する圧力は、その気体の種類によって全く影響を受けない」という、液体や固体とは異なった気体の持つ特筆すべき性質による。

気体の種類によって影響を受けず、たとえ四五五度という高温のもとでも、その大気圧は二倍半までしか上昇しないとすれば、それ以上の大気圧を得る方法は、大気の総量、つまり、質量を増加させること以外にない。しかしそ

その大気圧は二倍半までしか上昇しないとすれば、それ以上の大気圧を得る方法は、大気の総量、つまり、質量を増加させること以外にない。しかしそれも、次の理由で不可能である。

惑星の持つ引力の強さによって、大気の体積および外側の境界が決まるのだが、大気は何も密閉された容器内に閉じ込められているわけではない。大気の質量が増すことで圧力が上昇し始めると、それにつれて気体分子群の運動エネルギーも増加してくる。その結果、やがては惑星の脱出速度を越える分子群が次々と現れ、宇宙空間に消えてゆくことになる。そもそも一定の引力場内の大気が増え続ける圧力を保持することなど不可能なのである。エネルギーレベルの上がった分子群は、大気が元のあるべき姿にもどるまで大気圏外への脱出を続けることになる。惑星の引力場が持つ〝自動調節機能〟である。

そして、金星と地球はほぼ同じ強さの引力を持ち、ほぼ同じ体積の大気を持つということを考えれば、金星においてもその引力場の持つ自動調節機能が働き、大気圧が異常に高くなることなどあり得ないとするのが論理的である。まして、地球の九〇倍などという公式発表値は、ただバカげているとしか言いようがない。それは単にいい加減であるばかりでなく、全く不可能な数値なのである。科学的な見地からすれば、それは作り話以外の何ものでもない。同等の引力を持つ天体は、やはり同等の大気圧を持つということが、基本的な科学法則から導き出される極めて自然な結論である。

金星の表面温度は地球と同じ?

ところでNASAの宇宙発見事を記録した本物の〝航海日誌〟には、「金星の表面気温は地球とほぼ同等である」と記されているようだ。マリナー2号の報告が間違いであったことを示唆する写真が、一九七四年のマリナー10号によって送られて来ている。この探査機には二台のテレビカメラが搭載されていた。

マリナー10号の第一の目的地は水星であったが、その飛行の途中で金星付近を通過したため、いわば特大のボーナスとして金星の写真撮影が可能となったのである。地球を撮影した一九六六年の気象衛星写真を見て、金星の雲のカバーに対する考え方を変えて以来、宇宙科学者達が待ちに待った機会が到来したのだった。

一九七四年二月五日、マリナー10号は金星から約五六〇〇キロの距離に最接近している。しかし報告によると、その最接近時には、写真撮影が行なわれなかったという。金星の全体像を映し出した写真が撮影されたのはその翌日のことである。一台の電子カメラによる五六の映像をコンピューター処理することで、一枚の完全な写真に仕上げられたものだった。(原書の)写真22がそれである。

NASAによれば、この金星の写真は、二月五日に金星を通過した翌日の二月六日に、約七二万キロかなたから後ろを振り返って撮影したものだということだ。またこの写真では、約六キロ以上のものは識別可能だとされた。ということは、少なくとも六キロ四方以上のあらゆる形の雲をそのカメラは見たことになる。つまり、金星大気のかなり正確な様子がその写真で見て取れるということである。

この写真を見て、地球からの観測で長い間全く隙間がないと考えられていた金星の雲のカバーが、実はあちこちで大きく破れ、様々な動きを見せていることに気付く人は私だけではないはずだ。この写真は金星環境に関する古臭い正統派理論に相当な打撃を与えたかに見えた。

しかしNASAは、雲が裂けて動いているように見えるのは、大気中の未知の成分による紫外線吸収を増強する目的で複数の青いフィルターを使用したためであり、実際の金星は隙間のない厚い雲のカバーに覆われていると主張したのだ。

要するに彼らは、世の中に定着した金星に関する誤った信仰(正統派理論)を追い払うのは時期尚早だと考えたのである。つまり、従来の理論通りの説明に終始することで金星の居住可能性に関する議論を巧みに回避したのである。

金星の自転速度の誤り

続く二月七日、さらに遠方に移動したマリナー10号は金星の全体像を連続写真に収めているが、その一連の写真群には、金星の雲が休みなく変化しながら、かなりの速度でその惑星のまわりを移動する様子が映し出されていた。その動きの様子から、上空の雲が一周するのに要する時間は、およそ四日ほどであろうと推定された。この雲の動きは一九七八年のパイオニア探査機によっても確認されている。

この事実は、「金星の自転速度はものすごく遅い」という理論に長年固執してきた科学者達にとっては大変な問題だった。その古い理論では、金星の自転速度はとてつもなく遅く、一周するのに地球時間で二四三日もかかるということになっているのだ。

この金星の一日に関する問題は、これまで絶えず論争の的となってきた。なぜならば、たとえ探査機からでさえも、その表面の様子は見えないからである。

過去において様々な天文観測法が駆使された結果、金星の自転速度は、地球時間に換算して二十四時間から二四

三日の間であろうと推定されていた。そこで、NASAの隠蔽工作にかかわっていた高官達は、その後者の値を支持するようにと命令されていたに違いない。一九六二年のマリナー2号探査の報告で彼らは、他の様々なニセ情報の提供とともに、「電波観測の結果、金星の自転速度はほとんど感じられないほどに遅いことが確認された」ことを強調している。そしてこの件は、以後の探査でも予定通りに確証されてきたのである。

地球からの電波観測では、公式に宣言された金星のその自転速度を、確証することも、また反証することもできない。金星までの距離があまりにも膨大なためである。たとえば地球から同じ強さの電波信号を一つは月に、さらにもう一つを金星に送り、それぞれの反射波をキャッチした場合、金星からの反射波の強さは、月からのそれと比較して何千万分の一にもなってしまうのである。

もちろん、最近の電波探知器は相当な進歩をとげている。しかしながら、二四三日という金星の自転速度が初めて理論化された（一九六一年）とき、金星からの反射波を宇宙の彼方からやって来るそれ以外の無数の電波ノイズと区別するだけのために科学者達は数週間をも要しているのだ。さらに自転速度を決定するためには、このほとんど識別不可能な反射波から〝ドップラー効果〟を読み取るという、とても信じ難い作業がなされねばならなかった。その結果決定された自転速度は、反射波の識別結果とともに全く主観的な結論だと言わざるを得ない。

実を言うと、この極めて問題の多い結論を導き出した研究は、政府の資金援助を受けた、いわば政府プロジェクトだったのである。間違いを犯しやすい方法が取られ、その解釈も極めて主観的なものだった。

電波観測による惑星表面の地形持定の技術は、ここ一〇年間かなりの進歩をとげたものの、客観的な姿勢を持つ現代の科学者達は、今の技術をもってしても、地球からの電波観測で金星の自転速度を正確に決定するのは不可能であることを認めている。

では、現在科学的に認められ全ての科学文献に記されている、一週二四三日という金星の恐ろしく遅い自転速度は、実際、何を根拠にしているのだろう？

これもまた表面気温と大気圧同様、宇宙探査の〝公式発見事〟が根拠となっているのである。そしてその〝公式発見事〟は、金星の雲の正しい姿が発見される以前の理論、つまり、正統派科学者達が当時好んでいた理論にマッチするようにデザインされたもののようだ。

一九七四年と七八年に米国の探査機が撮影した写真群により、金星の雲のカバーには裂け目と動きがあり、約四日間の周期で一周していることが明らかになっている。にもかかわらずNASAは、その大きな矛盾点をなんら直そうとはしなかった。そこで科学者達は、金星環境に関する解決不可能なパズルを新たにもう一つ与えられたことになる。

この太陽系内で金星だけが異常に遅い自転速度を持つということ自体、全く非論理的な話である。さらに、金星がNASAの主張するほどに静かな天体だとすれば、あれほどの速度で雲を動かす大気の流れは、いったいどうして起こるのだろうか？

この地球上に存在する偏西風や貿易風などの大きな風の流れは、地球の自転によって発生することを私たちは知っている。そして、異なった風同士の相互作用によって様々な気候が現れてくる。地球の自転がつくり出す〝コリオリ力（効果）〟はまた、大きな海流を引き起こす原動力にもなっているのである。ということは金星においても、かなりの速度を持つ金星の自転が原動力となって、その速い雲の流れを引き起こしていると考えるのが論理的というものだ。

一九七四年のマリナー10号以来、米ソ両国はそれぞれの宇宙計画に基づき数々の探査機を金星に送ってきた。恒例の記者発表が行なわれ、新聞は型通りの内容を報じ、科学雑誌は正統派理論通りの結論を詳しく述べたててきた。その間の金星環境に関する記述内容には、大きな変化は見られていない。表面気温と大気圧等に関する歪められた数値が、各報告の土台となっていたからである。そして、この種の情報が長年にわたって報道された結果、金星には生命が存在しそうもないという情報に飽き飽きした大衆が、この天体に関する最近の発表にもはや興味を示さなくなったのはいうまでもない。

この本では、なぜ、秘密主義の支配のもとでニセの惑星情報が流されるようになり、それが不朽のものとなってきたかを説明してきた。ある情報機関がその主要な役割を果たし、下部組織であるNASAが表立った大衆教育を遂行してきたのである。

しかしながら、過去三〇年に渡りニセのUFO情報を流し続けてきたその組織勢力からの惑星情報に、有能な宇宙科学者達は二度と目を向けようとさえしない。

この本ではまた、金星に関する公式発表がウソと矛盾に満ちたものであることの根拠を示してきた。こういった発表を基にした理論は単なる空論でしかない。真実が強大な権力によって否定され、逆に正反対の虚像が示されてきた。宇宙科学はかつての輝かしい望遠鏡研究の時代から大きく後退し、今や無意味な話題の戦場と化してしまったと言えよう。（第9章完。以下次号）

Letters

ユーコン広場

投稿歓迎 字数を問わず。匿名発表可なるも住所氏名明記のこと。

凄い内容の本誌一〇八号

横浜市　加藤路徳

ユーコンの一〇八号が二日前に届きました。読んだのは次の日ですけれど「これは凄い記事だ！」と思うのがほとんどです。アダムスキーの記憶に関する事柄も大変重要だと思いましたし、先生のアダムスキー哲学の活かし方にも大変感銘を受けました。また秋山氏の能力開発のノウハウや情報などにも改めて驚かされました。ちなみにスプーン曲げの実験に出てきた〝男性〟は私です。

最近は予知的なものがかなりあります。印象がはっきりと来たものを報告しておきましょう。

一月二三日の朝に、「今日は〇〇先輩が学校に来る」と思っていましたら、午後にその先輩が部にやって来ました。もう一つあります。それは一月一七日に家で少したた寝をしていて、目が覚める直前に、「一〇」という数字がやってきました。「おや？」と思い、「これはまだ起きない方がいいな」と思い（というより感じ）まして、印象を待ちました。すると次は新聞のテレビ欄のわくが印象としてやってきました。次にそのわくの中に「UFO」のいう三文字がおさまり、文字の横に「一」という数字も伝わってきました。印象がやって来なかったので、早速起きて考えてみました。

結論としては、「次の日にUFO問題のことを一〇時にやるのでは」と思いましたが、次の日の新聞を見ると、午前中の一〇時ではなく、夜の一時頃にやる一〇チャンネルのテレビ朝日のプレステージにそれがありました。やはり宇宙の意識は偉大な教師だと改めて感じた次第です。

それと一月の一三日にUFOらしき光を目撃しました。夕方、学校から帰るときに左の建物にある生物室を見たくなり、その方向を見たのですけれど、建物の右に豆くらいの光る物がありまして、その方向に目をずらすと消えてしまいました。その間〇・五秒もなかったように思われますけれど、光か残光かよく分かりません。

最後にお忙しい中本当に有難うございます。秋山氏にも感謝致します。これからもよりよき活動を期待しています。頑張って下さい。

一〇八号の充実ぶりに驚く

岡山市　金政偉智郎

今回の一〇八号の内容の充実ぶりには驚きました。わずか五〇ページ足らずの本の中に、ぎゅっと詰め込まれた知性が溢れんばかりですね。深く深呼吸して言葉の香りを体いっぱいに吸い込みたいと思います。

別な惑星での過去世？を思い出す

東京都　中川美子

UFOコンタクティーをお送り下さいましてありがとうございました。すばらしい雑誌なので、友人達にもご紹介しました。

ジョージ・アダムスキーという方の名前を知って、二カ月、毎日が喜びと驚きに満ち、充実した日々を過ごしております。こうして宇宙哲学にたどり着けました幸運を皆様に感謝致しております。

私は今年の二月ごろ父の一三回忌の法要を期に自分の神秘体験を小冊子にまとめようと考えておりました。父の死後、霊界を見て来たと信じていたのです。原稿用紙何一〇枚にも書いたものを清書しようと思ったとたん、右手がひどく痛み、ペンどころか、はしも持てなくなってしまいました。仕方なく仕事を中断しておりますと、ひょんなこと事から自分の三つの過去世が解けてしまいました。そのようにして準備のできたところへアダムスキーの本に出会いました。

私が見たと思った霊界の様子は金星での過去世の記憶だったのでしょうか。自分の着ていた白いガウンのような服、影のできない室内、とても明るい真夏のような天候なのに少しも暑くなく、春のようなさわやかさであった事、口や耳を使わず頭の中でダイレクトに声がひびくテレパシーで会話した事など、金星の様子とすべてが一致していました。

霊界がないという説を受け入れることは本来大変な事だと思いますが、自分の体験があったために細胞の記憶だというアダムスキーの説を納得することができました。

その後UFOらしき光を見るようになり、ある日ピカッピカッと光る物体が私の想念通りに動いて下さって、その上向こうの方達から「もう一度やりますから」というテレパシーを発せられて、もう一セット繰り返されたときには感激以上のものがありました。

別の日に「こちらに飛んで来て下さいますか」という望みに答えてまっすぐに飛来して来たものは、折り重なるように飛ぶ二機の小さな円盤でした。その後望遠鏡で、一カ所に止まり、光っているいつもの物体を見たら窓がいくつもあって下から光を発していました。母船といわれているものなのでしょうか。地球の人類がまだ持たないこれらの物体をあやつる異星の友は何てすばらしい方々なのでしょう。その人々から、宇宙的な波動を学びたいと思います。

初めて出席させて頂きました先日の月例会でお聞きしました二三日の富士山行きは、夜も興奮して眠れない程楽しみに致しております。必ずUFOが姿を見せて下さるというテレパシーを受けております。特に二三日の日に注目しています。

今年は本当に楽しい事で幕がおりようとしています。来年もどうぞよろしくお願い申し上げます。先生のますますのご健勝とGAPのご発展をお祈り申し上げます。

テレパシー能力が発達

茨城県　工藤光博

早いもので日本GAPに入会させていただいてから今月で丸二年になります。この間いろいろのことがありました。偉大なアダムスキー氏と宇宙哲学を知るようになり、又秋山眞人氏という超能力者に会うことができ、これまで持っていた価値観が完全にくつがえされてしまいました。太陽系には全部で一二の惑星があり、その全てに人間が住み、地球が最も遅れている。これまでそういう事実は学校はもとよりNASAの発表でも全くうかがい知ることができませんでした。我々大衆は情報操作によりみごとにだまされていた訳です。まだ多くの人々が科学という名のもとに否定しているのは残念でなりません。

そこで私もGAP会員として身近の人たちに知らせる必要を感じ、何人かに話しました。その結果殆どの人は作り話だといって相手にしませんでした。わずかに興味をいだいた人も「君はそういうことに関心があるんだね」という感想を述べるにとどまりました。

ところで、秋山氏の特別プレゼントをいただきました。ボストン・クラブ主催のクリスマスパーティーでテレパシーゲームに優勝したのです。秋山氏の送った数字を三回（一回二けた、二、三回目一けた）受信することができました。ほんとうに偶然でしたが、これもアダムスキー氏のテレパシー実践（開発）法を日頃実施しているおかげだと思います。これ一つとっても宇宙哲学のすばらしさが証明されたような気がします。賞品の電子レンジは田舎の母親にプレゼントしました。

地球が一日も早く他の太陽系惑星のような慈愛に満ちた世界になるよう頑張っていきたいと思います。これからもご指導とご鞭撻を宜しくお願い致します。

清水南氏が覚醒させた

山梨県　小尾智子

今年よりGAP会員になりました。その一〇八号の巻頭言はまさに私の入会動機となったことについて書かれてありました。以前よりUFO、超能力等、興味をもっておりましたが、テレビの特集番組を見て疑問をいだき、もっと深く知りたいと思っておりました。新聞に清水南さんの「Uコンを差し上げます」という記事を見て一〇月四日に電話しました。早速五冊いただきました。その一〇一号のUコンを読み、夜も眠れないくらい感動しました。感想を書き送ったところ、一二冊も送っていただきました。八九号より一〇五号まで合計一七冊です。

春川氏の記事も素晴らしく疑念すら起こりませんでした。それ以来、私立図書館へ行き清水さんが寄贈されたアダムスキー全集を読みました。私には少し難しいところも多少ありましたが、これによって自己の人間改革をしなければという気持ちで一杯です。この本をきっかけに宇宙のこと等々に興味を持ち、読書三昧にふけっております。入会してから一〇六、一〇七号の二冊をいただき合計一九冊です。本当に清水さんのように熱心な人はすごいと思います。感謝の気持ちで一杯です。私の友人達にUコンの話をしましたが、誰も深い興味を示さないのには驚きました。まさに「カルマ」の違いですね。

結婚前は、子供を生んであと一〇何年しか生きられないというあの一九九九年人類滅亡というのが頭から離れず投げやりな気持ちもありました。現在子供が三才と一才ですので子供の未来が明るいものであってほしいと切に思います。とかくマイナスの想念になりがちなので、プラスの想念になるよう気を引き締めていきたいと努力の毎日です。〝二一世紀を平和に幸せで迎えることができる〟と念じながら。

久保田先生もお体に気をつけてこれからも頑張って下さい。

宇宙哲学で病気を克服

仙台市　太田節子

久保田先生お変りございませんか？先日はわざわざ御礼の御手紙を頂き、有難うございました。お蔭様で体調のほうも僅かずつではありますが良くなってきているように思われます。

一月には本当に久しぶりに「東京月例会」に出席させて頂き、有難うございました。体調が悪く、めまいもして、多少辛い思いも致しましたが、思い切って行ってみて本当に良かったと思いました。それ以上に、風邪で体調が悪いにもかかわらず月例会で御講義をされている久保田先生のお姿を拝見し、とても感動致しました。そして私自身、とても励まされる思いが致しました。とにかくひとりで東京まで行ってこれたということで、とても自信が付きました。「絶対に行ってやるぞ」と思えば何とかなるものです。今月も「東京月例会」に出席させて頂こうと思っておりますので、よろしく御願い致します。

最近、秋山氏の「健康コントロールのための超能力」というカセットテープを購入し、毎晩就寝前に聞いています。久保田先生が、御講義の中で話されていた「人間の体は粘土細工と同じで、想念しだいでどうにでもなる」ということばを心の中で繰り返し、毎日頑張っています。大分、春めいてきました。いつもこの季節になると、言葉にならない、とても懐かしい思いが込み上げてきます。一体、何なんだろうと思いながら、いつも分からないまま季節が過ぎていきます。

月世界を思う

高松市　向井　裕

ユーコン広場（一〇八号）の記事に、早速、全国各地からお手紙をいただき、うれしい悲鳴をあげています。先日お送りしました陸?士の「偕行」誌に、今月も載りました「UFO最新情報」と「月に関する研究報告」のコピーをお届けします。

同封の「映画創世期」、一〇〇年前の月世界旅行（無声）を見ました。パリーのジョルジュ・メリエスの映画に驚きました。軽装の六人の宇宙飛行士が弾丸状の宇宙船に乗って、長い砲身の大砲で打ち上げられ月に到着します。彼らは酸素マスクもなしに平気で月面活動します。月面は地球上と同じく樹木が茂り、月人が住んでいます。撃ち合いがはじまりますが、月人は死なず消えるだけ…。

一〇〇年前までは、いや最近まで、月は地球と同じ環境だと考えていたのですね。一体全体、月は空気もない死の世界だと、誰が言いはじめたのでしょうか？

ユーコン誌で生き甲斐

香川県　津川裕司

久保田先生有難うございます。母を亡くして悶々の日々を送っていたところ、ふと書店で目にとまったのがユーコン一〇五号でした。アダムスキーに会った唯一の日本人が近くに住んでいる。私は興奮して探しました。向井先生はユーコンに書いてある通りの痛快な方でした。それでいて面倒見のいい、偉ぶらない人でした。毎日のように通いました。NASAから送られてきたアポロ一四号の一六ミリ・ムービーフィルムなど、毎回新しいニュースが聞けました。そこでは、UFO画家の高橋稔さんや、東京からはるばる訪ねてこられる人々やいろいろな方にめぐり会うことができました。皆さんすてきな方でした。櫻沢如一先生の「永遠の子供」が一杯遊んでいるようでした。向井先生の二六才のときの著書「恋人を得る秘訣・易と自然医学」も読ませていただきました。これも久保田先生のユーコンのおかげです。有難うございます。こんな立派なユーコン発行を長年続けていらっしゃる久保田会長先生の信念の強さに感服いたしております。

先日のテレビで三木武夫未亡人が海部総理のことを「あの子はもっと人が悪くならなければ」と言っていました。UFOを信じることの出来る（本誌一〇七号「夢を信じたい」海部俊樹）海部総理は決して人が悪くはなれないと思います。

森脇十九男氏の「CIAのUFO公式文書集成I」三五〇〇円の中にも、CIAがアダムスキーをマークしていた数多くの記事が出ていることに驚いています。久保田会長先生訳のアダムスキー全集もすべて読ませていただきました。亡くなった私の母は金星に生まれ変わっていると直感できた私は、今では落ち着いて日々を送れることを感謝しています。そして、新しい生き甲斐を求めるエネルギーが湧いてくることを実感出来ます。紙面をお借りして、久保田会長先生はじめ日本GAP会員の方々に御礼申し上げ、皆様のご精進とご健康をお祈り申し上げます。

Uコン誌を待ちわびる

東京都　大野美智子

UFOにはこれまで何度もコンタクトしてきましたので、何で私がこう度々目撃するのか不思議でした。久保田先生がむかし「UFOと宇宙」誌を編集なさっていらっしゃってその愛読者だった頃、最高に目撃しました（大型母船を含めて数種類）。その目撃報告を書くのが楽しみでした。そのうち数回、取りあげて載せていただき、ありがとうございました。でも、あとで考えるとあれは飛行機ではなかったかというものもあり、大変恥じ入ったこともあります。申し訳ございませんでした。

私の今後の課題は、自分を根本的に変えるために努力してみようということです。すっかり滅入って身も心も婆さんくさくなって、ただ生きているだけの状態のとき、Uコン誌を今か今かと待っている自分に気付きました。私のようにUコン誌到着を今か今かと待ち、同誌によって力づけられる方々は大勢いらっしゃることでしょう。

ですから先生には私達GAP会員のためにも、地球の波動を良くするためにも、ぜひ元気で御活躍を。

第1回 南九州支部大会

南九州支部発足第1回支部大会を開催することになりました。久保田先生と遠藤氏の素晴らしいご指導のもとに大宇宙への視野を拡大し、心身共に浄化充電を図る絶好の大会です。両先生に接するまたとない機会ですし、東京本部月例会の雰囲気を九州鹿児島で実現させますので多数ご出席下さい。歴史に詳しい久保田先生と一献汲みかわしながら薩摩の生んだ大西郷の宇宙的思想について傾聴するのも楽しみです。観光では最高のご案内を致します。忘れ得ぬ2日間をおすごし下さい。

●日　時　4月29日（2連休初日。土曜日休日の人は3連休中日）
●会　場　「鹿児島市民文化ホール」☎0992-57-8111
※JR西鹿児島駅からタクシー10分。
●会　費　¥3000〈全員記念写真代(送料共)¥800は別納〉
●プログラム　1:00 支部代表挨拶 鶴田清則
(司会 曽我部勇人)　1:10 講演「宇宙哲学と奇跡発生法」
日本GAP会長・久保田八郎先生
2:30 テレパシー開発指導・遠藤昭則氏
3:00 全員記念撮影・休憩
3:30 全員自己紹介・質疑応答
5:00 閉会
●夕食会　大会終了後6:00→9:00頃まで開催(希望者のみ)。
会場：鹿児島サンロイヤルホテル
☎0992-53-2020
※大会会場から徒歩5分。
会費：¥5000
●宿　舎　鹿児島サンロイヤルホテルを斡旋。
鹿児島市与次郎1-8-10
シングル¥7210(税、サ込)
●観　光　NHK大河ドラマ「翔ぶが如く」で放映中の場面に出てくる多数の名所旧跡へご案内します。ひょっとすれば活火山の桜島が爆発する瞬間を目撃して地球の鼓動を感じるかも。
参加費¥2000(昼食代別)。
●申　込　大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキまたは電話で下記へ。〈4月14日必着〉
〒891-03 鹿児島県指宿(いぶすき)市新西方998
鶴 田 清 則　☎0993-25-4398

▼鹿児島市民文化ホール

第11回 仙台・山形合同支部大会

今年も第11回の仙台と山形両支部の合同支部大会を仙台で開催します。純粋にして美しく豊かな宇宙的人生を過ごすための秘法を久保田先生が伝授されます。別な太陽系から転生してきたといわれる先生と他の惑星からの使者・遠藤氏の深遠雄大な宇宙の法則を聴き、覚醒と飛躍のステップにしようではありませんか。人情に厚い東北人一同心からお迎え致しますので多数ご参加下さい。翌日は伊達侯62万石雄藩の名残りをとどめる名所旧跡めぐりを貸切りバスで実施します。

■日　時　5月4日（3連休の中日）／午後1:00→5:00
■会　場　「仙台市片平市民センター」3F、第1会議室
仙台市青葉区米ヶ袋1-1-35　☎022-227-5333
※仙台駅前から、お霊屋橋(おたまやばし)経由動物公園方面行きのバスに乗り約7分、東北大正面前で下車して真向かいの建物。駐車場あり(9台可)。
■会　費　¥2500〈全員記念写真代(送料共)¥800は別納〉
■プログラム　1:00 支部代表挨拶 笠原弘可・柴田光明
(司会 柴田文子)　1:00 講演「宇宙哲学と奇跡発生法」
日本GAP会長・久保田八郎先生
2:30 全員記念撮影・休憩
3:00 テレパシー開発指導・遠藤昭則氏
3:20 全員自己紹介・意見発表・質疑応答
5:00 閉会
■夕食会　大会終了後6:00→8:00まで開催。
会場：仙台第2ワシントンホテル 2F「オリーブの間」
仙台市青葉区大町2-3-1　☎022-222-2111
※仙台駅前青葉通りをまっすぐ下って徒歩15分。車で5分。大会会場から徒歩5分。
会費：¥6000
■宿　舎　第1ワシントンホテルを斡旋。
(住所・電話は第2ワシントンホテルと同じ)
シングル¥6000　ツイン¥12000
■観　光　5月5日9:30→16:00、観光バスによる仙台市内名所旧跡の周遊を予定しています。
会費¥2500程度。
■申　込　大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキまたは電話で下記へ。〈4月末日必着〉
〒983 仙台市宮城野区五輪1-16-14-306
笠 原 弘 可　☎022-295-0725

▼仙台市片平市民センター

第4回 長野支部大会

継続は力なりという法則のもとに昨年秋の第三回支部大会に続いて今年も第四回目の長野支部大会を開催します。支部会員一同打って一丸となり万全の態勢をしいて素晴らしい雰囲気作りをしますが、今回は趣向を凝らして松本郊外の名高い浅間温泉を会場にし、北アルプスの壮麗雄大な峰々を遠望しながら久保田先生と遠藤氏による宇宙的な人間成長のための深遠なセミナーを行ない、翌日の観光は東洋一の黒四ダムと清純な安曇野へご案内します。多数のご来場を心からお待ち致しております。

●日　時　6月3日（日）／午後1:00→5:00
●会　場　「みやま荘」会議室（有明）
松本市浅間温泉28番地　☎0263-46-1547
※JR松本駅下車正面右手イトーヨーカドーバスターミナルより浅間温泉行きに乗車し終点で下車徒歩3分。中央道長野線松本インターから20分。
●会　費　¥2000〈全員記念写真代(送料共)¥800は別納〉
●プログラム　1:00 支部代表挨拶 博田文喜
（司会 中村公一）　1:05 講演「宇宙的能力の開発法と絶対に安全に生きる方法」
日本GAP会長・久保田八郎先生
超能力開発指導　日本GAP東京本部役員・遠藤昭則氏
2:30 休憩・全員記念撮影
3:00 自己紹介・質疑応答
5:00 閉会
●夕食会　大会終了後6:00→8:00まで開催(希望者のみ)。
会場：大会と同会場　　会費：¥5000
●宿　舎　「みやま荘」を斡旋。松本市浅間温泉28番地
シングル¥3500　ツイン¥7500
相部屋¥3000～3600
●観　光　大会翌日は東洋一のアーチ式ダム黒四を見物後、新緑の安曇野を散策します。5時頃松本駅解散の予定。
会費¥2000
●申　込　大会、夕食会、宿舎、観光の申込はハガキまたは電話で下記へ。〈4月30日必着〉
（公的施設の為早めに確定する必要が有ります）
〒399-07 塩尻市広丘吉田948-4
博田文喜　☎0263-58-8510

〔備考〕大会プログラム及び市内観光は案のため変更の場合が有ります。参加申し込み者には交通案内パンフレットを急送します。6月の月例会は通常どうり開催。

▼みやま荘

英文版「UFO contactee」No.6

B5／12頁／コート紙使用／¥500（送料¥175／3冊まで¥250）

世界のUFO研究界で注目の的になっている日本GAP発行英文版ユーコンは、Space Brothers派のUFO研究団体や欧米の個人研究家の間でも絶賛。No.6では春川正一氏の宇宙的体験談の連載記事第4回分、アダムスキーの質疑応答、アメリカGAP会長ダニエル・ロス氏のニューズレターからの抜粋、その他有益な記事写真を満載。重要な保存資料となるものです。久保田八郎・坂本貢一執筆の記事を米人学者が校閲。流麗な英文は英語学習用にも好適です。注文は振替か切手(低額)でどうぞ。　＝日本GAP＝

編集後記

★アダムスキーがベルギーで行なった対談記事は今回も転生の法則を説いています。この法則はよほど重要なもので、熟読玩味する必要がありそうです。この連載は完結しましたが、次号でア氏の新記事を掲載します。
★テレビ局の「UFO呼び出し番組」に参加した堀江健一氏の報告とビデオカメラによる記録「UFO、朝霧高原に出現！」は貴重な記事です。日本GAPも公開募集により六月九日に第一回UFO観測会を開催しますから、一三頁の予告をご覧の上、多数ご参加下さい。
★アメリカGAPが発足しました。ダニエル・ロス氏の米国における大活躍が期待されます。次号では同氏が昨年デンマークの講演会に出席したときの様子その他を伝えます。
★「新アダムスキー全集」が刊行されることになりました。世界に例のないこの全集は内容装丁とも一新して四月より第一巻から順次発刊されます。軽い並装ですから通勤・通学時の携帯に便利です。本号五〇頁の広告をご覧の上ぜひお求め下さい。出版社名と所在地は同広告の最下端にすごく小さく入れてありますので、お見落としなきように。
★UFO研究とは実は「人間研究」だというのが編者の持論です。UFOよりも人間なるものが最大の謎で、これが面白いのです。
★UFO目撃報告、UFO写真、超能力開発体験、宇宙哲学研究実践、宇宙科学等の原稿を募集しています。原稿書きの苦手な方は面談して下さっても結構です（心霊は不可）。
★本誌は多数のボランティアにより全国の主要書店に卸されています。この協力チームに参加希望の方はハガキでお申し込み下さい。説明書をお送りします。（K）

日本GAP機関誌・季刊　夏季号
UFO contactee　109号
編集発行人　久保田八郎
発行所　日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
☎03-651-0958
振替 東京4-35912
一九九〇年四月二五日発行
定価九二七円(本体九〇〇円)〒送料210円
※本誌掲載の全記事・写真共、他の印刷物への無断転載を禁じます。

本誌バックナンバー掲載記事目録

※印は絶版。在庫なし。お申し込みの際は郵便振替にて日本GAP宛ご送金下さい。バックナンバーに限り送料は不要です。

No.108　平成2年1月25日発行　¥900

地球へ救援に来るUFOと転生の法則——G.アダムスキー
奇跡をもたらす「生命の科学」——久保田八郎
超能力開発の新しい視点——秋山眞人
潜在意識としてのDNA——N.H.M.D.
私は巨大な母船を見た——小瀬村芙美子
私についてきた光るUFO——郡司典子
GAP海外旅行で目撃した数々のUFO——中根　豊
ロイよ、来て助けておくれ/——久保田八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠⑩——ダニエル・ロス

No.107　平成元年10月25日発行　¥900

テレパシー開発法とUFOの実態——G.アダムスキー
マチュピチュとナスカの謎——久保田八郎
私はベルーでUFOを見た——富岡設子
アダムスキーに会った唯一の日本人(完)——向井　裕
超能力開発の基礎レッスン——斉藤庄一
宇宙哲学を生かした超能力開発法——遠藤昭則

No.106　平成元年7月25日発行　¥900

金星から知的メッセージを受けたマリナー2号——G.アダムスキー
アダムスキーに会った唯一の日本人②——向井　裕
宇宙哲学で奇跡を起こす方法——久保田八郎
ヒーリングとテレパシー——遠藤昭則
テレパシー現象の医学的考察——N.H.M.D.
UFO-宇宙からの完全な証拠⑨——ダニエル・ロス

No.105　平成元年4月25日発行　¥900

デザートセンター円盤着陸事件—久保田八郎/篠芳史/坂本貢一・茂子
アダムスキーに会った唯一の日本人①——向井　裕
過去生透視法とその実例②——遠藤昭則
輝く星々の彼方へ——斉藤庄一
長野県に巨大UFO出現!——博田文喜
UFO-宇宙からの完全な証拠⑧——ダニエル・ロス

No.104　平成元年1月25日発行　¥900

UFO問題と世界の運命——久保田八郎
アダムスキーの宇宙的カルマと異星人の援助——アリス・ポマロイ
デザートセンターで円盤着陸痕跡発見/—安藤澄雄/久保田八郎
過去世透視法とその実例——遠藤昭則
UFO-宇宙からの完全な証拠⑦——ダニエル・ロス
GAP活動の原理——ダニエル・ロス

No.103　昭和63年10月25日発行　¥900

アダムスキーの体験は真実だった/——アリス・ポマロイ
我らの惑星に愛と希望を——久保田八郎
カイロ上空に輝くUFOが出現——伊東芳和
私のUFOコンタクトと宇宙的目覚め——富岡設子
UFO-宇宙からの完全な証拠⑥——ダニエル・ロス

No.102　昭和63年7月25日発行　¥900

UFO目撃で驚嘆、大変化した私——後藤泰二
仙台市上空にUFO長時間出現——遠藤昭則
富士山周辺でテレパシーに応えるUFO群——長沼宏志
ミラクルワードとイメージ法で奇跡を起こす——田中　正
良い想念であなたの環境は良くなる
UFO-宇宙からの完全な証拠⑤——ダニエル・ロス

No.101　昭和63年4月25日発行　¥900

宇宙的家族のUFO目撃の日々——坂本茂子
精神的指導者に対する警告——G.アダムスキー
円盤の窓から手を振る"異星人"——齊藤庄一
長野県に出現したUFOの大群——博田文喜
頻繁なUFO目撃と超能力体験——佐々木八郎
UFO-宇宙からの完全な証拠④——ダニエル・ロス

No.100　昭和63年1月25日発行　¥900

UFO問題とアダムスキー——久保田八郎
富士山二合目から目撃したUFO——遠藤昭則
私はこうして超能力を開発した——坂本正廣
アメリカの不思議な土地——水野和彦
UFO-宇宙からの完全な証拠③——ダニエル・ロス

No.99　昭和62年10月25日発行　¥700

UFO-宇宙からの完全な証拠②——ダニエル・ロス
山中湖畔で空中を飛んだ自動車/——清水　南
富士山にUFOが大挙出現——清水敏恵
〈写真〉大分市上空のUFO
アダムスキーの大地とマヤの国へ——久保田八郎

No.98　昭和62年7月20日発行　¥700

木星の衛星イオに古代都市跡を発見/
UFO-宇宙からの完全な証拠①——ダニエル・ロス
静岡市上空にUFO頻繁に出現——遠藤昭則
太陽系惑星にまだ仲間がいる?
連夜のテレパシー送信に応じて出現した円盤——片岡　豊
万物の実体と想念の重要性——知念清邦
私は別な惑星へ行ってきた/(最終回)——春川正一

※No.97　昭和62年4月20日発行　¥700

驚異の『生命の科学』と円盤大接近——伊藤達夫
八王子市でUFOを撮影——降簱和彦
別な惑星の偉大な人類と文明——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた/④——春川正一

※No.96　昭和62年1月20日発行　¥700

私のオーラ透視とテレパシー現象——清水　南
京都市上空にUFO5回出現——久保田八郎
想念放射、透視、UFO目撃——遠藤昭則
UFOと心霊は無関係——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた/③——春川正一

※No.95　昭和61年10月20日発行　¥700

茨城県千代田村のUFO——日本GAP茨城支部
アダムスキー問題に対する考察——内田格男
私のUFO目撃と不思議な体験——中嶋順子
ジャンボジェットに並行して飛んだ円盤——久保田八郎
私の別惑星訪問体験とアダムスキーの真実性——春川正一

※No.94　昭和61年7月20日発行　¥700

テレパシーで飛来した真っ黒い円盤——堀江健一
八丈富士山麓でUFOを撮影——谷口美雄
地球を救う愛の想念放射運動——山崎清美
母船の周囲には人工大気層がある——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた/②——春川正一

※No.93　昭和61年4月20日発行　¥700

月面にいた2機のUFO/
超低空に出現した大型円盤と黒い人影/——笠原弘可
私も光体を見た——伊藤達夫
多くの館——G.アダムスキー
質疑応答——G.アダムスキー
私は別な惑星へ行ってきた/①——春川正一

※No.92　昭和61年1月20日発行　¥700

偉大な惑星から来た兄弟たち——野口敏治
サン・ピエトロ大寺院の異星人——久保田八郎
米トップ科学者、UFO墜落の事実を認める—ゴードン・クレイトン
質疑応答——G.アダムスキー
地球の哲学と宇宙哲学の相違(完)——松原眞弓

河出書房新社より
待望発売中

自然界からのテレポート読本

花紋の広がり

えっ！草花や物とお話ができるって？

—21世紀文明を先取りする、新脳人間育成への宇宙教育書—

著者　中島 真由美

ひそやかに、開け放された秘密の扉、もの言わぬ自然界の意志を読み取る感性のノウハウをあなたの手に！

昭和の動乱期の中で、愛をテーマに人生を育んだ一人の女性が、ある日突然、潜在意識の扉が開き、花との対話が生まれました。

それ以来、美しい日本の四季を巡り、雄大なる自然界を感受しながら愛の交流を広げていきます。

そこには、いまだかつて明かされたことのない地球の歴史の秘話が、次々と説き明かされていきました。中でも梅と桜に秘めた日本の名花の謎は、過去地球人類が良いこと求めても到来とし得なかった本質的な男女の個性が明記されています。

また、花の謎を証かすルートから端を発し、今や多くの諸問題をかかえて混迷する現代社会に対し、自然が語る人類警鐘への声は、痛烈な祈りとなってなげかけてきます。

大自然にこそ、人間の真実のドラマが隠されていることを明るみにし、詩情豊かに書き上げた感動の書です。

人間の最大の教師は、波動で呼びかけてくる物や草花の中に大宇宙からの意志が託されていた！

今まで、ほとんどの人々は、心は人間にのみあるものとして捕えてきました。しかし、精神とは、本当に人間だけにしか存在しないものなのでしょうか。

この本は、著者が幼いときから特異な人生の中で、人間の心という大変不可視な世界を徹底追求していく中で、ある日突然、人間以外の心と意識が通じ合うようになっていくプロセスの回路を明かした体験記です。

それは、自然界で日々活躍する、光、風、雨、雪、そして大地に息づく山川草木を始めとする動植物、加工品である物に至るまで、人間を取り巻く一切の環境が、人間と同じく波動が流動し、そこに意志を放って存在していることを綴っていきます。

それは特に、今後、二十一世紀精神文明を担って巣立ち行く子供たちにとって、現代社会における退廃する教育の指針を提示していくことになるでしょう。

潜在能力を引き出す感性のトレーニング

著者が体験の中で得た潜在能力とは、また幼い頃、思考回路の中で知的な回路の未発達な状態の時、ごく自然に環境の中から培われたものでした。

よく、子供たちに物を大切にする心の尊さを説きます。物質文明の最盛期に生きる現代っ子にとって恵まれ過ぎているだけに、物に喰いものにされかねない社会情勢と言えましょう。

それ故に今後、新文明を築き上げていく上において、人が血価する物の価値観とは、一生を左右するほどの重要な問題提起となり、ますます地球的総人類が抱える重要的な課題となっていくでしょう。

そこで、人類がこぞって、この本に描かれてある、自然界の心との接点を結ぶ意識の回路を復活した暁には、人と物とのプラスエネルギーの相乗効果が倍増し、想像を絶する高波動の社会となり、精神・物質両面の文明が一体となるユートピアの社会が到来するでありましょう。

宇宙（そら）

私の中に空がある
どこからともなく湧き出ずる力
いかに　遙かなるに
問いかけようとも
隅だりのない永遠の国から
答えが返って来る
空は生き物
雲の行方を形づくり
愛の表現一杯に胸うかけてくる
それは人に生きることの喜びを与え
悲しみ　苦しみを一掃してくれる
偉大な力
高く澄み行く空の向こうにある
私のエデンの園
人はそこへ向かってさえいれば
大界の果てまでも
幾山川も隔たりがあろうとも
人に与える命の水は
あふれんばかりに注ぎ込まれるもの
人は皆
宇宙に生きるために生まれ出たもの
宇宙の偉大さを知った者こそ
人生の勝者
賛よ
あなたは大界の宇宙に住み
いかほどの万感を込めて
大合唱を奏でる力があるのか
賛よ
私はあなたの幾変化する
自由な意志を
我が手に収めるその道を教えたまえ
賛よ
私にむげに贈れる遊び心を
教えたまえ
いつの日か
この肉体が朽ち果てたその時には
私もあなたとともに
崇高なる宇宙の果て
命に燃えて喜びの歌を謳歌する
その世界が訪れるのか
いつの日か
手を広げて宇宙のもとへ
抱かれる尊き巣立の日まで
この地上の一点から
あなたの力をものとして　怠りなく
準備していこう
その大界へ　美気なる
その思いのもとに
終わりのない今日一日を
積み重ね行かん

（花紋の広がりより）

しかし、これらの能力とは、何も特別に著者自身にのみ与えられたものではないことを強く提唱します。

それは、普段誰もが何げなく生活している中で、物事を感じ取っていく自分の心のチェックから始めたならば、思いがけぬ環境の変化に遭遇し、そこから今まで意識の扉にかかった〝気づき〟が遠大に広がっていく世界を体感されることでしょう。

それには、まず五官の中で感じる表面意識（物質的な見方）と、他には表れない潜在意識（心・想いの交流を深める見方）の思考回路の相違を日常の中で徹底追求します。

人間は、物質界で生活している関係上、五官から入るエネルギーが強く支配するために、つい愛の心（潜在意識）の働きが鈍くなりがちな環境があり、その辺から人間にとって一番大切な感性・感覚面（美意識）が犯されていく傾向が否めません。

しかし、今や二十一世紀新文明を迎えるに当り、人類総勢をもって意識の思考パターンを改革していかなければならない時代の要請が急務と言えしょう。

著者の見識の中で描かれた自然界からのテレパシーを是非御精読ください。

河出書房新社発刊
「花紋の広がり」
中島 真由美 著
定価2000円
（本体価格1942円）
お近くの書店にてお申込みください
尚、品切れの節は
〒350 埼玉県川越市南大塚1265-69
株式会社コスモス
お申込みください
電話0492-42-7306
はがきか電話にて受付けています。

平成2年度

日本GAP全国月例研究会案内

支部名	日　　時	会　　場	会費	プログラム・テキスト
東京本部	毎月第2土曜日　午後1:30→6:00 ※8月のみは第1土曜日(4日)に変更。会場も皇居北の丸公園の「科学技術館」第1会議室(6F)に臨時変更。	上野公園内「東京文化会館」4F会議室。 ☎03-828-2111。JR上野駅「公園口」下車。改札口の真向かい。 連絡先＝日本GAP本部　☎03-651-0958	会場費 ¥500 セミナー 受講料 ¥1000・ 計¥1500	1:30→2:10 会員による体験講演。 2:15→3:30 久保田会長による講義。 テキスト＝「生命の科学」 テレパシー開発法、テレパシー練習、近況報告、自己紹介、質疑応答。
大阪支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	大阪府吹田市出口町4丁目「吹田市民会館」 ☎388-7351。JRまたは阪急電車吹田駅下車。 連絡先＝平塚和義　☎06-436-3478	¥300	東京月例会における久保田会長の講義録音テープを公開。 テキストその他＝東京本部に同じ。
新潟支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00 ※5月より日時と会場を変更(上記・右記)。	新潟市弁天3丁目「新潟市青年の家」 ☎025-244-6766。JR新潟駅より徒歩3分。 連絡先＝星 富治夫　☎02579-2-5562	¥500	同　上
名古屋支部	毎月第2日曜日　午後1:00→4:30	名古屋市中区金山1丁目5番1号「名古屋市民会館」特別会議室。☎052-331-2141代。 JR東海・名鉄・地下鉄の金山橋より徒歩5分。 連絡先＝林　国宣　☎0586-45-6468	¥300	同　上
仙台支部	毎月第4日曜日　午後1:10→4:20	仙台市青葉区1番町4丁目「141(イチヨンイチ)ビル」内5F「エル・パーク仙台セミナー室」☎022-268-8300。仙台駅よりバスで県庁市役所前下車、三越デパート隣。 連絡先＝笠原弘可　☎022-295-0725	¥300	同　上
山形支部	毎月第1日曜日　午後1:00→5:00 ※5月は大会のため中止。	山形県天童市老野森1丁目1-1「天童市中央公民館」 ☎0263-54-1511。天童駅から徒歩10分、タクシー4分。天童市役所の裏側。 連絡先＝柴田光明　☎0233-25-3261	¥300	同　上
札幌支部	毎月第1日曜日　午後1:00→4:30	中央区北一条西13丁目「札幌市教育文化会館」会議室。 ☎011-271-5821。 連絡先＝高野省志　☎011-571-9874	¥500	同　上
旭川支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	旭川市6条通4丁目「勤労者福祉会館」2F小会議室 ☎0166-26-1304。 連絡先＝川上三秀　☎0166-61-0044	¥500	同　上
青森支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	青森市松原「青森市民文化センター」教養室。 ☎0177-34-0163。 連絡先＝田村嘉彦　☎0177-38-0416	¥500	同　上
沖縄支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00 ※5月より会場を変更(右記)。	具市川市栄巣野比1213-1「具志川市野外レクセンター」会議室。 ☎09897-2-7722 連絡先＝比嘉政広　☎09893-3-2889	¥500	同　上
秋田支部	毎月第2日曜日　午後1:00→5:00	秋田市八橋運動公園1-2「中央公民館」趣味の間。 ☎0188-24-5377。 連絡先＝伊藤正治　☎0188-62-2831	¥200	同　上
横浜支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	横浜市中区万代町2-4-7「横浜市技能文化会館」7F、703号室。 ☎045-681-6511。JR関内駅、地下鉄・伊勢崎長者町駅より徒歩3分。 連絡先＝清水　正　☎048-866-7048	¥500	同　上
茨城支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	水戸市梅香1-2「三の丸公民館」小集会室。 ☎0292-24-6600。水戸駅北口より徒歩10分。 連絡先＝清水勝一　☎0292-73-1903	¥300	同　上
長野支部	毎月第4日曜日　午後1:00→5:00	塩尻市大門7番町「塩尻総合文化センター」第1会議室。 ☎0263-54-1253。 連絡先＝博田文喜　☎0263-58-8510	¥500	同　上
紀南会	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 ※代表が長期療養のため月例会は当分休会。	和歌山県新宮市新宮6682-1「新宮市福祉センター」1F相談室。 ☎0735-21-2760。JR西日本新宮駅下車、徒歩5分。 連絡先＝松口幸之助　☎0735-34-0605(呼・田中)	¥300	同　上
栃木支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿沼市市役所裏「御殿山会館」1F小会議室。 ☎0289-64-4334。JR鹿沼駅から西へ1.5km。東武新鹿沼駅から北へ1.5km、市内行きのバスに乗り天神町下車。徒歩5分。 連絡先＝渡辺克明　☎0289-62-3319	¥500	同　上
南九州支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00	鹿児島市与次郎2丁目3-1「鹿児島市民文化ホール」 ☎0992-57-8111。 連絡先＝鶴田清則　☎0993-25-4398	¥500	同　上
高松支部	毎月第3日曜日　午後1:00→5:00 ※4月より日時を変更(上記)。	高松市玉藻町9番10号「香川県民ホール」5F第1会議室。 ☎0878-23-3131。JR高松駅より徒歩7分。 連絡先＝関　高明　☎0878-88-1334	¥400	同　上

絶賛発売中

新アダムスキー全集

全8巻全面改訂・新装普及版刊行開始!

久保田八郎訳・各四六判

超絶した大文明を持つ、太陽系の他の惑星群の人々とコンタクトしたアダムスキーを米政府機関は密かにマークしていた! UFOや惑星群の驚異的実態と深遠な宇宙思想を伝える本全集は、地球人類に宇宙的覚醒の必要性と真の生き方を示す永遠の古典。UFOと宇宙哲学の研究者にとって必読の名著。旧全集を全面改訂した最終決定版。

アダムスキー/

❶第2惑星からの地球訪問者 338頁・定価1980円〈第1回配本〉

UFO研究家として世界的に著名なジョージ・アダムスキーの、1952年11月20日、米カリフォルニア州の砂漠に着陸した円盤から出てきた金星人との会見から始まる驚異的なコンタクト実録。著者みずから円盤や母船に乗り組み、他の惑星の超絶的大文明の実態を明かにする、本全集の中心の書。写真多数収録。

アダムスキー/

❷UFOの謎 262頁・予価1600円

UFOの推進原理をはじめ、聖書とUFOとの関連などを詳述して様々なミステリーを解明した重要な文献。第2部はアダムスキーの世界講演旅行記で、各国GAP網の活動状況が克明に描写されていて1960年代のUFO研究界の実情と一般人の宇宙観がよく理解できる。第1巻の続編。

アダムスキー/

❸金星・土星探訪記 350頁・予価1980円

アダムスキーが大母船に乗せられて、想像を絶する進歩をとげた金星と木星を訪れた体験記。特に金星人の少女として生まれかわった亡き妻メリーとの劇的な対面が圧巻。第2部には1958年以来、日本におけるアダムスキーの代理人として啓蒙活動に専念している久保田八郎宛の多数の書簡を収録。

アダムスキー/

❹宇宙哲学 148頁・予価1100円

地球人が真に宇宙的な成長をとげるための基本的思想として、マインド(心)と肉体内部に宿る宇宙の意識との一体化を説いた書。既成のあらゆる宗教や哲学では理解し得なかった人間の意識と万物との関係を説いて21世紀の思想を先取りした。第5巻、6巻と合わせてアダムスキー哲学の三部作をなす。

アダムスキー/

❺超能力開発法(テレパシー、遠隔透視その他) 190頁・予価1500円〈第2回配本〉

世間に氾濫する通俗的な超能力開発法とは根本から異なる宇宙的能力の発現法を説いたもの。目、耳、鼻、口、の四官をコントロールして、肉体内部の宇宙の意識から来るメッセージを感受し、真の意味でのテレパシー、遠隔透視その他の超能力を身につける方法を具体的に詳述。類書皆無の重要文献。

アダムスキー/

❻生命の科学 205頁・予価1600円〈第3回配本〉

アダムスキーが他界する前年に出した12分冊の講座を一冊にまとめたもの。アダムスキー宇宙哲学の総括的な一大金字塔。特に人体細胞の実態と真実のテレパシー、及び霊界通信の誤り等を科学的に解説した超能力開発指導書。心霊現象への接近を警告する画期的な理論を明快に説く、第5巻の続編として必読のテキスト。

アダムスキー/

❼UFO・人間・宇宙 370頁・予価1980円

アダムスキー支持活動団体として世界のトップクラスをゆく日本GAPの機関紙に掲載された、アダムスキーのUFOと宇宙哲学関係の論文、講演録等を編集。他界する直前の最後の講演が圧巻。第2部には訳者・久保田八郎が再三渡米してアダムスキーの今は亡き高弟たちと接したインタビュー記事を収録。

アダムスキー/

❽UFO問題に答える 216頁・予価1800円

1958年にアダムスキーは、世界中から来る質問の洪水を分類して質疑応答集を出した。全部で100問のUFO関係の質問に懇切な回答を与えている。現在の混迷した世界のUFO研究界に的確な示唆と回答を示すものとして、内容は今も驚くほど新鮮で有用である。UFO研究者の素晴らしいガイドブック。

【ご注文のしおり】

全国の書店で発売致しております。店頭品切れの際は、「巻数・書名・定価・出版社名」をそえて書店にお申込みください。お買い求めにご不便な方、お急ぎの方は、直接出版社に「巻数・書名・定価・冊数・住所・氏名・電話」を明記の上、下記宛にご注文ください。

●ご送金は、便利な郵便振替「口座番号 東京8－66324」か現金書留または小額の切手(100円以下)でも結構です。その際、定価に送料310円を加算した金額をお送りください。

●〒104 東京都中央区京橋3-7-13 CAP中央アート出版社 TEL.03-561-7017(代表) FAX.03-561-7018(営業)

Ⓐ

あなたも超能力者になれる！

テレパシー能力開発用ESPカード

テレパシーと透視力開発用のESPカードはアメリカのデューク大学で科学的に開発されたゼナーカードです。5種類の図形カードが各5枚ずつ、計25枚入っています。これを応用して多種類の練習により人間に内在する超能力の開発に絶大な役割を果たします。堅牢な厚紙製。重量40gの軽量、ポケットに入れて常時携行して下さい。

25枚1セットケース入り　使用説明書付き
¥900　送料¥120(2～5個¥175)

Ⓑ

①オーソン肖像写真　②シンボルマーク

①1952年11月20日、カリフォルニアの砂漠でアダムスキーが劇的な最初のコンタクトをした金星人は「宇宙からの訪問者」第二部でオーソンという名で出てくるが、これをア氏の記録やアリス・ウエルズのスケッチにもとづいて女流画家ゲイ・ベッツが描いた名画の写真。(キャビネ判・カラー写真) 上半身写真もあり。定価¥600

②この金星のシンボル・マークの中央にある眼は“すべてを見透す眼”で、宇宙の意識をあらわし、周囲の四層の星は人間のマインド(心)の発達状態をあらわしている。(サービス判・カラー写真)

上記2点共、重要な資料となるものです。他所では入手できません。

①¥600　送料¥120
②¥300　送料¥62
} 一括注文の場合送料¥120

Ⓒ

●●●●●●●●● 大いなる信念と勇気を与えるGAP能力開発テープ ●●●●●●●●●

毎月行なわれている日本GAP東京本部月例研究会のなかから、日本GAP会長・久保田八郎先生が宇宙的フィーリングをもってアダムスキーの名著を解説した講義などが収められたテープ。ドライブ中や、通勤・通学電車内で、あるいは就寝前に聞いたりすれば絶大な信念と勇気がわき起こります。

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ①

内容＝久保田会長による『生命の科学』(G.アダムスキー著)解説講義／近況報告／質疑応答(一部)

テープ1本(120分)　¥1300　送料¥200

※このテープは日本GAPでは取り扱いません

■日本GAP東京本部月例研究会録音テープ②

内容＝テープ①の内容＋遠藤昭則講師によるテレパシー実践講義・テレパシー練習(テキスト付)／質疑応答(全部)

※お申し込みの際はテープ①または②の別をご明記下さい。

テープ2本(90分×2本)　¥1900　送料¥250

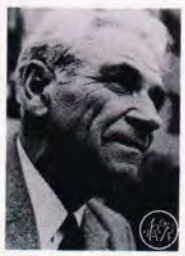
◆申込先◆　〒133 東京都江戸川区本一色1-24-3-202 松村芳之 ☎03-653-9387 振替・東京0-162644

会員募集

日本GAPはUFO研究界の大先駆者・久保田八郎が故アダムスキー氏と提携して1961年に創立したわが国最大のUFOと宇宙哲学の研究大集団！多数の会員と共に宇宙的人間を目指そう！入会案内書をハガキで日本GAPへ申し込もう！

——日本GAP——

Ⓓ



—あなたに良きカルマをもたらす—
日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
TEL.(03)651-0958

GAP特製 テレホンカード

第3弾テレホンカードは大好評裡に品切れ。ここにデザイン一新の上GAPが放つ第4弾！　アダムスキーの肖像写真を入れた優美なデザインによる宇宙的波動を放つこのカードを持つだけでも、高次元なフィーリングが起こって良きカルマをつくります。

1枚¥1500 送料10枚まで¥62

Ⓔ

会員バッジ

実物大

ジョージ・アダムスキーが金星人から与えられた唯一のバッジと形、色共全く同様に複製した径18mmの丸い優美なバッジです。薄青色地に金色のシンボルマークが浮彫りされており、縁も金色です。表面には透明樹脂がかけてありますからキズがつかず、光を反射してキラキラ輝きます。男性用は裏側が心棒ネジどめ式、女性用は裏側が安全ピン式です。ぜひお求め下さい。ご注文のさいは男性用・女性用の別を明記して下さい。

(無断複製を禁じます)

1個¥2000　送料4個まで¥120

Ⓕ

——幸せを呼ぶ——

GAPシール

シールを製作しました。WITH COSMIC CONSCIOUSNESS(宇宙の意識と共に)の文字がシンボルマークを取り囲む優雅なデザイン。径6cm、5cm、4cm、3cm、2cmの5枚1セット。青と赤の2種類あります。自動車の窓、運転台、カバン、書籍・ノートの表紙、その他の持ち物に貼っておけばいつも宇宙的フィーリングに満ちて気分さわやか。良き想念が良い物事を招きよせます。表面光沢。防水加工。裏面のり付。ご注文の際は青、赤の区別をお忘れなく。

1セット¥900　送料5セットまで¥62

Ⓒを除く商品の申込先・申込方法

住所・氏名・電話番号・商品名・種類・色・個数等を明記の上右記へ郵便振替または現金書留でお申し込み下さい。

〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511　日本GAP
振替／東京4-35912　☎03-651-0958

※商品価格に消費税は含まれておりません。

サブリミナルテープ

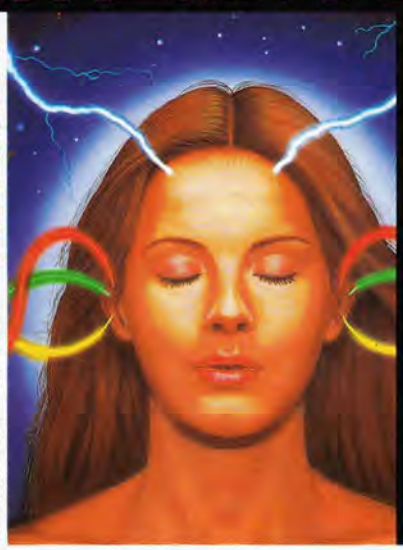
潜在脳刺激法であなたの人生が変わる！

今なら各シリーズを無料試聴できます。

マインドパワー・潜在能力を開発

「マインドパワーの開発」「充実した人生」——これらを簡単に現実のものにしてくれる驚くべきテープがアメリカからやってきました。

アメリカの著名な心理学者S・ハルパーン博士の開発した"サブリミナル・プログラム"がそれ。なにせ美しいBGM音楽を聴き流しているだけで確実な効果があるというのですから、これを利用しない手はありません。



あのハルパーン博士があなたのために制作！

「マインドパワーの開発」「充実した人生」……これらを現実の物にしたい」——これは、どんな人でも多かれ少なかれ持っている共通の願望でしょう。ところが、この夢をいとも簡単に実現してしまうテープがアメリカからやってきたのです。それがアメリカでは知らない人はいないほど有名な心理学博士スティーヴン・ハルパーン氏の開発したサブリミナルテープです。博士の手になるサブリミナルテープは、米国で昨年一年間だけで五十数万本という驚異的ベストセラーを続け、その確かな効果が実証されています。

BGMとして聴くだけで効果が!!

このサブリミナルテープ、耳に聴こえるのは、うっとりするような美しいメロディーの心がゆったりとくつろいでくる静かな音楽だけです。

（日本の曲でいえば"喜多郎"の音楽にイメージが似ている。この音楽だけでもストレスを解消し、気分をさわやかにするすぐれた効果がある）

しかし、実はこの音楽に、ハルパーン博士が開発した他に真似のできない高度な音響テクノロジーを駆使して、ある心理学的な言葉のメッセージが耳に聴こえない周波数に変換されて入っているのです。（潜在脳に独特の刺激を与える音楽の波長が、耳に聴こえないメッセージの波長を潜在脳へ運び、植えつけてしまう）

この音楽に交って入っている"耳に聴こえない心理学的メッセージ"が、ただテープの音楽を聴いているだけで"潜在能力が開発される""充実した人生へ歩み始める"という現象を引き起こす秘密なのです。

"本を読んだり趣味に熱中している時に、BGM音楽として聴き流しているだけで"夢がかなってしまう"——このアメリカの苦労いらずの科学的プログラムが、ついに日本の皆様にもご利用いただけるようになったのです。

商品お申込み 案内書請求 の方に試聴用テープを無料進呈！

1 マインドパワー・潜在能力を開発 マインドパワーシリーズ〈MDシリーズ〉

あなたの心と体をゆったりともみほぐし、不安・緊張や心と体の疲れを取り除いてくれる宇宙的感覚のα波BGM音楽に、あなたの意識を拡大し、精神力（マインドパワー）や秘められた潜在的能力を自然に開発するサブリミナル・メッセージを同調させたのが、このMDシリーズです。

会社から帰ってその日の疲れを癒したい時、日常生活のわずらわしさから解放されたい時、静かなBGM音楽を流して気分転換をしたい時——そんな時にMDシリーズをBGM音楽としてお楽しみ下さい。各種の瞑想法で得られる「意識の拡大」「α波レベルの脳波の強化」「心の安らぎ」「秘められた潜在能力の開発」「精神力の強化」「人間性・人格の向上」等の効果が得られ、より大きな人間に成長してゆく自分と今まで以上に拡大していく人生を手に入れることができます。

MDシリーズのお届けするテーマの内容は、●完全なる安らぎ●意識の拡大●大いなる自分との出逢い●無限大の心●宇宙意識の目覚め●人間性・人格の向上●愛と慈悲のエネルギー●精神力の強化●偉大な潜在能力の開発●第六感の開発●自由自在な思考力●無限の知恵の獲得（このシリーズのサブリミナルテープのベース音楽には、ハルパーン博士の友人である"ヤソス"の宇宙音楽をはじめ素晴しい瞑想音楽が使われています。）

2 現状を打破し充実した人生を 充実人生シリーズ〈HLシリーズ〉

「今のままではいけない！」「もっと充実した人生を送るために何かをしなければ……」——そう心の中では感じているんだけど、現状を打破する第一歩を踏み出すキッカケをつかめずに毎日を惰性に引きずられて何となく過ごしてしまっている、という方にお勧めするのがHLシリーズです。

現状から抜け出し新しい人生に向けて第一歩を踏み出す動機づけと、毎日がワクワクするような胸のときめきを覚える充実した人生を送るために必要な能力や行動力を自然に身につけられるよう、魂にひびきわたる美しい音楽にまぎれたサブリミナル・メッセージが、あなたの潜在意識にやさしく語りかけます。

就寝前や、ちょっとBGM音楽でも流そうかナ」と思った時にこのHLシリーズを軽いBGM音楽としてお楽しみ下さい。

HLシリーズのお届けするテーマの内容は、●現状を打破する●目標・計画づくりの習慣●惰性からの脱却●最高の人生を考える●自分の可能性を試す●すぐ実行する習慣●必要な読書・勉強の実行●毎日ベストを尽くす●プロフェッショナルをめざす●向上意欲の強化●充実した人生を生きる●大いなる未来へはばたく（このシリーズにはヒプノシス・プログラムは付いていません。各テープともA面B面を通してオートリバースでお使いになれます。）

※このHLシリーズには、充実人生計画シートが付いています。

●スティーヴン・ハルパーン博士のプロフィール●

音楽・音・言葉の潜在意識への作用の研究で世界的にその名を知られる心理学博士。学者であると同時に、瞑想音楽の神様としても米国はもちろんヨーロッパ各国にその名を知られ、世界的なファンを数多く持っている。博士の音楽は鑑賞用の音楽としても高く評価されているが、博士の長年の研究のエッセンスが凝縮された"音楽の薬"としての効能も医学・心理・教育関係者の間で高い評価を受け、いろいろな分野で博士の音楽を取り入れている。"カイザー・パーマネント病院をはじめ全米の一流の医療機関では、博士の音楽を薬品の代わりとして患者に与え著しい効果を上げている。

今、お申込みの方・案内書請求の方に先着500名 サブリミナルテープ1本を無料プレゼント中!!

今、お申込みの方・案内書請求の方先着500名に、ハルパーン博士制作の心身をくつろがせ、大脳の活性化にもとてもよい、アメリカで人気のサブリミナルテープをプレゼントしています。

今なら無料試聴でき特別価格で購入できます

●MDシリーズ　●HLシリーズは一年間の会員制の頒布会方式でお届けします。お申込後、毎月各テーマ別のテープを一巻ずつ（テーマによっては二巻）お届けしていきます。お支払いは毎月テープ到着後に4,800円（送料3,000円）。第一回目およびそれ以降もテープ到着後5日間の無料試聴期間を設けていますので、気に入らない場合は自由に返品できます。又、途中退会も自由です。

■今回ご紹介したシリーズ以外にも、"高速学習セット"「魅力的性格シリーズ」等のシリーズがございます。詳しい案内書をご希望の方は、お電話あるいはハガキで"案内書希望"とお申込み下さい。

（ご注意）●このサブリミナルテープは通常は一巻7,800円で販売されており、今回の価格は頒布会員にのみ有効な特別価格です。●サブリミナルテープは聴いた人に確実に影響を与える強力なもので、内容を告げずに第三者に無制限に聞かせるのは絶対にお避け下さい。

（お申込みは、官製ハガキ・電話で今すぐ!!）

住所・氏名・年令・職業・電話番号を明記の上、「□□」シリーズ試聴希望」又は「案内書希望」と左記までお申込み下さい。

〒107 東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社 UFC(4)係
電話 東京 03(479)5864
（受付AM8～PM24 日・祭日も受付中）

UFO contactee 109号
一九九〇年四月二五日発行
発行所 日本GAP
〒133 東京都江戸川区本一色1-12-1-511
振替 東京4-35912
定価九二七円(本体九〇〇円)・送料二一〇円

潜在能力が目覚める
真の自分が目覚める

『記憶力・集中力の増大』『知能の向上』
『恋愛・人間関係成功』『強い自分の養成』

あなたを変える驚異のヘッドホン

アメリカで数年前から話題になっている、
『大脳の脳波を誘導し、
人間の無限の可能性を引き出す
というヘッドホンが遂に日本へやってきた。
普通のヘッドホンと同じように
音楽等を聴いているだけで、
内蔵されたパルス波発生装置が作動して
大脳を心地よく刺激してくれる。
何度も愛用しているうちに
知らず知らずのうちに潜在能力が開発されたり、
精神力が強化されてしまうというしかけ。
一度、試してみる価値はある。

●右耳、左耳片方だけにパルス波を流すジャック付
●高音質ステレオ・ヘッドホン仕様
●D/Cアダプター付 ●能力開発マニュアル付

『シンクロ・アルファー』と呼ばれるこの特殊なステレオヘッドホン。ヘッドホン内部に組み込まれた特殊な周波数のパルス波発生装置にその秘密がかくされている。使い方はとても簡単。目的に応じて4つの周波数の中からひとつを選び、スイッチを入れるだけ。あとはヘッドホンを装着して、勉強する、雑誌等を読む等くつろぐ、普通のヘッドホンと同じようにラジカセ等に接続して好きな音楽を聴くだけ。(パルス波は耳に全く聴こえないから、勉強や音楽鑑賞の邪魔になることはない)

アメリカの有名な医学者、M・ギルラ博士の研究で明らかになった、大脳の脳波を共鳴(シンクロ)させる特殊な周波数のパルス波。『シンクロ・アルファー』から発生するこの特殊なパルス波の刺激によって大脳が活性化され、『学習能率向上』『記憶力・集中力の増大』『知能の向上』『精神力・性格の強化』等々の数々の効能が全く努力なしに得られる。

シンクロ・アルファーの多様な効能

■『シンクロ・アルファー』は、4種類のパルス波の周波数モードの切換えができ、

①安眠・深いくつろぎ・性格改善
②瞑想・直観力開発・知能開発・精神力強化
③記憶力、集中力強化・学習能率向上
④大脳の覚醒・自信、意欲、行動力の強化——の4種類の目的に応じた使い分けができる。

『シンクロ・アルファー』の使い方

①自分の好きな音楽を聴く——音楽鑑賞をしながら、潜在脳力開発や自己開発ができる。
②アルファー波音楽テープ、サブリミナルテープ、自己暗示テープを聴く——これらのテープの効果をより一層引き出すことができる。
③勉強中に利用する——BGM音楽をかけながら、あるいは全く無音の状態で使用し、学習能率を上げ記憶効果を倍増させる。
④読書中や他の事をやっている時に装着する。

その他、テープ教材の記憶学習用に、安眠誘導用あるいは眠気防止用にと幅広い目的で利用できる。

7日間無料試用できる

この『シンクロ・アルファー』ステレオヘッドホンを今なら7日間無料試用できる。

■価格(消費税3%は別)
一括払・一九、八〇〇円(送料八〇〇円)
分割払・三、五〇〇円×6回(送料同)

■申込み方法
商品名・住所・氏名・電話番号・年令・職業・一括分割の別を明記の上、左記までハガキか電話で。

α波音楽テープ無料プレゼント中!

今、お申込みの方にもれなく、大脳を活性化させ心をなごませるアメリカでも人気のα波音楽テープを一本無料でプレゼント。

〒107 東京都港区南青山1-26-4
アメリカンライブラリー社 UO④係
電話 東京 03(479)5864
(受付AM8~PM24 日・祭日も受付中)